

貰ひ、歸るや否や、その法を立札に書いて、諸方の辻々へ出した、それを見た彼の老人、怒るまいことか、直に一休のところへ出かけて往つて、前の證文をつきつけ、「三界の大導師ともある出家の身が、證文を反古にするとは、何といふ不埒なことぞ」と怒鳴りつけた一休は極めて平氣なもので、「イヤなに、口授しないといふ證文は入れたが、書授しないといふ誓約はしたことがない」とぬけられて、老人忌々しくはあるが、その上の責めやうも一寸胸に浮ばなかつたので、ぶつ／＼言ひながら、そのまゝ歸つたといふことである、何事によらず、世間のためになることなら、少しは無理なことをしても、これを弘めやうといふ彼が精神は、誠に尊いことであると思ふ

逸話 雀の死活

或る生意氣な男が、雀を一羽掌に握つて一休のところへやつて来て、和尚さん、この雀は生きて居りますか死んで居りますか尋ねた、若し一休が生きて居ると言つたら、握り殺してしまはう、死んで居ると言つたら逃がしてやらう、さて何と返事をするであらうかと待ち構へて居ると、一休それを察して、たゞ一語「無」と答へたばかりなので、その男挨拶もせず逃げ去つてしまつた、其後一休事のついでに、彼の生意氣男の宅に往き、その敷居をふみまたげたまゝで、その男を呼び出し、「どうぢや亭主、愚僧は今この敷居を出るか這入るか、その男何の答も出來ずたい手を拍つて笑つたといふことである。

逸話 一休和尚の臨終

一休和尚の末期の句であるとして、世間に傳へられてあるもの一二にして足らないが、或る處の自書自讃に、
 朦々而三十年、淡々而三十年、
 朦々淡々六十年、末期啼糞捧梵天、
 そして後に、

借用申、昨日昨日、返濟申、今日今日、
 借置し五つのものを四つかへし

本来空にいまそもどづく
 又或る處に藏せる自書自賛には、長髮蓬々として眼を屹と開き、うす赤き衣を着け、丸竹の杖をつき、あすに腰を打かけたる姿で、その賛は、
 柳は緑、花は紅

行脚事畢

今日時節

折主 丈子
 燒二六月雪
 虚堂之再來天下之老和尚一休宗純末期書之是の如く、種々相異つては居るが、兎に角、彼が尋常の人でなかつたことは、想ひやられるのである。

雜錄 道歌問答

この道歌問答を見ると、一休和尚と蜷川新左衛門親當との道交が果してどの位の程度にあつたかと云ふこともわかるし、又一休和尚の人生觀及び其教化、其理想などの一端がほのみるのであるから、茲に之を掲げたのである、
 門松は冥土の旅の一里塚 一休
 馬籠もなくとまりやもなし、

年越は冥土の旅の間屋場か 親當

月日の飛脚足を止めず、 一休

光陰は矢瀬を渡る船よりも 一休

分限に粟津に膳所を使ふなよ 親當

ころ堅田にしまつ唐崎、

金銀は慈悲となさけと義理と耻 一休

身の一世代につかふためなり、

世の中は貧者有徳者苦者樂者 親當

なん者か者さて未ば無茶苦茶、

今日ほめて明日わらく云ふ人の口一休

泣くも笑ふも嘘の世の中、

世の中は乗り合ひ船のかりすまひ 親當

よしあしともに名所舊跡、

一〇はやぶれ衣で出るときは 同

乞食坊主と人は云ふらん、

袈裟衣ありがたそに見ゆれども 一休

これも俗家の他力本願、

衣より袈裟より俗の古襦袢 親當

おのが伎倆で着るぞたふとき、

振袖も留袖とこそかはれども 一休

はだかにすれば同じからだよ、

骨かくす皮にはたれも迷ひけん 親當

美人と云ふも皮のわざなり、

皮にこそ男女のへだてあれ 一休

骨にはかはる人かたもなし、

なにごとも皆いつわりの世なりけり親當

死ぬるといふも誠ならねば、

生れては死するなりけりおしなべて一休

釋迦も達摩も猫も杓子も、

さとりなば坊主になるな肴喰へ 親當

地獄へいつて鬼にまけるな、

鬼と云ふおそろしき者はどこにある一休

邪見の人の胸に住むなる

極樂や地獄かあるとだまされて 親當

よろこぶ人におちる人々、

此世にて慈悲も悪事もせぬ人は 一休

さぞや閻魔もこまりたまはん、

地獄とは何を岩間の苦むしろ 親當

色と欲とで身をやぶる人、

死んでから佛と云ふも何故ぞ 一休

小言もいはず邪魔にならねば、

死んでから佛になるはいらぬもの 親當

いきたる中によき人となれ、

追善にあふた佛が益棚へ 一休

としくくればうかむせはなし

ほとけとは何だらぼうし柿の種 親當

下駄も佛も同じ木の端、

佛にもなりかたまるはいらぬもの 一休

石佛らを見るにつけても、

迷ふなよ五輪の石の墓じるし 親當

つみかさなりてあると思へば、

引導は無事なる時にうけたまへ 一休

末期の旅に趣かぬうち、

ひとり来てひとりでかへる道なるに親當

道教へんと云ふぞおかしき、

ひとり来てひとりかへるも迷ひなり一休

きたらず知らぬ道を教へん、

妻や子が側でなくもきゝいれず 親當

死んでゆく身に何の引導、

極樂は十萬億土はるかなり 一糸

歳々に悪魔外道のながさるゝ 親當

其西方にゆきたくもなし、
昨日過去今日の現世に明日未來 一休

おきての神にねてのみほとけ、
一代の守り本尊尋るに 親當

世の中は食ふて稼いでねておきて一休
さて其後は死ぬるばかりぞ、

肉もなくよくしやれこうべ穴賢 同上

目出度かしくこれよりはなし、
浮世をば何の糸瓜と思ふなよ 親當

世の中は糸瓜の皮のだん袋 一休

そこがぬければ穴へごんぶり、

あら樂や虚空を家とすみなして 同

欲あかを洗ひおとせばさつぱりと親當
襦袢につけしりのりぞたふとき、

煩惱の眼にばいをふんづけて 一休
福はおしいとほしいこのよく、

やけば灰うづめば土となるものを 親當
なにか残りてつみとなるなん、

イツク 一九 【人名】

十返舎一九又は醉齋と號す、戯作者として一家をなす

談話 一九と質屋

十返舎一九、或年夏の初めに、心易き質店
に至り、今火急の要用なり、代りどすべきも
の、時を移さず持参すべければ、しかくの

りあへず

正月ははや神田まで来りけん

すぢかひにつる歳徳の棚

と吟じ出したる滑稽に隣家なる酒店の主人、

之を聞て一九を招くこと頻なり、一九も否ま

んともせず、早速隣家に至れば、主人袋棚の

戸に時鳥を畫けるを示して云ふ、時鳥は俗に

冥途の鳥なりといへば不吉此上もなし、先生

請ふ歌を以てこの不吉を拂ひ玉へと、一九す

なはち筆を走らして、

月は笠鳥の形は簑に似て

これや寶の山ほととぎす

と賛をつく、こゝに於て主人の喜び一方なら

ず、十二分に酒をすゝめて一九を饗したれば

一九は銘酩して辭し歸らんとする時、フト風

金貸し給はれど、誠にやかに作り言して金を
借り、歸る道に其金にて初松魚一尾と酒とを
購ひ、うまさき事をしてやつたと獨りホ、笑み
腹のふくるゝまで飲み食して、仰向けに踏ん
反りかへりながら、大聲に潮來節を歌ひ居た
るとき、質店の小僧、先の品物を催促に來り
しかば、傍の破れ扇に

借金を質においても初松魚

もごめて喰はん利も喰はゞ喰へ

と書いたとある。

雑録 一九の新年

一九、或臘月の除夜に債鬼の煩はしきを避
けんと欲して一友を訪ひたるに主人大に喜び
共に痛飲して興闌なる頃、一九、起ちて踊
らんとして、歳徳神の棚に頭を打ちつけ、と

呂桶のあるを見て、此桶拜借なるまじきやと云ふに、主人イトやすき事なりと答ふ、一九風呂桶を倒まに頭にかぶりて、蹣跚踉蹌として道に出て往來の人々に衝突することしばしばなり、かくして家に歸り、翌朝風呂桶に若水を汲み入れ湯を立て、一浴を試み、頻りに心地よしとて喜び居たるに、昵近なる近江屋某なるもの、新年の祝詞をのべんとて來りたれば、一九これに酒を飲ましめ、且つ入浴は如何にと云ふに、某ソハ何よりの馳走なりとて風呂に入る、一九は急ぎて屏風を引きまはして之を掩い、某が脱ぎおきたる紋付の上下をつけてひそかに家を出で、朋友等の家々をめぐりて新年の祝詞をのべたり、某はかゝる事とは露知らずして風呂より出て見たるに、

我が衣服と主人の見へざれば、さては例の一九が悪戯ならんと、主人の衣服を着て家にかへれば、暫くして一九は某の上下をつけて入り來り、新年の御慶ととなふるに某も手を打つて大に笑ひ、それより再び酒宴を催したりと云ふ、一場の滑稽劇、世の毀譽褒貶に踟蹰するもの、企て及はざる洒落なりと云ふべし

談話 一九と南畝

十返舎一九、或時太田南畝を其邸に訪ふたら、南畝はこれを客室に待たしめ、時間が立てども面會しませぬ、一九もあまりの待遠さに堪へずして遂に歸り去りました、其後、一九が南畝にあひました時、先日は何故に私を客室に捨ておかれたのですかと問ひましたら南畝笑ふて答へますやう、貴殿こそ我を弄ば

れたのである、私は貴殿とこゝろよく飲まうとおもふたれど、不幸にして囊中無一物でありましたから、庭内の桐を下駄商に賣り、辛ふして錢を得て歸りましたら、貴殿のすがたは見へなかつたので、まことに残念であつたこれ貴殿が私を弄んだのでなひかと云ふたところ、洒落の中に云ふべからざる親愛の情がこもつておる。

談話 死後の滑稽

十返舎一九、天保二年七月二十九日六十七歳にて死す、辭世の狂歌あり、

此世をばごりや御暇にせん香の

煙ごごもにハイ左様なら

門人等に遺命し、沐浴に附せずして直に火葬に付せしむ、和尚下火の文を讀み了りて點火

し、樞炎々として燃へ上れば、忽ち爆烈の聲ありて、數個の流星屍中より迸る、會葬者皆恐れて亡魂の現はれたるものとなし、走り且つ僵る、而も後にて檢すれば、豫め玩具の花火を懐にして、死せしものなるを知る、此に至つて沐浴に附せしめざりし理由始めて明かなり、死に至るまで其態度を改めず、死後に人を驚かす、一九の如くにして初めて滑稽の雄と稱せらるゝを得べし。

逸話 パノラマ式

十返舎一九、酒を好み金を得れば即ち飲むそれゆへ常に貧くして家には道具などは何もない、依つて自ら種々の室房器具を畫きて壁に貼るので、一寸見ると立派なる住居のやうに見へる、正月の鏡餅から、三月の雛、五月

の幟、孟蘭盆の佛壇供養にいたるまで皆紙に
書きて壁に貼り、時序の禮に供へたとある、
これは真に面白き方法にして、今日でならば
パノラマ式と云ふべしである。

イツサ 一茶 【人名】

信濃柏原驛の産にして、有名なる俳人なり、

俳話 俳人一茶と愛兒

俳人一茶或時、可愛い小供を天然痘の爲め
に失ひ、ごうしても、其諦めがつきませぬ、
露の世は露の世ながらさりながら
と、其悲しい心の中をば歌ひ出したことがあ
ります。

イツシン 一心 【術語】

●華嚴經に三界無別法唯是一作とあり、萬法緣起
の源なり、●無二の義と專一の義との二釋あり、淨土

論に世尊我一歸命盡十方無碍光如來とあり、

談叢 蔡君謨の鬚髯

蔡君謨と云ふは宋の人であるが、非常に立
派な鬚髯で其頃評判の鬚男でありたのですが
或時皇帝の内宴に侍つて御酒を頂いて居りま
したが、其時皇帝の仰せに、其方の鬚髯は實
に立派なものであるが、夜分寐る時は其鬚髯
は蒲團の中へ入れて居るか、外に出しておる
か」と御問になりた、ハイと云つたばかりで
何とも御答へが出来なる、何時も寐る時、そ
の鬚髯を蒲團の中に入れて居るか、外に出し
て居るかそんなことを思ふたことがなるので
すから、唐突の御問ひに何と御返事の仕様も
なく、何れ今夜こそ試して御答申上ます」と
云つて御前を下り、其夜になりて、よし今夜

こそ試してみようと思ふて、先づ寐た處が、
さてこの鬚髯は夜着の内であつたか外であり
たかと、それを握りて夜着の外へ出して眠ろ
うとするど何だか氣持がわるくて眠ることが
出来なる、はて内でありたかと、又夜着の内
へ入れても、亦何だか氣に懸つて眠られぬ、
イヤ矢張外でありたかと出して見ても穩かな
らず、また内へまた外へ、どうく宵通寐る
ことが出来なかりたと云ふことがある、平生
何とも思はぬ時は内も外もなるのです、それ
に如何であろうかと云ふ心が起れば、直に内
と外との區別が生じて、しかも一夜を眠るこ
とが出来なんなのである、「一心生すれば苦樂
あり」とは此事であろう。

歌 蜘蛛の巢にあれたる駒をつなぐとも

二た道かよう人をたのむな

これは日本一の忠臣たる 楠正成公の歌で
あると申傳へて居る、蜘蛛の巢は風に吹かれ
ては破れ雨に打たれては破れる程の弱いもの
荒れたる駒は力の強き人でも中々之を引き止
めることはならぬ程の強きもの、そこで只今
の歌に至りて弱き蜘蛛の糸と、至りて強き荒
れたる駒とを對照して、蜘蛛の糸を以て荒れ
たる駒をつなぐためしはあろうとも、二心あ
る人をたのむなと云ふ戒めの歌ぢや、さすが
楠公の歌ほどありて、我々の渡世の上に応用
しても至極重寶なる訓誡である、更に一步を
進めて安心の上に応用しても、この二心はど
往生の障りになるものはなる、二心は即ち疑
で、疑は生死流轉の本源であるのです、疑な

く往生するぞと安心のなられた、一心一向の御領解が眞實報土の正因となるのであります

歌

夏衣ひとへに西を思ふかな

うらなく彌陀をたのみ身なれば
これは法然聖人の御詠歌である、夏衣とは
單衣のこと、袷や綿入には裡と表とがあれど
單衣には裡表がない、一心に彌陀をたのみこ
は、單衣の裡表のなきが如く、雜行雜修自力
疑心のはからいをすて、かゝる機までも御
助け候へと彌陀をたのみ奉るのが、うらなく
彌陀をたのみと申すものぢや、疑心はうらた
がいと云ふことで、表は絹布でも裡が木綿で
あるならうらたがいぢや、表も裡もない單衣
ものゝ如きを、うらなく彌陀をたのみと云ふ
のです、

因縁 王燭の忠義

燕の樂毅と云ふ者、大將となつて齊の國を
攻めやぶりた、然るに齊の國に畫邑といふ處
があつて、王燭と云ふ賢人こゝに住みけるが
樂毅これを召し出して燕の國に用いやうと思
ひ、軍中に法度を出して畫邑の地三百里四方
の中へは兵を入れず、軍をもさせぬやうにせ
られた、樂毅すでに軍に勝つて大に齊の國を
破つて後、使をつかはしてかの王燭を招かれ
ましたれども固く辭退してまいらぬと云ふ、
燕の使者申すやうは、此回我が主君軍を起し
て齊の國を破り玉へども畫邑の地に兵を入れ
ざることは其許の賢徳あるを聞き及んで燕の
國へ召され臣下とせんが爲めである、しかる
にもし辭退して來られずは只今からこの畫邑

の在所をかた端から打破つてしまふぞと散々罵りたれば、其時王燭の返答に、

忠臣不仕二君一 貞女不并二夫一

忠義を存する士は二人の君に仕へず、貞烈の女は二人の夫には見へぬ、我が主君齊王政事を怠り玉ふゆへ毎々これを御諫め申せども聞き入れたまはず、止むを得ず在所へ退き農業を事として昨日今日とすぎゆく中、國破れ君亡びたまふ、今我れ存命して不義にくみし、つれなき命をながらへんよりは、早く死するには如かじと云ふて、木の枝に繩をかけて自ら縊れ命終つたとある、これは昔の忠臣の節操、今如來の願力不思議にすがり奉るも亦其如く、もろくの雜行雜修自力の心をすて、一心に阿彌陀如來今度の一大事の後生御助け

候へと彼尊をたのみ奉つたからは、餘へ心をふらう道理はなひ程に

因縁 魏氏の貞節

唐の魏氏と云ふ女は智識と云ひ學藝と云ひ人に勝れた人で、殊に夫彦琛を大切して、専ら貞女の道を守りておられた、諸藝の中で琴を弾するに妙を得て居られたが夫彦琛の死亡後は件の琴を箱におさめて再び取り出されなんだとある、これは未亡人となつた以上は十分に謹慎を表せねばならぬと云ふ意であろう或時國が大に亂れて騒動いたし、徐敬業と云ふ者から戰場へよび出され、豫て其許は琴の名人であると云ふことを聞き及んでおるから今日陣中のつかれを慰むる爲め、一曲弾じて聞かせよ」と懇望せられた、すると魏氏は忽

ち顔色をかへて、我が覺るたる琴は夫の心を
慰めん爲めでありて、餘の人々の爲めに弾じ
ては二心になつて全く女の道にあらずと存じ
まして、さしも大切なる琴なれども、打破つ
て捨てました、然るに唯今是非に一曲弾せよ
との御仰せはさらく御無理とは存じませぬ
ぞ、私がこの指あるゆへに、ケ様な所望せら
るゝので、恨めしいは此指である」とて、懷
劍を取つて五つの指を切り落された、見る人
聞く人これこそ誠の貞女なりとて、感心せぬ
ものはなかつたとある、一心一向と云ふは阿
彌陀佛におひて二佛をならべざるこゝろと云
ふについて、蓮如上人の忠臣は二君に仕へず
貞女は二夫をならべず」とある語を引きたま
ふもつまり此意であります。

イツミシキフ

和泉式部

人名

越前守大江雅致の女なり、和歌を以て願はる、

和泉式部と狩禁止

和泉式部が夫保昌に伴はれて丹後の國へ趣
かれし時、此國のある山には鹿が澤山に住ん
で居ると云ふことを聞き、保昌は面白きこと
に思ひて人を雇いておい出させ、明くるを遅
しと待ち兼て居たが、夜の闌なる頃、鹿の聲
イト哀れに聞ゆ、保昌は已に五更に近からむ
と云ふに、式部直に

ことほりやいかでか鹿の泣かざらん

今宵かぎりの命とおもへば

と詠み、夫の狩を諫めましたら、保昌も歌の
理にせめられ、遂に思ひを止めたとある、こ
れより以後は其山の狩を禁止せられたさうで

す。

和泉式部と押繪

和泉式部は肥前の杵島郡錦浦と云ふ處に
生れたもので、後に故郷の友達が、ドーカ今
一度あの奇麗なすがたを見せてもらいたい、
國へ歸つて下さるまいかと頻りに手紙をやり
ましたら、式部は若い時の姿を押繪にいたし
まして、其上に、

故郷にかへる小袖の色くちて

錦の浦や杵島なるらん

と、一首の歌をそへておくつたと云ふことで
ある。

和泉式部の無常観

小式部、幼稚の頃に庭の櫻花の咲きたるを
見て、其花はしさに其花を折りて遊び居りし

に、母の和泉式部、それをるや否、

小式部よ其花おるな唯あそべ

又來ん春は何をながめん

と詠しましたら、小式部は取りあへず

露の身を嵐の山におきながら

又來ん春と云ふぞ墓なき

こゝに於て、和泉式部は其返歌の意味にて無
常を觀じ、道心堅固になられたとある、

和泉式部娘の死に驚く

誓願寺三卷傳に和泉式部の因縁が書いてあ
る、今其大要を摘んで御話し申ませう、和
泉式部は源頼光の家臣保昌の妻でありまし
たが、性至りて伶俐にして、法華經を讀誦し
義理をよく領得しておりました、其娘小式部
の内侍と共に日本に名をあげたる和歌の名人

特にして、世に希有なるところである、もろくの智者この人はとほからずして、作佛を得べし、佛にならるゝであらふと申しますると申し玉ふに、この事辨せずそれはわからぬ魚子と菴摩羅樹と發心の菩薩と、此三事は因時は多けれども果を成ずること甚だ少し、今正に之を試み試験をしてみようと云ふからはじまりた鷹と鶴である、その故事を和泉式部これやこの白尾の鷹に餌を乞はれ、鶴のかはりに身をすてし人、かゝる大慈大悲のあはれみにかぎりなき御ほどけなりと云ふことを思はずしては、佛を拜した所詮はないと云ふころをよまれたのである。

イツベン 一逼

人名

名は眞眞、一逼と號す、時宗の開祖なり、明治十九年

今上天皇より圓照大師の謚號を賜ふ、
逸話 一逼上人と法燈國師
時宗の祖師一逼上人が、由良の法燈國師に參せられて、

唱れば我の佛もなかりけり

南無阿彌陀佛の聲のみぞして

と云ふ和歌を示されると、國師は「それでは

聲のみぞしてと聲が残るから未徹底である」

と斥けられた、それから上人も工夫して、

唱ふれば我も佛もなかりけり

た、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

とせられた、國師はこれを見て、其徹底せる

ことを承認せられたと云ふ話があります。

因縁 一逼上人の廻國

一逼上人、信州善光寺に詣で、佛の加護を

祈り、善導大師の二河白道の木尊を寫し、伊豫に歸りて窪寺に草の庵を結び其本尊を掲げて専ら稱名を勵むこと三年終に悟る所あり即ち一の偈文を作りて圖の側に誌す、時に文永十年、上人三十五歳の時であつた、それより廣く此義を弘めて遍く衆生を救はんと思ひ立ち、先づ諸國の靈場を拜して佛の力を借りらんものと、四人の弟子を引きつれ、伊豫管生の岩屋、大坂の四天王寺、宇佐八幡、男山八幡等に詣で次で熊野權現にまいりて百日の間祈願をこらしましたが、感應あつて權現より一偈を授けられた、處が上人の悟る所能く神の御告に符合したので、大に喜びて自ら一遍と稱し、勸進帳及び、念佛札を携へ、先づ九州を巡りて四國に至り、更に京都に出で、

イトウジンサイ

北陸道を経て信濃に趣き、武藏の國より上野下野奥州をめぐり、常陸をすぎて再び武藏にかへり、伊豆相模より東海道を西に向ひて京都に入り、次で山陰山陽に教へを弘め、伊豫にかへりました、斯くの如く、天下至らぬ處なく巡り、ほどなく攝津兵庫の觀音堂に來り自ら著はしたる書物を悉く火中に投じて云ふやう「一代の聖教今日ことごとく滅して、たい南無阿彌陀佛を留む」と、門弟を集めて戒めを與へ眠るが如く命終られたのは上人五十歳の時である。

イトウジンサイ 伊藤仁齋 人名

京都の人にして名は維棠、字は源佐、近世儒學の大家

談叢 伊藤仁齋の貧學

なり、

伊藤仁齋は京都の人で、其家は代々商賣を業として居たのであるが、仁齋になつてから始めて儒學を修め、刻苦自ら勵んだのである。親戚の者はこれをこぼんで、儒者になるよりか醫者になる方がよいと、色々忠告をしたが、仁齋は其忠告に従はなかつた、それからして家はますます貧乏になつて、人の勸告も一層甚しくなつたが、仁齋は志を執ることとます／＼堅く、後ついに大儒となつた人である、或時歳暮になつて糯米を得ることが出来ないので、妻は跪いて、家計の艱難は如何程あつても、妾はもとより甘んじておりませんが、忍びないのは何も知らぬ小供でありませ、隣家に餅のあるのを見て羨み、しきりに強請つてやめませぬ、口では阿りては見るも

の、妾の腸は断れるやうであります」といつて、涙を流すので、仁齋は机に凭つて書見をし、黙つて何も云はなかつたが、早速着ておる上衣を脱いで妻に渡したと云ふことである。

イナダ 稲田 【地名】

常陸國四茨城郡にあり親鸞聖人の舊跡を四念寺と云ふ

因縁 彌七同行夫婦の篤信

親鸞聖人稲田の御化導中に於ける信者の美談をここに記すことと致しませう、或時聖人四十八願を讀題として一日に一願づゝ御教化ならせられたことがある、時に彌七と云ふ至極貧苦な人がありまして、女房と二人あひに着物は一枚しかないので、代る／＼着てまいりて居りました、十七願の時に彌七が参りま

して、明日こそは第十八願の御教化、王本願とあるはこれぢやとある程に是非とも此方まいりたしと云へば、女房は中々承知を致しませぬ、貴方は今日まいられたから、明日は私の當番、ここに五障三従の淺間布き身なればこれを聞きはずすことはなりませんと云ふ、色々相談は致したれど別に好き工夫もありませぬから、苦肉の策を考へ出し、女房を葛籠の中に入れてつれてまいりたごある、さて稻田の御坊へ着するなり、葛籠を椽端におろし彌七は正面に跪きゆる／＼御禮をさげて居たが、やがて聖人は高座へ上られた、第十八願の御説法を諄々噛んで含める如く誨へらるゝと、難有やら尊いやら、満座の人々いづれも歡喜の涙に袖を絞りました、處が彼の彌

七の女房です、最初の程は靜に聴聞して居たが餘り尊さに己を忘れ大聲あげて泣き出した人々不審におもい、「彌七殿あれはどうしたのか」と尋ぬるゆへ、彌七はケ様々々な次第でござると、ありし次第を委細に話したら、聞く人々もその殊勝なる志にみな／＼感心した、其事がついに聖人の御耳に入り、深く御讚歎あらせられて仰せらるゝやう、「彌七出かした、經に設滿世界火必過要聞法會當成佛道とありて、なりふりかまわぬが佛法の席、サア早く出してやれ、彌七かしこまり葛籠の紐を解けば裸體に齊しき褌着た女房、その時聖人の御歌に、

皆人の死出の旅路を行くときは
一重の着物肩にかゝらず

過去よりの十二一重をぬぎすて、
裸でまいる彌陀の浄土へ
此世にある間こそ、帯とか衣服とか貯も
すれど、死んで行く時は何物が入るぞ、彌七
の女房はやぶれた着物をまどふておれど、こ
れさへ肩にかけてゆくことはならぬ、たとひ
十二一重とかざり立てた着物も、皆是娑婆の
置土産、彌七の女房と同様に丸の裸でま
いのちやと御詠み遊ばした。

因縁 高光夫婦の發心

三河國に安部駿河守高光と云ふ士がある、
夫婦の間に月待花待と云ふ六つと八つにな
る子がありたが二人とも奇麗に生れついて可
愛らしき子達でありたから、兩親は非常に寵
愛して育て居られたが、或時二人とも大病に

かゝりた、其處で高光夫婦は狂氣の様になり
て看病して居られたが、病勢はおい／＼つ
りて來た時、二人の子達が兩親に向ふて云ふ
には、私等はやがて死にますほどに父様も母
様もごうぞ念佛申して下されよと云ふて手
合はせてたのむけれど、兩親ともに後生に
心懸けのなるものゆへ、何を云ふやらどうか
／＼に聞流して居る間にざらりと命終りた、
二人ながら一時に死したことゆへ、兩親の驚
きは非常なもので、云ひ出しては泣き思ひ出
しては悲しみ、鳥の鳴かぬ日はありても、月
待花待の二人の子供の事を思ひ出さぬ日はな
かりた、あまりの悲しみて身體も大に弱はり
やゝもすれば、氣鬱病でもかゝりそうなので
鬱散の爲めに京大坂を見物しそれより關東地

方まで遊歴せられたが、常陸國稻田近傍にて
松の木陰にて夫婦のものが休息して居たが、
旅のつかれにう／＼と眠るなり、夢の中に
月待花待の二人があり／＼とあらはれて申す
様、汝等は後生に心懸がうすいゆへ、我等は
汝の子と生れ、死んでみせたも、はやく無常
を視じて後生を願へよの催促ちやぞよ、これ
より西に稻田と云ふ處ありて、親鸞聖人と云
ふ念佛の大導師がまします程に、この聖人の
御教化をうけて、はや／＼我が浄土へまいれ
よ。

花は散る月は空しく入相の
西こそつねの住家なりけり
と、一首の歌をよむなり、二人の子供は金色
の相たとなり、紫の雲に乗じて西の空へか

くれたと思ふなり目がさめた、兩人ともあや
まりはて、直に夢の指圖の如く稻田の御庵
室へまいり、委細をつぶさに言上し、だんだ
んと御教化を蒙り、無二の信者となりて終に
親鸞聖人の御弟子となり、三河へかへりて一
の庵室を立て、生涯念佛して目出度く往生せ
られたとある、教善妙善とは聖人より賜はり
たる兩人の法名です、其庵室が後には寺とな
り、高光山善生寺と云ふもの、即ち是れなの
である。

イフリハシ 動橋

【地名】 北陸線動橋停車場の所在地、

因縁 篠生寺の因縁
蓮如上人吉崎に御逗留の頃、動橋と云ふ處
で日を暮し、非常に御難儀のあまり路傍の民

ごも、さすが風雅の家に育つた人で、花を愛する心から、白浪の名を立てられても、花ゆへならば、盗人と云はれても耻ケしくなひ、この身は制敗におつても厭ひはせぬとの御歌ぢや、この花を愛する人は花ゆへなれば身命をも惜まぬ、道を樂しむ人なれば「朝に道を聞て夕に死すとも可なり」て、道さへ聞けば死すともさらに恨みはなると云ふこと、法を愛すると云ふもそれと同じことで、雪山童子が半偈の爲めに命を捧げられたを初めとして住蓮坊安樂坊の如き、本光坊の如き、皆これ法の爲めに一身を犠牲に供したものである。

インエン 因縁 【術語】

因とは種子、縁とは其種子の發用を助くる力即ち雨露水土の如きを云ふ、

詩 枯木不逢春 幾春を迎へても枯木に花の咲く例はなる、雨露の縁はありても咲くべき因がなひ故ぢやこれは起信論の中にある因縁但縁無力門と云ふの例に當る、又、春風來り百卉青々在る庫之粟粒不萌、これは何程内に因がありても、苗代時に土藏の中に積み重ねておいては芽を生せぬと云ふことで、縁闕但因無力門と云ふに當る、内外の因縁が揃ふて打てば響くと云ふ如く、内からは萌してくる、外からは誘ふて來る、催し萌す因と縁とが相合ふ時に初めて成就すると云ふが、因縁具足圓成門といふに當る、當流の御安心も光明の縁に催され名號のゆはれを聞き開き、因縁二つながらそなはりて、初めて安心安堵の身となるので

ある、これを正信偈には「光明名號顯因縁開入本願大智海」と仰せられた、
偈 袖のふり合ひ多生の縁
 外を歩行して他人同士、袖を振り合ふでさへ多生の縁であると申す位なものであれば、況して親子兄弟夫婦と縁を結び合ひ、又朋友親しくするのも容易な因縁ではありませぬ、してみれば一家に住みて同じ鍋の飯を食ひ合ふものは、今日不平のなきやう、何事も堪忍辛抱を仕合ひ、又朋友中も互に信を守り親しくせねばなりませぬ、こゝを思ふにつけても佛と衆生の深き因縁は又格別なものであるそもく曠劫多生の昔より佛は衆生につき添ひ玉ひ、衆生己が業方に依りて六道に流轉し禽獸蟲魚と種々の形を受くるも、佛はあはれ

みて之を離し玉はず、其輪廻の苦海を出離させずはおくまいの御哀愍の程を思へば勿體なくて言語に絶する次第であります、我等御互は其大悲の御心を微塵も知らずして、唯明ても暮ても五欲に迷惑して、徒に此生を送ると云ふは實に歎かしきことではありませぬか。
 聖德太子和讃にも、
 大慈救世聖德皇、父の如くにおはします
 大悲救世觀世音、母の如くにおはします
 又
 多生曠劫この世まであはれみ蒙る此身なり
 一心歸命たえずして奉讃ひまなく好むべし
 とある、善光寺如來の御歌には
 伊勢の海の清きなぎさはあらばあれ
 我は濁れる水に宿らん

と云ふがある、又、或大徳の御歌に
これ程によれつもつれつする彌陀を

たのまぬ人の心はかなや

と云ふもある、ケ様なる御慈悲を思へば、我等は只大悲の親様と、深き因縁を結ばれたることを幾重にも喜ぶのである。

インゲワオウホウ

因果應報 【術語】

身口意に作す所の業は、順現、順次、順後、等の別はあれども決して味没せず、必ず報ひのあるものなり、

談義

蛙、王を請願す

或る處に、種々の蛙が集つて一群をなして居つたが、各自我儘勝手を云ひ張つて、ドウも治まらないので、ジュピターといへる神に祈り、一人の王を降して下さいと願をした、ジュピターは慈悲深い神のことであるから、

なるべく蛙の災害にならぬやうと思ひ、一つ

の木頭を下し、これを汝等の王と定めよとの

命であつたので、蛙共も、初のほごは木頭の

王を敬ひ尊んで居つたが、だんだん日を経る

につれて、王の心の温和柔順なのに、次第に

慣れ近かづき、遂には輕蔑するやうになつた

ソコで再びジュピターに他の王と取替へて下

さいと願ふと、ジュピターも怒つて、一羽の

鶴を下された、鶴の王は領内に來るや、否や

直ちに暴虐殘忍の振舞をして、蛙を一匹づゝ

呑み始めたので、蛙共の難澁は以前に百倍し

こは思ひの外のことであること、大に不満を訴

へ、又も、ジュピターに王の取替を願つた、

するとジュピターは最早この歎願の次第を聞

入れないで、汝等が喧しく不平を訴ふる所の

禍は、汝等各自の不心得から、起つたものであるから、汝等各自之を忍ぶより外に方便はないといつて斥けられたといふ。

歌

よきあしき實を後の世にむすぶらん

今咲く花は前の世のたね

これは因果應報の道理を詠まれた歌である

惟無三昧經の中には、

一日一宿有二八億四千萬念、念々不息、

一善念亦得善果報、一惡念亦得惡果報、

如響應聲、如影隨形

と仰せられて、一日一夜の間に八億四千萬の念がある、その一念々々が、善き事を思へば善き果報となり悪き事を思へば悪しき果報となる、丁度、響の聲に應ずる如く、影の形に隨ふやうなもので、善きことも悪しきことも

來世にはキツト實がなる、それが例證として今咲きたる花は去年の種であると云ふ歌のころちや、今世に三毒の種蒔をしておけば來世は地獄、今世で信心の種をまいておけば、來世は極樂淨土の往生ちや程に。

因縁

女猫の恨み

武州の北足立郡堀の内村に人見某と云ふ人の妻で其名をたちと云ふものがありまして、或年の三月二十九日に玉の様な奇麗な男の子を産みまして、夫婦の中の總領息子の事ですから、蝶よ花よと下にもおかぬ様に可愛がりて寒い風にも當てぬやうに生長きくし、目出度く五月の端午もすまして、その九日の朝の事、其家に六七年も伺ひ居る女猫が四匹の子を産みました、すると其内儀さんが傍に居

て、面倒くさい嫌なものを産みくさると、小言を云ひながら、「一疋産めばオ、能く産んだと言ながら、取つては前の泥溝の中へ投げこみ、又産むと「オ、能く産んだ」と取り上げては投げ込み、とうとう四疋の子猫を残らず殺してしまいました、親猫はこれを口惜しく思ふたものを見え、其後は間がな隙がな狙つて居て、其十三日の晝の頃、妻は奥座敷に小供を寐かしておいて、しばらく裏へ出て洗濯をして居ると、小兒が消魂しくキヤツト泣いたから、急いで駆け込んでみると、妻は驚いた小兒の咽から鮮血が淋漓と流れて居る、オヤと云つたきり開いた口がふさがらず、やうやうのことに近寄つて見ると、可愛やもはや息は切れて居る、何者の仕業であらうかと、不

審かしながら近傍を見ると、座敷の椽の端で例の母猫が、よい氣味と云はぬばかりに、一聲叫んで何れへか逃げてしまいました、其中に夫も還つて来て、仇の猫を探しても見當らず、死んだ小供を抱きあげて涙にくれて居られたそうですが、猫でも犬でも産むや否や我子を殺されて怨めしく思はぬと云ふ道理はありませぬ。

櫻栗三年柿八年
此諺は善悪因果の報に遅速あると云ふことを、桃や栗の實を結ぶに遅速のあるに準へて申したものであります、そこで桃や栗は苗を植へてから三年目に實を結び、柿は八年せねば實がならぬと云ふ、又梅などは實の遅きもので、十三年を経て漸く實が出来ることあり

ます、因果の報も其道理で、順現業順次業順後業と云ふ遅速があつて、現世に於て爲したる因業が直に熟して此世で其果報を受くる、之を順現業と云ふ、又現世で爲せし善悪の因業が、次生で果報を受くるを順次業と云ふ、又現世で爲したる善悪の因業が二世三世乃至五世七世と先の世で果報が來て受くるを順後業と云ふ、例せば、現世で正直な人でも不幸にあひ種々なる災難を受けることがある、ことは如何なる譯かといへば、前生に於て其不幸なる難事を受くる因業を蒔きおきし爲めに其悪果が今生へ報ひ來りしのでありますから又今世其正直實體の果報は、必ず次生か乃至二世三世の先に受くるのであります、而して又現世は人に迷惑をかけたなり、人を困らせ

るやうな不正な人が、反つて金を儲けて而も贅澤なる暮しをしておるものがある、これはどう云ふ譯かと云は、前生に於て財物を受くること云ふ因業をなしたる善果が今生へ報ひ來たのですから、又今世で人を困らせるやうな悪因業の果報は後生にて必ず受くるに相違ないのであります、依て是等の道理は、因果の譯を知らない人は、唯現世ばかりの有様を見て、過去未來の譯柄を知らざるが故に、種々な疑難を起すのであります、すべて因果の道理はかやうなものですから、もしや因果の理にくらき人は、この事をよく御承知になりたきものであります。

櫻栗三年柿八年
種を蒔かされば其果の生へ來る例はないで

す、依て善因を蒔けば善果が来り、悪因を蒔けば悪果が来る、これが最も見易き因果應報の道理であります。

米蒔けば米がはゑるぞ何ごとも
人は知らねど種が正直

と云ふ歌もあり、

瓜の蔓に茄子はならぬ

と云ふ俚諺も、皆この理にて、種次第にて果のあらはれるものであります、依て人は何事をなすにも倫理道德を中心として、誠の道を行ふと云ふ善因さへ蒔けば人と生れて来ることが出る、禽獸の種を蒔けば未來は禽獸の果を受ける、地獄の因を蒔けば地獄、餓鬼の因を蒔けば餓鬼、畜生の因を蒔けば畜生と云ふ様に、蒔いた因のはゑると云ふが、因果應

報の道理である、この因果應報の大道理を説いて、而も善を勧め悪を懲し王ふが佛教であります。

インドウ 引導 【術語】

死者を葬場にたぐるとき、其棺前に立つて行くを引導と云ひ、又死者に對して法語を説くをも引導と名く、

因縁 引導の始まり

唐の黄檗禪師、佛道修行に全力を傾けて永く故郷に音信せず、母之を恨みとし、何とかして我が子にめぐりあはんものと、泗水の邊りに旅宿を初め、諸國行脚の僧を無賃にて宿泊せしむる事となせり、而して老母は宿泊させたる行脚の僧に手づから洗足をなせり、これは目的のある事にて我子黄檗は足にあざあり、それを目印として巡りあはんとの心算な

り、或時、偶然、黄檗この家に宿す、生憎黄

昏ゆへ自ら洗足してあざを檢する能はず、黄檗は母なることを知れども、名乗りをすれば菩提の妨げと思ひ、わざと知らぬ顔をして一夜を過し、翌朝早々に出發せり、後に母は之を聞きて大に驚き、周章狼狽して泗水の邊に到れば、黄檗は川を越へてハヤ川の向ふにあり、一生懸命に聲をはり上げて呼べども、後ろだに向かず、母大に歎き其薄縁を歎じて泗水に身を投じて死せり、其時、黄檗立ちかへりて其死骸を上げ、

北星河水流不盡、

我子五逆入無所、

一子出家九族生天、此語妄語諸佛亦妄語、と唱へて火葬に付し玉へば、烟の中に母は形をあらはして、天人の相となり天上へ生れた

り、これが引導の始りである。

ウの部

ウイリヤムテル 【人名】

獨逸人なり、慷慨家を以て著はる、

愛兒頭上の林檎を射る

獨人ウイリヤムテルは慷慨の士なり、嘗て太守の暴政に抗し捕へられて獄に投せらる、一日、太守テルを召し、テルが愛兒を三百尺の外に立たしめて、其頭上に一個の林檎をのせ「汝もし愛兒頭上の林檎を射落しなば我れ汝の罪を許さん」とテル毫髪を誤りて其愛兒を失はんことを恐れ、斷じて否を唱ふ、然る

に愛児は却つて殊勝なる覺悟を示せり、父に向つて曰く、「大人の射術は兒能く知る、躊躇し玉ふことなかれ」と、此に於てテルは涙を揮ふて弓矢をこれり、觀る者皆汗を握る忽にして羽音高く響きアツと云ふ間もなく林檎は雪となつて碎け散り、テルの愛児は自若として身動きもせず、これ父の技倆を信することの深きに由る、萬衆の喝采天地を動かす、されど殘忍なる太守は、猶テルの欠點を見出さんとす、曰く「汝が二本の矢を携へたるは何故ぞ」テル泰然として曰く「これ他なし、もし第一矢過つて愛児を殺さば、第二矢を取つて君に献すべかりしなり」と、太守聞いて大に怒り、テルを再び獄に入らしむ、テル毫も屈せず笑つて其爲すに任す、第二矢君に献す

べかりしの一語、慷慨家の面目を發揮して遺憾なし。

ウエモン 宇右衛門 【人名】

播磨太田村の人にして、名高き妙人なり、

因縁 入法の因縁

宇右衛門、若い時分には至つて殺生が好きでありた、或日、村の南端にある土橋の附近で筥をかけて蝦をこつて居る所を、手次の住職が通りかゝり、何と思はれたか、宇右衛門がこつて籠に入れ路傍に置いて居る蝦を川中に蹴り込み、又川にかけてある筥を流し、其上自分の下駄を脱いで宇右衛門の頭部をなぐり其場を去られた、血氣盛りの宇右衛門は大に腹を立て「おのれ糞坊主めが」と思ひて其儘我家へかへりありし次第を殘らず、兩親に訴

へた、兩親は之をきいて云ふやう「あまり其方が殺生を好み、未來三惡道へおちるが可愛さに、大悲の親様が手次の御院住の手を借りて、目にものみせて御意見下されたのぢやぞや」と、きびしい言葉が強く應へたと見へ、其時より翻然として先非を悔悟し、如實の御法義を聽聞する様になられたのである。

因縁 寛廣の度量

隣村の某、佛壇を新調したりとて、宇右衛門に遇ひし時いふやう「近頃私は佛壇を求めましたから見に来て下されよ」と、宇右衛門即ち某を訪ひ佛壇を拜み、そこへの挨拶して歸りしが、其後佛壇の引出に入置きし二十五兩の金子失へるに氣付き思ふやう、宇右衛門は至て正直なる念佛者なれど、凡夫の悲し

きに、大金を見て、フト盗み心を生じたのであろうと、則ち女房にかく語りければ、女房も夫の疑を尤として之に應せしかば、某は直に太田村にいたり宇右衛門を訪れ、左も云ひにくげに「宇右衛門さん實はケ様／＼と、有りし始末を物語り、「あなたを疑ふと云ふにはあらねども、間違ていも持ち歸られて居はせぬかと存じて尋ねるのです」と云ふた大抵な人でありたならかゝる疑をかけられたら怒るであらうに、宇右衛門は怒る氣色もなく聞き終りて答ふるやう「ソハ私の盗みしなり許して下され」と云ひつゝ二十五兩の金を出して罪を詫びました、其後、某上方に居る息子と語りて佛壇の引出にありし二十五兩は宇右衛門の盗みしにあらずして息子の持出せ

し事實がわかり、宇右衛門に金を返して其無禮を詫言したら、宇右衛門却つて氣の毒なるおもゝちにて「それでは前生にて借りて居りませんでしたか」と云ひつゝ、其金を受取りたごある、これは金を盗んだと云ふ嫌疑をかけられた時には、今生では盗まねども前生にて借りて居たのであると深く信じて居たから一言の辨解もせずして二十五兩を返金したのである、それゆへ後日に至り、息子が持ち出して居たと云ふ事實がわかり、大に其冤罪をさせたことの都合を謝しました時にも、亦格別驚ける色もなく、「それでは前生に借りて居りませんでしたか」と云ふ如き奇矯の言を出したのである、盗人と疑はれても怒らず、間違ひであつたと聞いても責めず、洋々たる

大海の如き寛廣の度量は、そもく何處から得來つたのであろうか。

偉大なる感化

宇右衛門、息子に嫁を迎えましたが、此嫁甚だ慳貪邪見な人で、舅へ不孝をすれども、宇右衛門は一言もどがむることなく、何事も皆約束事とあきらめて目を送りましたが、或時、舅の言語のいひやう己が心になはぬとて、庭にありあふ横槌を取りて投げつけましたら、宇右衛門の額にあたりて血がだらりと流れました、息子はこれを見るなり大に憤り、速に追ひ出そうとして女房を引き立て門口まで出かけたらか、宇右衛門は大に驚き、我子の袖を引きとめ詭言を云ひましたら、息子の云ふには、これ程の不孝もの切りきざん

でもあきたらぬものを、何故留め玉ふや」といへば、「さればこそ、あの様な心得違ひのものをもろうたは其方の不仕合、己が宿業のなすところなれば何事も業感とあきらめよ」と云ひて、御内佛へ燈明をあげ、血をふきながら、「さてもく地獄一定の愚痴のこの野叟めが淺間しき心より嫁を吐りしゆへ嫁が腹を立てました、これ全く私があしきゆへである御許し下され」と云ふて稱名をよろこばるゝ姿を見て、さすが邪見の嫁も誠に後悔して、ひたすら誤りましたから、夫も漸く納得して無事におさまりましたとある。

因縁 木綿三反

宇右衛門、女房の辛勞して木綿三反を姫路の御坊へ参詣の節賣つて來て下されとたのま

ウスヒトウゲ

れ持ち行きしが、先づ御坊所へ参詣し御教示を蒙りて難有さに己を忘れ、木綿三反御冥加にあげて我家へかへり、つく／＼考へ、女房に相談せず上しことを大に苦慮し我家へ這入り兼て門にたゝすみ居れば、女房咎めて、「なせに内へ入り給はぬぞ」と云ふ、宇右衛門 據なく、右の次第を語りて詫ければ、女房涙を流して云ふやう「よくこそ上て下された、もし私に相談下さらば、止めることは必ずなるに、これも御佛の御方便であります」と云ふて、それよりますます厚く喜ばれたとある。

ウスヒトウゲ

碓氷峠

地名

東山道上野と信濃との國境にある嶮山にして、高さ二千三百尺、

鬼又兵衛の奮闘

川島又兵衛は近江商人の標本とも云ふべく天秤棒一本から仕あげて立派な商人となつた人で、堅忍不拔の氣象をもつて如何なる艱難辛苦をも厭ひませんでしたから、遂に鬼又兵衛と云ふ異名さへ取りました、これは近く天保年間の人である。

或時、この鬼又兵衛が旅商賣をして碓氷峠にかゝりました、「碓氷峠と云ふは東山道上野と信濃との國境にある峻しい山で、高さ二千三百尺と云ひますから随分高いもので、木曾街道の咽喉に當り、東海道の箱根山と木曾街道の碓氷峠とは關八州の關門になつて居りました、途中で一人道連れが出来まして、ごちからも十貫目程の荷を負ふて喘ぎ、此峠をの

ぼりましたが、丁度土用の炎天で只さへ苦しい所を重荷を負ふてこんな峻しい山へかゝつたのですから、さすがの又兵衛も少し弱つたものと見へまして連れの男と共に少し涼しうな所を見立て、一休みしておりましたが、連れの男は餘程弱つたものと見へて吐息をついて申しますには、「いかに世渡りとは云ひながら、こんな峻しい山路を暑さも厭はず重荷を負ふて行かねばならぬとはなさけない、一層の事、私は百姓になつた方が勝かと思ふ」と云ひますと、又兵衛の申しまするに「實は私も今歎息して居た所ですが、私の歎息は貴公の歎息とはまるで違ふて居る、私の思ふには、斯んな峻しい山が五つも六つも續いてあつたなら大した金儲が出来のちや、なせと

云ふに此山が一つであつてさへ貴公のやうに商賣を止めて百姓になりたひと云ふ人がある位だから、もしもこれが五つも六つも續いてあつたら誰もこの信州路へ旅商賣するものはなからうと思ふのちや、そこを私がつけこんで一人で商賣したら、濡手で粟のつかみ取り一家を興すは目の前ちや、さてこそ私が斯うゆう山の五つも六つもないのを残念に思ふておるのちや」と云はれたので連れの男も大に感心いたし、それより一心に商賣に力を入れて、これも後には一廉の豪商となりましたそうです、又兵衛はかやうな氣象でございますから、老年の後には立派な豪商となられたそうです。

ウバキクタ 優婆掬多

【羅漢】

大護と譯す、佛滅後百年に出世し、自ら羅漢果を證せり、
因縁 優婆掬多と尼

優婆掬多は佛滅後一百年に出世せられましたが、眞の釋迦に逢はなんだことを大に慨きて、何とかして佛在世にあつた人に出會ふて釋尊の有様を聞きたいの思ひより艱難辛苦して探しましたら、丁度其頃百二十歳になる尼が居て、この尼こそは釋尊の有様をよく知るであらうと云ふ處で、弟子を便にやつてこの趣を尼に傳へましたら、尼の申すやう、私は釋尊に逢ふたなれども釋尊の有様を残らず知ると云ふことは出来ませぬが、知つて居ることだけ御話し申しませうと云ふた、優婆掬多は使の返事をきいて直に尼の處へ御出かけなされた、すると尼は優婆掬多の來ぬ先に鉢

に油を一杯盛つて入口の戸の敷居に置き、そ
 しらぬ顔して元の座につきて居た處へ優婆塞
 多が来て、内へ入らうとする刹那に、件の油
 の鉢に躓きて油をこぼされたれば、尼がそれ
 を見て大に歎き、「釋迦の御在世に於てそつ
 かしいと云ふ評判の出た訶留陀夷すらかゝる
 粗麤はなるのに、今釋尊の後繼をする優婆塞
 多がかゝるそつつかしい有様とは、これ實に
 世の末になつた證である」と殊の外なげかれ
 たとある。

ウヘスギケンシン

上杉謙信 【人名】

獅虎又は景虎と云ひ、後ち難髪して不識庵謙信と號す、

武土道の精華

天正元年正月、甲州の信玄卒して喪を
 發せず、北條氏政山中兵部をして私かに謙信

に告げしむ、謙信たま／＼春日山水門に於て
 朝餉を喫したり、これを聞きて俄然箸を投じ
 ながら歎じて曰く、「さても残念のこととしてけ
 り、我れ好敵手を失ひぬ、信玄は人傑にして
 また實に關東の鎮たりしもの、我れ戰場に唯
 を決するに到らずして今や則ち空し」と涙潸
 然たりき、家臣等信玄の死を傳へきよて、此
 機に乗じ一擧にして甲州へ軍扇を擧ぐべしと
 云ふ、謙信叱すらく、「我が敵己になし、何ぞ
 甲州に馬を入るゝの要あらんや、且つ敵の弱
 所に乘じて虚をつくが如きは義ある武士のな
 すべき本意にあらず」とて、遂に甲州へ兵を
 出さざりき、これ武土道を重んじ、且つ胸中
 餘裕あるもの、所爲にあらずして何ぞ。

逸話

上杉謙信の俠骨

上杉謙信は日本武土の花である、武あり文

あり俠骨あり、謙信、武田信玄と川中島に對
 陣しました時、甲斐は山國なれば塩が出来な
 るものであるから、今川北條二氏相謀つて其
 送路を絶ちましたので、甲斐の民大に苦しみ
 ました、其時謙信、書を信玄に贈つて申すや
 う、「我れと君と争ふ所は干戈である、今承れ
 ば駿相二州鹽を送らずして君を苦めておると
 云ふことであるが、何たる卑劣なことであり
 ませうか、私は今から北越産の鹽をおくりま
 すから、ごうぞ自由に御用ひ下され」と云ひ
 又國內へは令を下して、鹽商人は精々廉價に
 して鹽を甲斐國におくれ、利を恣にして敵
 國の民を苦しめてはならぬぞ」と云はれたそ
 うである、それを聞いて甲斐の國の人々は深

く其恩義に感じたとある。

上杉謙信の辭世

上杉謙信は、天正元年三月十三日、病を
 以て長逝せり、其辭世に曰く、

一時榮辱一杯酒、四十九年天地空、
 今而不問死生境、歲月匆匆短夢中、

極樂も地獄もともに有明の

月の心にかゝる雲なき

ウヘスギヤウザン

上杉鷹山 【人名】

名は、治憲、鹽山は其號なり、米澤の城主、

家訓と婦女訓

上杉鷹山は米澤の藩主なり、藩政久しく紊
 亂し民力困弊せるを慨き、儉素自ら率い徳化
 下を懐け、竟に百年富殖の基を開くことを得
 たり、諸侯伯仰ぎて師表とし、白河樂翁の如

きも、亦尊崇最も至れりと云ふ、其家訓に曰く、

- 一、國家は先祖より子孫に傳候國家にして、我私すべきものには無之候
- 一、人民は國家に屬したる人民にして、我私すべきものには無之候
- 一、國家人民の爲めに立たる君にて、君の爲めに立たる國家人民には無之候

右三ヶ條御遺念有間敷候事
又、婦女訓に曰く、

女房といふはたとへば朝顔の蔓のごとく
夫は垣のやうなものにて候、此垣にすがり申さず候へば花さき實り候ことはこれなく候、垣に離れ候へば唯草むらにとゞまり人の詠めどもならず、見す／＼花も

さかず、果は牛馬の爲めに踏み散らされ
又來る年に咲くべき種もなく、惜き花の色を一年切にて影も形もなくなり候事に候、されば又夫はこの花を愛して水をそぎ露をふくませ、取り育て、花を咲かせあかず詠めてはやがて散り果て候へば又來る年こそ見めと種を取りて圍ひおき候へば、幾年も同じ咲き分け、しほり紺それ／＼色を失はず、行末めでたき花さき榮へ候ことに候、此心を思ひやりて夫は女房に情あり、女房は本より夫を大切に、夫婦睦まじく候へば其子孫繁昌して長く孝をつとめ、なきあままでも由々敷吊はれ候ことは我人も願はしく事にはこれなく候哉

破れ垣にも花咲く朝顔あり、かよはき蔓も垣根を力に榮ゆへし、これ實に夫妻相離るべからざるを示したる妙喻にあらずや。

ウメダウンビン

梅田雲濱 人名

名は義實、通稱源次郎、雲濱は其號なり、和漢の典籍に述じ、山崎闇齋の學を宗とす、

勤王の赤誠

安政の獄に際し、梅田雲濱の縛に就きました時には、妻は病魔に襲はれて苦しんで居りましたので、雲濱は筆を執つて臥室の壁に、

妻は病床にあり兒は飢に泣く
此心偏に戎夷を掃はんぞ欲す
如今死別生別を兼ね
唯皇天后土の知るあり

と云ふ七絶を書かれたとある、獄に下つた後

ウメダウンビン

は糺問甚だ厳しく、鞭を受けるやら、石を抱かすやら、いろ／＼と責め立てましたれど、「辛酸を嘗めて心臓の如し」で、毫も屈服いたしませぬ「我れ只尊攘の二字を知るのみ」と云ひ放つて、意氣ます／＼盛んであつたそ

うです。
安政五年十二月、頼三樹等二十餘人と共に江戸に檻送せられた後には、

君が代を思ふ心の一筋に
我身ありとは思はざりけり

と詠じて、自ら死を期して居られたが、舊病復た熾んになり、翌年の九月十四日、江戸小倉藩邸の獄舎で亡くなられたのである、其後明治の御代となり、勤王の功を追賞して正四位を贈られました。

歌話 夫婦の眞情

梅田雲濱が京都東山の観音堂に假住居をして居られた頃は、非常に貧窮の淵に沈みて、其日々々の生活にも事欠くばかりであつた、或時、妻が飯を焚きたいと思へども、薪木がなかつたゆへ、甕の前にすはりて歎きのあま

冬枯の軒の妻木も焚きはて、

庭に落葉のつもる間もなし

と詠じた、雲濱は奥の間に居てこれを聞き、ア、天なる哉命なる哉と云はれたので、妻は大に驚き、さてはつまらぬ愚痴をこぼして夫の心を痛めたことの恐れ多やと思ひ、直に、ものたらぬ住居も今は住まれけり

こゝろ慰む君あればこそ

と詠み直されたこと云ふことである、こゝろが夫婦間の眞情にして、クーパー氏の所謂「純潔なる愛情の充滿する家は四邊到る處歡樂ならざるはなし」と云ふ處でありませう。

ウロゼン 有漏善

酒は煩悩の異名にして法身の壽命を漏し失ふの義なり、其漏を有するの善根を指して有漏善と云ふ、

滑稽 權助の繩なひ

下男の權助が、朝早くから起きて、馬屋の口で繩をなうて居る、午前十時頃までかゝりて、餘程なへたであらうと思ふて、後ろをむいてみると、漸く三尺程しかなる、あれ程汗水ながして精を出し、朝からなうて居るのにタツタ三尺よりなるとは、ハテ合點がゆかぬと、よくよく調べてみると、馬が尻口か

ら首を出して皆食ふて仕舞ふて居たのであつた、これは實に滑稽な話ぢやが、我々が善根や功德をつみても丁度これと同じことで、積む下から煩惱の馬が食ふてしまふのである、

ウンゲインダイガン

雲華院大舎 【人名】

名は大舎、雲華と號し、後に雲華院と云ふ、豊前古城正行寺の住職にして、高倉學寮の講師なり、

逸話 雲華院師と頼山陽

頼山陽の名が未だ世間に知れ渡らぬ以前、大坂の新町で流連して囊中無一物の悲境に陥つた、樓主人に怒り、罵詈訶笑すること甚しかつたので、山陽は妓に命じて紙を展べしめ立所に十數枚を書き飛ばし、これに手紙をつけて雲華上人の許へ送らせた、雲華院は其頃本願寺難波別院で説教して居られたので聴衆

は師の高座をこりまいて熱心に御法話を聴聞して居たが、妓樓の使が其高座の下に至り、之を捧げると云ふと、師は直ちに金三十兩を出して其書は購はれたので、聴衆皆驚いて問ふて曰ふやう、彼の放蕩しておる人は何人でありませうか、師の答ふるやう、これ天下第一の豪傑頼山陽先生である」とこれより山陽の名が漸く高ふなつたのである。

逸話 珠敷を殺して山陽を救ふ

頼山陽、或年の大晦日に債鬼にせめたてられ、門生淺田宗伯に手紙をもたせで、金三十兩を拜借したいと云ふて、雲華院師の許へつかはされた、師はこの手紙を読み終つて、大聲にて宗伯を叱して云はるゝやう、歸つて貴様の師匠に云へ、大晦日の夕方になつて金を

借りに来るたわけがあるか、金が入用ならな
せ二三日前に云はぬ、逆も出来ぬと云へ」と
云ふて座を蹴つて起られた、宗伯は致方がな
いものですから歸ろうと思ふて門を出やうと
すると、師は追ひ來つて云はるゝやう「待て
〜折角友人のたのみを断るも氣の毒ぢや、
之を持つて木屋町の質屋某の所へ行き、御講
師様が云はれたと云ふて、三十兩借りてゆけ
と、持つて御座る珠數一連を興へられた、宗
伯すなはち命の如くして金を得てかへられた
ので、山陽も深く其眞率なる友誼に感激せら
れたとある。

逸話 雲華院師の頓智

雲華院大念師の寺へ頼山陽が尋ねてまいり
それから兩人同道して耶馬溪を見物し、廣瀬

淡窓先生の宅に至られた、其時三人合作しや
うではなひかと云ふので、孔子が立つて居る
釋迦がねて居る畫を書いて、其贊を大舎師か
書くことになつた、すると大舎師は、直に筆
を執つて、
孔子三世を知らず、釋迦絶倒して笑ふ、
と書かれたので、山陽も淡窓も大に感服せら
れたとある。

教行信證の歌

西方是の如きの教

八萬四千餘

靈瑞花時に見る

法王嘉會の初め

行

もし人行足なくば

到り難し涅槃の城

獨りたのむ彌陀の力

横超六字の聲

信

法海たい能く入る

阿彌陀佛の徒

名を聞て己を忘るゝ處

探り得たり信心の珠

證

十劫莊嚴の土

精を凝らす抑も誰が爲めぞ

娑婆の夢を覺め了れば

花は開く七寶の枝

ウンゴ

雲居

人名

名は希賢、把不住軒と號す、雲居は其字なり、京都妙
心寺の禪僧、

逸話 雛僧の機智

三代將軍家光、たま〜鷹狩に出で、品川
東海寺の辨當所に入る、雛僧二人出で、給仕
す、家光海上を指して曰く、彼の帆かけ船を
急に止めて見よと、之を聞かや、一人の雛僧
は畏り候とて、直ちに起ちて楹先の障子を
鎖し、他の一人は承り候とて其儘兩眼を閉
ぢたり、家光、兩人の頓智を稱し、殊に目を
閉ぢし小僧は、一入才智勝れたりとて厚くこ
れを賞したり、此兩眼を閉ぢし小僧こそ、後
年松島瑞巖寺に入り、雲居禪師とて、活禪の
名僧となりぬ。

逸話 雲居禪師と伊達政宗

雲居禪師の白川にあるや、一日出で、仙臺に遊ぶ、伊達政宗、士卒を率ひて狩するに遇ふ、先驅の士雲居に語りて云ふ、我が主人甚だ出家を嫌ふ、之を他に避けよと、未だ避けざるに政宗間近く来る、雲居則ち田畝の間に蹲居す、政宗之を見て、何者ぞ、雲居云ふ、これは白川の僧にて候、政宗笑ふて、白川にてはあるまじ、色が黒きぞ、雲居直ちに、すみ慣れましたと答へた、政宗此頓智を奇とし之を瑞巖寺に迎へたとある。

談叢 雲居禪師と盜賊

松島瑞巖寺の中興雲居禪師が、美濃國青野原と云ふ所を過ぎられたとき、七人の盜賊が現はれ出で財物を與へよといふ、禪師あはれに思ふて囊を探り金七兩を出し、わが所持の

金子はこれのみなり、これを持ちゆきたまへと云へど盜賊等猶飽かず、其衣を剝がんとするに、上人大喝して「汝等飽くことを知らず我が衣を得んとするか、我は沙門の身なれども此寒中に衣なくして歩むこともならず、汝等衣を奪はんとするなれば、我が命をも併せて奪ひ去れ」と云ひ終つて座して合掌せられた、賊等大に驚き且つ悔いて其膝下に拜伏し「われら暗愚にしてかゝる尊き御僧とも知らず、おびやかかし奉りしことイト罪ふかし、此上の願ひは弟子となして導きたまへ」と、各髪を剃りて禪師の門に入つたとある。

ウンセイ 雲接 【人名】

名を殊宏と云ひ又蓮池と號す、仁和縣の人なり、

因縁 出家發心の動機

雲接大師は二十七歳の時、父に死なれ、三十一歳の時母を失ひしが動機となりて出家發心せられたのである、父母の墓に詣で、往事を追想し、泣き叫んで遂に氣絶せられたが、漸く息を返して自ら慶んで云はるゝやう、親の恩は大なる事山の如く、深きこと海にまさる、我れ今正にこの大恩に報ゆべき時來れりと、それから家に歸りて妻に別れを告げられたが、妻は年漸く十九歳であつたれど、善く婦たるの道を知り、少しも恩愛の情をもらさず、心よく「君まづゆきたまへ、我もまた後より靜かに行きませう」と云ふたので、雲接もこのことばを聞いてさすがに哀れと思ひしも道を求むる心が切なるゆへ涙をのんで別れを告げ、天理和尚と云ふに従つて出家し、戒を

受けて僧となられたのである、妻も亦約束を守り、來りて尼となられたとある、それから大徳知識を訪ひて専ら禪學を習はれたが、雲接山の景色を見て大に愛し、これぞ我が命を終るに好き所であると思ひ定め、此處に住まれましたが、近くの人々はこれを聞き傳へて直に寺を建て、これより大に道を弘められました、されど大師自ら思はるゝやう、今や世は濁りはて、禪道も明かならず、衆生の罪は深く根機は拙なれば、いかで悟りに至るを得んやと、さまざまと苦心せられたが、遂に淨土門の易き教へであること云ふことを知り、口に筆に力を極めて弘められたので、到る所の人々皆ことごとく歸依し、日々に盛んになつたとある。

エの部

エイエン 永縁 【人名】

大和興福寺の學僧なり、

永縁僧正の懷舊談

永縁僧正と云ふは大和興福寺の學僧であります。

きく度に珍らしければほととぎす

いつも初音のこゝちこそすれ
と云ふ歌を詠み玉ひたがこれが非常に名歌である
と云ふので、初音の僧正と申したとある
昔は禁裡に於て毎年維摩會と云ふ御法事があり
りた、永縁僧正維摩會の講師に召されて、御

年二十九歳の時に御參内なされた 結構な車
に召され紅衣を着し、大勢の供人ありて車を
轟かし、朴の森と云ふ處まで御出なされたが
車の内にてしみく泣いてござる、終には
我を忘れて聲を上げ、車の中よりころびおち
て御泣なさる、故、御供人衆が「これはマア
如何なるこゝろにて候ぞや」「君子不重不威
と申して、今日禁裡へ上らせ玉ふ御身の上
かやうの有様は何事でござりまするぞ」と申
すと、僧正は涙をおさる「其方達は何も知ら
ぬが、此方の泣くのは外のことではなる、我
れ九つの年に出家せんとて、母につれられて
南都へ下る折柄、この朴の森まで來ると、向
ふより慈善僧正、禁裡の講師に登り玉ふ其御
粧ひ、丁度今日此方の様に車にのりて美々し

て御通りなさるゝ、其時母は我を伴ふて向ふ
の木陰につれゆき、路を避けて我が頭をなで
ゝ云はるゝには、其方これより奈良へ連れゆ
き出家をさすれば、親子と云ふも今日限り、
明日よりは御師匠様を眞實の父母と思ひ、手
習ひ學問精出して、一天の君の御師匠ともな
り、あの様な粧ひで參内する身となりくれよ
母はもとより老年の身の上なれば、其時まで
は生きて居まいけれど、草葉の陰から詠めて
何程かうれしくあろうぞと云はれたが、其辭
を忘れず二十年が間帯をかかず、眠りがさせ
ば繩をかけ、或は股に錐を立つる思になりて
夜る晝ついで學問せしが、今は其功成就して
慈善僧正と同じ身とはなりたれど、樹靜かな
らんと欲すれば風やまず、子養はんと欲すれ

ば親待たず、昔し休みし木陰や腰をかけた石
は替らねども、母は己に世を去りたまふてあ
とに残るは法名ばかり、もしや母公ましまさ
ば、さぞや／＼喜ばるゝであらうものをと思
へば、落る涙をおさへて泣くより外はなるぞ
と云はれたとある。

エイサイ 榮西 【人名】

字は明菴、葉上坊と稱し、後に千光祖師と云ふ、建仁
寺の開山なり、

榮西禪師と大風災

榮西禪師が初めて禪宗を熾んに弘められた
時、たまく畿内に大風災があつた、禪宗の
流行を嫉む輩は流言を放つて禪宗が弘まるか
らかやうに風災が起つたのだと云ふて、譏奏
した、そこで土御門天皇は有司に勅して禪師

を放逐せうと云ふの議があつたが、禪師これを聞いて少しも憂へず、門弟につけて云ふやう「我が事なれり」と、依つて奏して云はるゝに、「風は天地の氣にして人力の如何ともする能はざる所である、もし能く風を作すものあらば、其人は必ず靈なるべし、明主は此人を放逐すべからず云々」かくて群小の讒奏は却つて榮西禪師の幸となつて、禪宗勃興の緒を開いたとある、「禍福二つなし」とはこれを云ふのであろう。

逸話 榮西禪師と貧民

榮西禪師の御在世に、貧乏人が禪師の許へまいりまして、「われ、一家のものは今更食ふべきものもなく、唯餓死を待つより外はないのでござります」と云ふと、それは可愛そう

だ、何か恵んでやりたひ」と思召したが何もなる、そこで本尊薬師如来の後光を引きちぎりて、之を賣りしろなして幾分か米代のたしにせよ」とて御渡しになつた、それを御弟子の人が見て、禪師そんなことをなされては佛罰が當りませうと云ふと、禪師は「ナニそんなことがあるか、佛がこの世にいましたら、何の後光を折つたからとて罰が當らうぞと云はれたとある。

エイセイ 衛生

其生を衛護し生命を全ふするを云ふ、文選に「一自有り經」もあり、

談話 彌蘭陀王と那先比丘

昔、彌蘭陀王が那先比丘に問はるゝには、出家は自ら身其を愛するやと、那先曰く、出

家は自ら其身を愛せず、王の曰く、出家は自ら其身を愛せざれば何故に起臥に安温を得、善美を食ふて自ら護るや、那先曰く、王は曾て戦闘に入りしや、王曰く有り、那先曰く、其時負傷せしや、王曰く頗る瘡を被れり、那先曰く、瘡を愛するが爲めに繃帯せるか王の曰く我れ瘡を愛せず、那先曰く瘡を愛せずんば何故に厚く繃帯して之を保護せるか、王の曰く、唯速かに癒へしめん爲めのみ、那先曰く出家も亦是の如し、其身を食著せず、而も衣食するは用て美を爲し用て好を爲すにあらす、唯僅かに身體をさへて、佛教を奉行せんが爲めのみ云々、この問答の如く、吾等の飽食暖衣する所以は欲を縦にし樂みを極むる爲めではない、唯この身を愛護して人たる

の道を書し、小にしては一家の幸福をはかり進んで法の爲め國の爲めに應分の貢獻をしやうと云ふの思ひより外はないのである。

エオン 惠遠

晋朝の僧なり、白蓮社をたてて専ら念佛を勤む、

因縁 發心の因縁

廬山の惠遠法師、始めは獵師でありました野山をかけめぐりて禽獸を殺すこと其數を知らず、或時水田の邊に母鶴が子鶴をつれて居るを見つけて、すかさず箭をつがへて放ちたれば、あやまたず雛鶴を射止めて、時に彼の母鶴弦音を聞いて逃げもせず、物悲しい聲をして鳴いて居る故、又矢を放ちて母鶴を射止め、二つながら持ちかへり、早速料理をした處が、子鶴の腹は別に異状もなかつたが、母

鶴の腹を截ち割りて見ると、腸が寸々に裂けてあつた、如何な邪見な獵師もそれを見ると頻りに心がしほれ、さて痛はしや鳥類と云へども子はこれ程に不便なものか、さては最前子鶴を射た時、母鶴は其場を逃げもせず、物悲げに泣き居たるが、あまりの悲しみゆへに腸の裂けたでありたかさても無惨な事であつたと深く悔悟し、それより發心して修行せられたが廬山の惠遠法師であります。

談義 虎溪三笑

惠遠法師は二十一歳の時より道安に隨つて佛典を學ばれたが、世は戦争の爲めにさはがしく、靜かに學問して居ることも出来ないやうになつたものであるから、師匠の道安と別れねばならぬこととなり、羅浮と云ふ處へ行

かうと思つて旅立ちせられたが、其途中で廬山を見て心に叶ふたものであるから、この山の陰に住むこととせられた、すると桓伊といへる太守は惠遠の爲めに寺を建て、くれた、そこで惠遠も白蓮社と云ふを設けて、僧も俗もともに阿彌陀佛の前にて念佛を修し淨土往生を願ふやうになつた、これが支那に於ける淨土教のおこる初めであります惠遠は廬山に三十年の間も住みましたが一度も山を出たることなく、其溪に入る處に林があつて、時々虎が来て吼へると云ふので虎溪と名け、遠來の客を見送りするもいつも此虎溪までときめて居られたが、或時陶淵明、陸修靜の二人をおくる時には、互に心が合つて話の面白さに知らず、虎溪を通りすぎ、顧みて共に笑は

れたとある、世に虎溪三笑の圖といへるはこれを畫いたものであります。

エコウ 回向 【術語】

●誦經等の功德を回らして彼の亡者に向はしむるを云ふ、●彌陀即來より凡夫に功德を回施したまふを云ふ、

醫論 狩衣

或人が自分の主人の前へ立派な狩衣を着て出たれば、主人は驚いて、あやしやそれは誰に狩衣御前は狩衣をつくるやうな方はあるまい、誰に借りて來たのぢやと、歌の下句で尋ねたすると其男が、

我が思ふ君の方よりくれ羽鳥と、歌の上の句で答へたとあるこの狩衣は我君から拜領したものでありますと云ふ返事ぢ

や、今之を御安心に合法してみると、我等の如き造悪不善の凡夫の心に、彌陀をたのむ一念の信心の起りたは

あやしやそれは誰が信心

まことに不思議なことであると云へば、我が思ふ彌陀の方よりたまはりて

と云はねばならぬ、法藏因中の強願と正覺彌陀の智力と内薰密益するによりて一念歸命の往益を成す、一度はの御念力か我等へ徹到して下されて、拜む相たも稱ふる口も思ふ心の憶念も、身口意の三業ともに彌陀回向の賜はりものであります。

醫論 良人の羽織

主人が或時妻に向つて唐突に言ひ出すやう「明朝未明に出立して東京へ上らねばならぬ

用向が出来たから、かねて申付けておいた羽織は出来ておるか、明朝は是非着てゆかねばならぬ」と云ひ捨て外方へ出て行いたので、妻は非常に當惑した、先日來の小供の大病で仕立る暇は少しもなかつたのちやが、さりとて明朝に迫つた東上の期限、サア困つたことちやと、差しうつむいて思案にくれて居ました、すると老母の云ふやう、「先日來孫の大病で其方は手離しが出来ぬゆへと思ひ、あの羽織は私が仕立て、おきましたほごに、明朝主人に着せなされよ」と、思ひがけなく老母が差出して下された時には、これは、難有う存じますの思ひより外はあるまい、もし之に反して、老母がまだ縫ふてはなれども、これから今夜中に私が仕立て、やろうかと問は

れるなら、ごうぞ御たのみ申しますと深く思ひを運ばねばなりません、今彌陀の本願は、其方が爲すべき願行の羽織はこの彌陀が五劫永劫かゝつて仕立て、おいた程に、臨終捨命の出立に此名號の羽織着て我が浄土に往生せよと、出来上りてある名號を其儘御回向に預かることゆへ、ドージと希ふ思ひはない、存じもよらぬ御世話様でまいらせもらうことうれしやと安心するより外はござりませぬ

母の乳房
母親の乳房がはつて乳の出るは、母親の方にあるながら母親のものにあらず、母親が吞む爲めにあらず、赤兒が出来たから赤兒の爲めに入用な乳ちや、子持は飯を二人前喰へど母親が自分の乳を呑んだと云ふことは聞かぬ

今が丁度その如くで佛の方に願行成就なされても、皆悉く末代凡夫の爲めである、六字名號の乳房があつても彌陀がその六字名號で成佛したまふに非ず、阿彌陀如來が無量の行を修して、それを六字の乳となし、我等の耳より注入したまふのである。

珍しき吳服物

吳服屋の番頭が珍しる帯や着物を持つて來て眼の前へ飾りたてこれが、何織と云ふ代物これは斯様なよい品と、并べて見せられた時は、美しい物ちや立派なものぢやと思へども、番頭が品物を仕舞つてかへつてしまへばハヤ面白くもうれしくも思はれぬ、それはなせかなれば、唯耳に聞き眼に見たばかりで我物にならぬから其座ぎりになつてしまふ、然

るに其中で一番ほしいと思ふ反物を取り出して、番頭の申すには、此間こちらへまいるといふ事を、貴姉の御實家へまいりた時に話しましたら、御貴家の母御様の仰しやるには、それなら此反物を姉にやりてくれと仰しやつて、代金拂つて下されましたと云ふて、吳服屋から渡されたら、此方から代金拂はず世話いらす、唯くれるといふ母の誠が聞分けられヤレ嬉しや難有やと頂いて我物となつたれば吳服屋は去りて我身一人になつてからでも、ひろげては喜びたゝんでは喜び、納戸の隅で一人して喜んでおらるゝではなぬか、此諭を以て思はれよ、唯今善知識が御法義の店をひろげて下された、此御座では御相をみれば尊い大悲の御尊容、御ゆはれを聽聞すれば不可

稱不可説不可思議の功德、きけばきく程難有
 けれども御座を離れて一人になると、難有く
 もうれしくもなくなる、然るに善知識より今
 日の我等が何より大事な後生の一大事、望む
 所の未來助かる南無阿彌陀佛を、其方に與へ
 てくれよこの如來の勅命、我等衆生に與へん
 爲めに回向成就したまひて」と御文にも仰せ
 られた、此名號は人の實ぢやなる程に、如來
 の親様から其方へ與へさせらるゝ六字ぢや、
 ぞご我身にもらいうけてみれば、たとひ御
 教化の御座は離れても、夜の寐覺めも晝なす
 業の野でも山でも、思出しては喜ばれ語り出
 してはたふとまれ、獨居て喜ばれ稱へらるゝ
 は南無阿彌陀佛、依て蓮如上人は「信の上に
 は一人居て喜ぶが法なり」とのたまうてある

譬諭 乞食

雪にや凍へる食事にや飢へる、今の仕様の
 なる處へ、着物を着せて火にあたらせ、御飯
 をよんでやろうと云ふ、聲を聞たる其時には
 いやでござるの思ひはあるまい、貰ふ思ひは
 腹一杯ぢや、今我々も其通り、末法濁亂の雪
 空に獨去獨來の一人旅、智慧戒行の着物は着
 ず善根功德の食事にかつへ、今が未來と思ふ
 てみれば、泣こかもがこか仕方なる、頭下
 足上と眞逆様に、火の坑さして落ねばならぬ
 手の盡き切つた貧乏人を、本願の正客と呼
 びあげて、我れ無量劫に於て大施主となりて
 もろくの貧窮を濟ふ」末代の悪人案じるな
 五障の女人かなしむな、智慧も功德も善根も
 一名號へたゝみこみ、何にもなしの空腹へ、

ゆづりあたへて助ける程に、其機のなりで我
 たのめ、必ず救ふに間違ひないご、呼びかけ
 玉ふ勅命を、案じる心へきいてみりや、あゝ
 このうのご造作はいらぬ、御聲のきこへたあ
 りなりが、往生ひとつに腹がふくれて、遠慮
 氣兼はずしもなく、御助け候へたのみ奉
 る、着物きせるも御飯たべさすのも向ふの檀
 那、寒さしのぐは着物の力、腹のふくれるは
 飯の徳、貰ふたばかりで自然に腹がふくれて
 暖になる、雜行すてゝ如來をたのむ一念の
 相たが此通り、たのませるも六字の力、往生
 の定まるも佛の願力、一から十まで他力の回
 向、みんなあなたのなしわぎゆへ、貰ふこな
 たは世話いらす、一念仰せにしたがふて、助
 け玉へとふりむくなり、これで一定あれで治

定ご、きばりてかゝる力もいらす、たのむ一
 念のそのまゝが往生治定と安堵の思ひぢや、
 これが南無阿彌陀佛丸もらいの相と云ふもの
 ふるいのとまらぬは着物の着やうがたらぬか
 ら、腹に物たらぬ處のあるのは飯の食やうが
 少いからぢや、捨てた様でも自力がすたらす
 晴れた様でも疑の根切しが出來ず、たのみま
 したご口に領解はのべながら、何となふもの
 たらぬ様な心持で、往生一定に世話のやける
 は、未だ六字のゆはれの聞き様がたらぬから
 ぢやで座を重ねて聴聞するより外はなる。

因縁 福島の關と箱根の關
 昔、瀬川菊之丞と云ふ女形の俳優が上方へ
 上るとき、木曾街道福島の關所にて、其方は
 女に相違なし、この關所は女人禁制、通るこ

とは相成らぬと咎められたとき、私は女形の俳優で瀬川菊之丞と申しますと申上たら、役人の云ふやう、誠の菊之丞なれば何なりとも藝を致せと云はれたから、取あへず、關の戸を叩いては啼く水鶏かなと云ふ句を詠せられたので、關所を無事に通られたとある。

又箱根の關所を越すには、割符がなくては通ることは一切相成らぬと咎められた時、狂歌師が、

御切手はゆるさせたまへ富士三里

すべてのほりし足柄の關と詠んだので、其歌の徳で役人にはめられ難に關所を越したとある、娑婆の關所は歌や發句で通しもうが、此度未來の大關は歌や

發句では通られぬ、唯御回向の南無阿彌陀の六字でなければ臨終の關所は通られぬのである。

エコク 穢國 【術語】

西方の淨土に對してこの娑婆をトコ云ふ、

假語 名は實の實なり

世の中の一切の物にはいづれも名字を有し其名字の示す如く活動しておるものであります、男と云ふ名字のある限りは何處へ行いても男が出て来る、女と云ふと子を生む人間であること云ふことは、古往今來變りませぬ、等しく土をひねつてこしらへたものであるなれど、湯呑で茶を煮ることもならず、土瓶の口から茶を呑みなされと云ふて、御客人の前へ差出すことも出来ませぬ、物はすべて名の示

す如く使用せねばならず、又名の示す所の作用を有しておるものであります、今阿彌陀如来の在す所を淨土と云ひ私共の棲む世界を穢國と云はるゝに付ては、必ず其實がなければなりません、實とは何であるか、私共の心の中には三毒五欲の煩惱がみらくております身體には大小便は申すに及ばず、涙と云ひ唾と云ひ、三日も入浴せぬと汗染みて臭氣もらすやうになる、正報の人身既に此様であるから、依報の國土亦汚穢である、それで穢國と云ふ名がついた、然るに佛の在す世界は之に反し、其國土は無漏清淨にして、其人天は顔容端正であるから、それで淨土と名けたのであります。

エシ 惠思 【人名】

姓は李氏、元、魏の南豫州武津の人なり、出家受戒して禪定を修し、法華三昧を得たり、
 歐陽正と云ふ儒教の學者が、惠思禪師の名高きを嫉み、密かに國王に告げて云ふには、北方の僧來りて、戦を起そうとして居りますと云ふたそこで王は使をつかはして禪師を迎へられたが、容貌氣高くありますから、これは凡人でないと思ひ、禮を厚くして敬ひ大禪師と稱し、却つて歐陽正の偽りを怒り之を罪に落そうとせられた、すると禪師は百方手をつくして赦免を請ひ、自分の住んで居らるゝ武當の南岳と云へる山へつれて歸られたとある、「怨みに報ゆるに恩を以てす」とは是等のことを云ふのであろう。

談義 惠思禪師の臨終

惠思禪師、將に死せんとするや弟子を集めて説法し、後に曰く「もし汝等の中に身命を惜まず法華三昧を修行するものあれば我其法をさづくべし、我は今死せんとするなり」と弟子の中に一人も答ふるものがなかつたのでそのまゝ静かに眠りに入られた、時に弟子の靈辨と云ふもの思はず聲を放つて泣きましたら、師は眼を開いて云はるゝやう「我れ今いろくの聖者に迎へられて、浄土に生れんとするのである、なせに我を驚かすのか」と云ふて、端座して手を合はせ佛名を稱へつゝ死なれたとある、時に年六十三。

エチヨウ 惠澄

人名

名は痴空、愚谷と號す、江戸淨名院の學僧なり、

談義 觀音菩薩の開眼

嘉永六年に初めて亞米利加の黒船、即ち軍艦が相州浦賀の港へ來た時に、徳川幕府の武士から諸國の大名や士族が騒ぎ立て、サアいよ／＼戦争の準備ぢやと云ふ時に、徳川の旗下の武士達新しく甲冑をこしらへて其甲の中に觀音菩薩の像を祭つて、その御性根入れ開眼の供養を東叡山の惠澄律師と云ふ高僧にたのまれた、時に惠澄律師が云はれるには、「足下今將に國の爲め君の爲めに出陣せんとして觀音菩薩を頭に頂くは結構なる心懸であるけれど、觀音菩薩の御力をたのんで一生を萬死の中に得て歸ろうと思ふやうな考なれば觀音菩薩は決して足下を御守り下さらぬぞ、何故なれば觀音菩薩は慈悲を以て心となさる

御方であるから、足下もし大慈悲の心を以て君の爲め國の爲めと思ひて軍陣に臨み國難を防ぎ國民を安穩にしてやらなければ生きてかへらじとの御誓を起されたならば、此心は觀音菩薩の御心 佛の御心と一處になるのであるから、佛や觀音は願はずとも守つて下される、もし足下この心ならば開眼の供養を致さん、足下の心、如何」と詰められたから、某は其説に敬服し、謹んで教に遵はんと答へられたので、開眼の供養をせられたとある。

エツジヨウ 悦成

人名

香月院深勸講師、上足の弟子なり、

談義

悦成師最後の教誨

香月院講師の上足の弟子に、悦成と云ふ學匠がありました、もとは越後の産でありたが

香月院講師の推選によりて越前に入寺し、廢れたる寺を再興し徳化を郷里に施して大に御法義を引立てられたそうですが、嘉永五年十月十五日。死にたふはなけれど今日のうれしさは何にたごへんあ、南無阿彌陀と云ふ辭世を遺して、満八十歳にて目出度く往生をさげられました、悦成師、年老ひて後兩眼ともに明を失ひ、進退不自由になられたが、門徒教導に心を用ゐられたことは老ひてますます盛んでありたそうです、水切村の某の直話に、或時悦成師を水切へ招待することありて、師を駕に乗せて水切の村端へ來りし時、駕の中より「此處はどこぞ」と問はるゝ水切の村端で御座ります」と云へば、「暫

くやすむべし」とて駕をおろさせ「おれの様
な目もみえず足もかなはぬものが、斯うして
あるけるのは、卿等の肩があればこそぢや、
何もかなわぬ我等が成佛するも、大悲弘誓の
御念力があればこそぢや、忘れるなよ此事を
……忘れてはならぬぞよ」と、くれなくも
申されしが、其後幾月を経ずして亡くなられ
ましたから、某は此御語を以て師が最後の教
誨なりとて、一生涯喜びましたと云ふこと
である、この逸話をよくく味ふてもらいた
い、我々の如き智慧の眼はつぶれ、修行の足
腰のたぬ、地獄一定の徒ら者が、後生の大
事に安心して、たのむべきは彌陀如來、まい
るべきは安養淨土と、明に決定のなされたの
は、偏に本願力の迎ひ駕に乗りこませてもら

うたからのことでもあります、ナント御手厚い
御慈悲ではありませんか。

エノウ 惠能 【人名】

姓は盧氏、大鑑禪師と諡す、禪宗の第六祖なり、

因縁 惠能禪師と弘忍大師

禪宗の第六祖惠能禪師が、弘忍大師より法
を授かり玉ふたについて名高き一條の物語り
があるが、今は要を摘んで概略御話し申すこ
と、致しませう、一日、弘忍大師の處へ襤褸
をまとへる乞食が來て申すには、「私は盧行者
と申すもの、何とか御寺へ奉公して如何なる
賤しき業にても致しますから御召かへ下さ
れ」とたのんだ、依て此者を雇ひ入れ七百人
の大衆の食糧を調へる爲めに確をふませる
こととなりた、或時弘忍大師は御弟子に向ふ

て申さるゝには「銘々の安心會得の旨を偈頌
に書きあらはして廊下の壁に貼おくべし、我
一々これを見て宗意に契ふた弟子に法を付屬
し、第六番目の祖師と定めん」と申し渡され
たが、誰一人として出る人もなかりた、時に
上足の弟子神秀と云ふが、早速書いて壁に貼
た、其語に、

身是菩提樹 心如明鏡臺
時々勤拂拭 勿使塵埃

と云ふ偈頌びや、是に於て七百人、人々「さ
すがは神秀ほどある此人こそ第六祖となるで
あろう」と羨まものは一人もなかつた、それ
を確部屋の隅にある盧行者がき、傳へて、一
人の僧を呼んで申すやう、「近日神秀の偈頌を
承るに文句は面白い様なれども、惜いこと

には宗門の意にかなはぬ、それについて私し
聊か存じつきがある、御苦勞ながら書いて下
され」と云ふ、そこで彼の僧、けしからぬと
おかしく思ひながら、たのむとあることゆへ
心得たと云ふて筆を把ると、

菩提元非樹 心豈明鏡臺
本來無一物 何處惹塵埃

と書いてくれと云ふゆへ其通り書いて廊下の
壁に神秀の偈頌と并べて張りてもろうた、其
日弘忍大師本堂へまいられ、壁に貼りたる二
枚の偈頌を見て御尋になりたから、一は上足
の神秀、一は確部屋の盧行者であると答へた
すると弘忍大師はニッコト微笑を洩らして御
座りたが、其夜夜半すぎの頃、大衆の熟睡を
窺ふて、彼の盧行者の許に至り、ゆすり起し

ての玉ふやう、汝は實に能く我宗の意をさとり居るゆへ、今夜我法を汝に傳ふるなり、汝これより第六の祖師となれよ、この袈裟と鉢とは、忝くも大聖釋尊の御身に觸れられし衣鉢にて、天竺に十八祖と傳へしを此土の初祖達磨大師が遙々と將來ありて、法を傳ふる重きなされし器なれば之を汝に授くべし、又今日より名を惠能と改めよ、しかし汝こゝに居住せば偏執の大衆より必ず嫉妬の難を受くべし、されば天明を待たず、立退きて暫く難を避くべし」この給ひて衣鉢を授け玉ふた盧行者惠能衣鉢を押し頂き其儘寺を拔出し南方を指して落行いた。

さて明朝に至り大衆達、昨夜法を付屬あるべき筈、何れの弟子に譲りたまひしかと、弘

忍禪師に尋れば、禪師は「我が法は南の方に行けり」と仰せられた、そこで大衆達さては盧行者に付屬ありしに相違なし、急ぎ追駈て衣鉢を取りもせと、道明禪師といへるがさきに立ち、五十人ばかりの若僧を連れ、鉢巻禪で身を固め跡を逐ふて走り行きしが、大瘦嶺と云ふ所の坂を彼の盧行者悠々として登り行きしかば、大衆はオ、イ、と呼はりければ、惠能は跡をふりむいて、ニツここ笑ふて立止れり、大衆側へ立ち寄り「汝何國へ行くか、その衣鉢をおいて去れよ」と呼びければ盧行者鉢を袈裟につゝみて申す様「此はこれ信を表はす迄にて法を傳ふるは心と心なり、袈裟と鉢とは法にあらず、汝等ほしくば持歸れ」と道明禪師の前へ投げつけたり、これさ

へあれば言ひ分なしと五十人が進み寄り取り揚んとせしに、不思議なるかな、衣鉢恰も磐石の如く、持上んとしても少しも動かぬゆへ大衆はたい茫然たるばかりであつた、其時道明禪師三拜九拜して、我が望みは衣鉢にあらす、願くは法を授けたまへ」と申したれば、「不思議不思議悪么麼時那箇是明上座本来面目」と大音に叫んだ、道明禪師その言下に悟りを開いたとある。

エムラセンサイ

江村專齋

人名

儒醫を以て加藤清正に使へ、後、京都に歸りて美作侯

森忠繼の祿を受く、

逸話

江村專齋の養生法

江村專齋は百歳になるも視聽衰へず、嬰鏢たる老人でありたので、後水尾上皇は之を召

エムラセンサイ

エモン

エモン

惠文

人名

名利は二つながら好むべからず、名を好むものは利を好むものに比すればヤ、勝れり、名を好めば即ち爲さる所あり、利を好めば即ち爲さる所なし

羅録

江村專齋の教訓

して、養生の術を問はれました、其時專齋の申上ぐるやう、臣平生たい一の些の字を持つておるばかりであります、飲食些し、思慮些し、養生些し、此他に術はござりませぬ」と奏上したので、上皇大に之を嘉みし、鳩杖、錢帛及び酒茶を賜はりました、そこで賜杖を以て講堂の名とし、聖恩の渥きことを記念したとある。

俗の姓は高氏と云ひ齊の人なり、性質頗敏出家して獨り悟りに入れり、

談叢

惠文禪師と中觀論

惠文禪師は生れつき賢明な人でありまして出家せられた後も師匠と仰ぐべき人がないものであるから、いろ／＼と考へた末、一切經を納めてある經堂の前にて心に誓はるゝやう今經堂の中に入つて探り、經を得れば佛を師とし、論を得れば菩薩を師と致そうと、香を焚き身を清め、經堂の中に入つて手を後ろにして書物を探ぐられましたら、龍樹菩薩の中觀論が手に入つた、これは我れに因縁のある論文であるとして、披いて讀んで行くこと、世の一切法は皆因縁に依りて生じたるものなれば我れこれを空と説くなり、されば

又これを假名と爲す、又これ中道義なりと云ふ偈文があつたので、之を見て大に悟り龍樹菩薩を師として、それより大乘の教を弘むることをつとめ玉ひ、又澤山なる門弟を集めて教を授けられた、名高き南岳の惠思禪師の如きも其隨一であつたとある。

エンリエド

厭離穢土 【術語】

穢惡の娑婆世界を厭ひ離るゝこと欣求淨土に對するの言なり、

因縁

涌蓮師の懺悔
涌蓮と云ふ大徳は娑婆がうるさいと云ふて西山嵯峨の山奥に庵を建て、浮世をのがれて念佛しておられた、或日、他行してさざる留守中に泥棒はいりて、夜具も衣服も引つさらへて盗んで仕舞ふたので、大に迷惑に思は

れ、これは難義なことぢやと悔まれたが、又心を取り直して、

取られしと思ふ心の耻しや

すてし此身の元をわすれて

と詠まれたとあるが、これは自分は寺をすて浮世をすてゝこの山奥で念佛三昧の日暮をしておるのに、捨し此身の元を忘れて、盗まれた品物に執着の心をおこしたことの耻かしやと云ふ御懺悔の意であります。

エンリヨウボン

袁了凡 【人名】

支那明朝の名士にして佛教信者なり、

談叢

袁了凡と雲谷禪師

支那の明の時代に袁了凡と云ふ人があつたが、此人は彼豊太閣の大明征伐の時に明の大將李如松等とともに太閣の征伐軍と大に戦つ

た勇士の一人である、然るに彼は唯の猪武者でなく有名な學者であつて其著述も澤山あるが、別して佛教には非常に熱心にして、自らも信じ人にも教へ勸めた程であつた、或時孔生と云ふ男があつて、この男は人の一生涯に於ける吉凶判断を爲すに最も能く通じて居たので、其土地の評判者であつた、その孔生が袁了凡の人相を見て云ふやう、貴殿は明年諸生に補せられるであろう、又追々には知縣(縣知事)になられるけれども、悲しい事には子供が生れない、壽命は五十二歳位までしか生きられませぬと判断した、處が果して其翌年に嘉善縣と云ふ處の學生に補せられて、ヒツたりと孔生の云ふ所に符合したので、袁了凡は自分の將來の成功や運命は孔生が云ふ

ただけに定つてあると信じて居た、其後、ふとした事から雲谷禪師を尋ね三晝夜の間一室に閉籠つて少しも眠りもせず落ち付き、拂つて静座しておるのを雲谷禪師が見られて、これは變つた奴が来たものぢやと思ひ、「貴様は三晝夜の間座り込んで居ても妄想を起したやうにも見へないが、汝こそ佛道修行の出来る男ぢや」と譽められた、處が袁が云ふには、「曾て孔生と云ふ人相を見るに上手な男が私の一生の榮辱死生はチャント決定して居ることを信じ、それであるから、種々の妄想を書いても駄目であると信じて居りますので少しも一切の妄想を起さないので」と答へると、雲谷和尚が、「自分は今迄貴様を大分豪傑ぢや

と思ふて居た、かくまで平凡な人間であると思ふことは知らなかつた、人の一生と云ふものも運命が定つて居るものに違はなひが、大善大惡の人に至つては運命を束縛することの出来るものでない、貴様は其道理を知らずして孔生の打算中に陥たとして見れば、ほんに平凡な男と云はねばならぬ」と云はれて袁了凡は大に驚き、「それでは運命と云ふものは自由に變へる事が出来るものでありませうかとの間に、「知れたことさ、運命は自分でつくもので他人の製造するものではない」と答へられたと云ふことである、又語をついて云はるゝやう「先づ貴様自らを省みよ」人が今日より以上の出世は出来ぬと云ふた處が、自身を省みて出来ないと思ふか出来ると思ふか

又彼の孔生に貴様に子がないと云ふても自分には子があるかなひかをよく考へてみよ」と云はれた、袁が暫くして云ふやう「やはり私は今日より出世が出来ますまい、子もないらしい思はれます、何故と云ふに、私は兎角樂をする事が好きで、勉強や骨折りが大さうひ、少し才があればそのを鼻にかけたい心が起り、時としては疝癩もおこるし腹も立つし酒も呑みたい佳肴もくひたい、これらの心は幸福をのせる器具でない、して見ると今日より出世も出来ず、子供も授かりますまい」雲谷はこの語を聞いて、よし／＼どうなづいて「それは結構ぢや、全體人と云ふものは兎角自分の悪事を知らない、然るに今貴様は之を知つた、悪るかつたと云ふ今迄の心を取つて

退けて、善い正しい心を入れかへると云ふことになれば、今迄の袁了凡は死んだので、新しい袁了凡が生れたと云ふことになるのである、さうすれば古い袁了凡を支配して居た定つた運命もやはり死んだので、新しい袁了凡を支配する新しい希望のある運命が出来てくるのであるから、今迄の袁了凡とは生れかはるがよかろう」と云はれたと云ふことです、これは中々味ひある語ぢやと思ふ、其後、袁了凡は雲谷禪師の教によつて力めて善を積み萬事に奮勵して孔生が定つて居ると云ふた運命よりも以上の出世をなし、大官となり學者となり間もなく子供をもあげて壽命も長かつたとある、而して其著述の中に「善を爲すには勇氣がなくてはいけない」と書いてあるが

蓋しこれ袁了凡が實驗的の教訓であらうと思ふ。

オの部

オウシヨウシヨウド

往生浄土

【術語】

浄土門の所談なり、彌陀如來の願力に乘じて西方の淨土に生ずるを云ふ、

【例】

おそいとて人も笑はずおそ櫻

早ふ咲いても櫻は櫻、遅ふ咲いても櫻は櫻
早いと遅いとの違ひはあれど、咲いた櫻の花
に違ひはない、五十年六十年の長い歡びも、
一日二日の短い喜びも、先に喜んだも、後か
ら喜ぶも、そんな處に御調はない、信の一念

に往生の業事成辨させて頂くゆへ、それから
以後の相續は、長ふても短ふても共にこれ往
生浄土の道中なのであります。

因縁 千兩役者の芝居

桑名から三里ほど北に多度山と云ふがある
そうなが、其處に名高き神様があつて、如何
なる祈願でもかなへて下さると云ふ事である
から、或年の夏、非常なる早魃にて困難のあ
まり、兩三村申し合せて、彼の多度山に代參
を立て雨請ひを致した、代參の者は神前に跪
いて「何卒雨を下され、もし十分に雨を降ら
せ玉は、其御禮に千兩役者の芝居を御覽に
入れます」と云ふて願ふた、それから二三日
すると忽ち天油然として雲を起し、車軸の如
く雨を下し、苗勃然として蘇つた、さて其

往生をすゝめ給ふたのである。

因縁 嬭姫の後悔

晋の獻公の后に嬭姫と云ふ方があつた、こ
の御方は遠き夷の國から召出されて晋の都へ
來られたのであるが、其國許を離れる時には
非常に故郷を離るゝことを悲んで泣くゝ旅
立をせられたなれど、さて晋の都へ來てみれ
ば獻公の御寵愛も深く、日々百千の官女に取
りまかれ、山海の珍味を頂くやうになると、
斯様に立派な處なれば何故に我は故郷を離れ
る時に、あのやうに泣き悲しんだのであらう
かと、後に至つて前を悔ひられたと云ふ話か
ある、今が丁度其如くで、西方浄土の事を聞
いても、さのみ喜ぶ心もおこらず、只うかう
かとして居るが我等なれど、嬭姫と同じく後

雨の降りたは結構なれど、約定の如く神様に
千兩役者の芝居を御見せ申すのに困じはてた
さりとて神様を欺いては後日の祟りも恐しく
といろゝ相談をして居たが、或老人の申す
に「あの多度山で芝居を打つのは中々容易で
出來ぬゆへ、神様の御札を京都の四條へ御伴
して京都で芝居を御見せ申すがよからう」と
云ひ出したれば、「それは如何にも名案であ
る」と云ふて、早速京都の四條へ御供したと
云ふ昔話がある、今この娑婆は多度の山中の
如く、法性常樂の千兩役者をこの穢土へ引寄
せるは、なみ大體の事では出來ねども、極樂
浄土の京都の四條では何時でも法性の證りの
芝居が見らるゝ、それ故に釋尊は此方より發
遣し彌陀は彼國より招喚して、花の都の浄土

に至つて後悔をせぬやうにせねばならぬ、信
決定の身の上なら、娑婆の終りが淨土の初め
捨此往彼蓮華化生と、迷の故郷あこに見て、
花の淨土の初まいりとは、何たる此身の幸福
ぞと喜ばねはならぬことぢや。

オウチヨウ 横超 【術語】

三蔵百初の次第を経ず、佛頭に乘じて遽に證果を得る
を云ふ、

【歌】 本願は理を非に歩む蟹の足

横に行くのも道の道なれ

斷惑證理と云ふやうに理の當前でゆくのなら、弘法大師や源光阿闍梨の如く定に入るや
ら大蛇になるやら、五十六億七千萬年の末を
待たねはならぬが、不斷煩惱得涅槃と理を非
に曲げて往生させて頂くゆへ、鬼が佛の早が

はりが出来るのぢや、「男女善惡の凡夫はたら
かさぬ本形にて本願の不思議を以て、生るべ
からざるものを生れさせたまふ」のであるか
ら、そこで彌陀の本願を指して横超の直道と
申すのぢや。

オウボウイホン 王法爲本 【術語】

又王法爲先と云ふ、人倫道德を完ふし、國法命令を完
ふすべきの意、

【句】 手に軽く心に重き御狀箱

且那樣から云ひつけられて、何某様へ持て
行く御手紙なら、手には軽けれど、心に大事
／＼の思ひをはなしてはならぬ、主人の仰せ
を大切に守りて、手に軽くとも心には重くう
けねはならぬが御狀箱である、信決定の身の
上なら「定めおかせらるゝ御おきて、一期を限

り守りませう」と、心に重くうけねばならぬ
は王法である。

オウヨウメイ 王陽明 【人名】

名は守仁、字は伯安、姓は王氏、陽明は其號なり、

【逸話】 王陽明の謙嚴

王陽明、若齡の頃に京師に趣く途中で宿屋
に泊りました、其宿屋に艶色比類なき寡婦が
ありまして、陽明に戀慕し、その夜忍びて陽
明の臥床に至りましたが、陽明は猶眠らずし
て書見をして居りました、寡婦は止みがたき
思ひの程をのべて口説きましたら、陽明静か
に九想の詩の意を説きて世の無常を示されま
した、所が寡婦もそれを聞いて涙を流し、教
訓によりて操を破らざりし恩をのべ、罪を謝
して退いたと云ふことである、「闇室に美人に

遇ふて姪心おこらず、以て其道心の堅きを知
る」とあるは、是等を云ふのでありませう。

【逸話】 王陽明と落第

王陽明が官吏になるつもりで試験を受けた
ところがある、ところが生憎落第をした、そこ
で友達が寄り集つて、落第したら定めて陽明
が悲んでおるであろうと云ふので、わざ／＼
陽明の門をたゝいて、今度の落第は實に御氣
の毒な次第で、何とも申様がありませんと
云ふて吊ふてやつた、すると陽明先生嚴然と
して云ふた「落第と云ふことは何も悲しむべ
きことではない、故に予は落第したからと云
ふて諸君に吊はれる必要は微塵もない、しか
し落第を悲しむ人は實に不愼なものである、
そんな人はたしかに吊ふてやるべき價值があ

る、落第を悲まぬ人の前には落第は何でもな
いと云はれたとある。

オキフソライ 荻生徂徠 【人名】

名は雙松、字は茂卿、徂徠は其號なり、鴻儒にして著
述頗る多し。

荻生徂徠の勤勉

荻生徂徠と云ふ人は江戸の生れで方庵と云
ふ人の子である、方庵は醫者であつて幕府に
つかへて居たのであるが、延寶年間に或事柄
からして罪に處せられ上總に流されたので、
徂徠もやはり父に従つて行き十三年の間、其
地に留つて居たのである、何分田舎のことで
あるから書籍に乏しく、別に師友はなく、勉
強したくてもどうすることも出来ない、唯本
箱に「大學該解」と云ふ本が一冊あるので、

徂徠はこの一冊の本を明暮研究したのである
それから赦免となつて江戸に還つてからは一
生懸命に勉強して大學者となり、柳澤氏に仕
へて五百石の祿を受ける身となつた、徂徠は
性質穎敏であつたから、學問に於ても一家の
見識を立て、議論文章も一時を風靡した、徂
徠は幼年の時に兵學を修めたので柳澤氏に仕
へてもやはり兵學を講じて居たのである、平
生書物を読むに、日暮になると檣下に出て、
檣下で字が分らなくなると燈火を點じて讀書
するといふ風で、一寸の光陰も徒にしたない
或年の元日に服部元喬と云ふ弟子が年始の禮
に行くに、徂徠は机に凭つて「孫子」を見て
居た、垢面蓬髮、實に殺風景な風采をして、
新年も元旦も知らないやうに、元喬に向ふて

平常の通り兵學の話をして、目出度いとも何
とも云はないので、元喬は遂に年始の禮を云
ふことが出来なくてそこへして歸つたと
云ふことである。

荻生徂徠と太宰春臺

徂徠、江戸に於て子弟を教育して居られた
時、短褐蓬髮の一書生の來りて教へを請ふも
のがあつた、これ即ち太宰春臺である、凜然
犯すべからざるの氣、眉宇の間に溢れておる
ので、徂徠は心に好漢であると思ひ、問ふて
云ふやう、「予が郷里當時の米價何程であるか
と云ふた、春臺も一介の書生でありますか
ら米價の如何を知らう筈がない、噤然として
答ふることが出来ない、徂徠聲を勵まし
て叱して云ふやう「學問は只文字を弄ぶば

かりではない、經國濟民の議、これ學者の本
領である、然るに米價を知らないやうなこと
では我が門下に容るゝの餘地がありません」
と云つて座を蹴つて立つたとある、春臺はこ
の警訓によつて大に悟り、これより勵精刻苦
遂に經世の學を以て世に鳴るに至つたのであ
るが、この春臺をして經世の學をおさめしむ
るに至つた動機はたしかに、この徂徠の嚴訓
である。

荻生徂徠と伊藤仁齋

徂徠、幼年の頃に伊藤仁齋の門人となりま
した、どうしても學問が出来ぬ、母が學問
が出来ねば生て歸るなど申して嚴訓を下して
おるものですから、徂徠も大に覺悟をきめて
大水の出た時に堀川へ身を投げて死なふとし

ました、仁齊は之を止めて「ナゼ左様な無謀なことをするのだ」と云ふて尋ねましたら、徂徠は涙ながら「私は愚鈍にして學問が出来ませぬから……」と答へた、其時仁齋が懇ろに諫めて云ふやう、「其水に身をはめるよりか書物に身をはめよ、キツと學者になるであらう」とくれん、忠告をせられた、徂徠はこの深切なる忠告を深く腦裡に印し、一生懸命に學問に力をつくされたので、後には非常なる大學者になられたのであります。

逸話 三聖の圖贊

或人、徂徠先生に書の贊をたのみましたから、幅をのべて之を見ると、釋迦孔子老子の三聖が書いてある、釋迦は立ちて仰むき、老子は座して俯むき、孔子は地に拜伏しておる

これは徂徠先生を困らせようと巧んだものであろう、先生直に筆を採りて、
 釋迦立而説空
 老子座而聽之
 孔子俯而笑之
 と書かれたので、其人驚き且つ感じて去りたごある。

オクシモン 抑止門 【術語】

第十八節の「唯除五逆誹謗正法」の文を指して抑止と云ふ抑へ止めること云ふ意なり、

醫論 菊花と小兒

風流人が丹精をぬきんで、菊をつくり、追々天長節も近付き菊も殆んど満開になつたで天長節には御客をして一般の人にも縦覧させようと云ふので花壇をこしらへた、すると隠

居も出て來れば細君も出て來る、小兒から下女下男までが、見事なくと云ふて賞讃する、隱居はそろ／＼東京團子坂の菊人形の話やりかける、細君や下女下男は喜んで聞いて居る、此花が一等ぢや、イヤこれが一番大きなと譽め立て、居ると、五つ六つ位の小兒が飛び出して花壇の近くをうろついて居る、其時主人の云ふやう「誰であろうと此花折つた奴はこの缺で指を切るぞよ」と云ふた、此花を折つたら指切るぞとは、隱居や細君に用事はない、案じられるは五六歳の小兒がたゞ一人花が美しさに折りでもしたら大變だから、「此花折りたら指切るぞ」とは、名は指さねども小兒目當の抑止門と云ふものぢや、今「五逆と正法を誹謗するものを除く」とは、菩薩

オダノフナガ

や聖者の大人に用事はないが、案じられるは凡夫の小兒、腸を立てるやら慾に迷ふやら、如何なるやりぞこなひが出来まいものでもないから、五逆と誹謗法は未造業と云ふてつくりぬ前からつくりませまいとて、ならぬぞよと仰せられたが抑止門と云ふものである。

オダノフナガ 織田信長 【人名】

備後守信秀の二男にして天文三年に生る、攻城野戰枚舉に違わらず、

醫論 織田信長の幼時

織田信長が幼少の頃、庭園で遊んでおりますと、一匹の小さき蛇が出ましたから、信長は其首を握つて侍臣に申すやう、「ケ様にせば勇者と云はるゝであろうか」と云ふと、侍臣の申すには、「これは小さき蛇ではありません

んか、小さき蛇を捕へた位では勇者とは申されませぬ、信長曰く「蛇は小さくとも毒がある、もし小さいからと云ふて侮ると云ふならば、子は主人であるけれども幼少なるが故に其方等は侮るつもりであるか」と云はれたので、侍臣みな懾服したとある。

織田信長の性格

織田信長は幼年の時分から亂暴な質で、襦袢の衣を着し、半袴を穿き、髪を茶箋に結び朱鞘の大小を横へて大道を闊歩して居られた父信秀が死去せられて後、萬壽寺で法會を行ふた時も、やはり例の奇装のまゝにて出席し焼香をなす時、位牌の前に進みて、抹香を掴みて佛前へ投げつけた、如何なる人もこの亂暴なる舉動を見て驚かぬものはなかつたとあ

る、家臣の政秀と云ふ人大に之を愛ひまして度々諫めまされども少しも聞き入れぬものですから、遂に自殺してしまつた、其時にはさすがの信長も驚き入り「我れ今悔ゆるもすてにおそし、これより過を改め行を勵まし大功を天下に奏して政秀を地下に笑ましむべし」と云はれたそうであれど、これも一時の悔悟にすぎなんだから、後年二十四ヶ國の將となりた時、やはり父が佛前に抹香を投げつけたる如き不敵の精神は再び熾の如くもへあがり、爲めに明智光秀の爲めに殺さるゝに至つたのである、鳴かぬなら殺してしまへ時鳥とは、たしかに信長の性格を云ひあらはされてある。

織田信長と料理人

織田信長、毛利の従者を擒にした、或時信長はこの従者に向ふて、「其許は毛利の家では何役を勤めて居たのであるか」と問ふた、すると「私は料理人でありました」と答へた、

「左様なればよき料理をしてみよ、予が口にかなふたならば其許をゆるしてやろう」と云はれた、そこで直に料理に取りかゝりて十二分に心を用いてこしらへ、之を差上りましたがどうも信長公の御心になはぬ、次の日更にこしらへかへて差出したれど、これもどうも御心になはぬ、三日目に差上げたのが漸く御心に叶ふたとの事であつた、そこで料理人の申すやう「初日は毛利家では殿に供へる料理である、二日目は家臣に出す料理、三日目は下人に出す料理であります」と云ふたので

流石の信長公も、之を聞いて大に愧ぢ入られたとある。

オノ、コマチ 小野小町

絶世の美人にして和歌に長ず、

歌 小野小町の雨乞ひ

小野小町は學問が達者で顔容が大層勝れて居りました、中にも歌を詠むことが最も上手で人の手本にもなるやうな歌が澤山あります或年大旱で夏の最中に三十日も四十日も雨が降りませんで水田は白くなつて大きな龜裂が入り百姓たちは心配し、諸所方々の井戸も水が涸れましたから飲水にも困るやうになりましたので、貴い人も卑しい人も都も田舎も皆雨乞ひごか御祈禱ごか大騒でした、小町も非常に氣の毒がりました、真心をこめて歌をよ

んだならば、其真心に天も感じて雨のふらな
いこともあるまいと思ひ、身體を清めて御所
の神泉苑で一心不亂になつて、

ここはりや日の本ならば照りもせめ

さりさては又あめが下とは

と云ふ歌をよみましたら、不思議にも空が次
第に曇つてまいりまして大雨が車軸を流すや
うに降り、誰もく大喜びを致しました、こ
の歌は日本は日の本と書くから日の照るは最
もなわけだけれども、又この世界はあめが下
と云ふから雨が降らないでは名につり合はな
いやうだと云ふことです、天もなる程と思つ
て忽ち雨を降らしたのでせう。

オハタノフヨ

小幡信世

【人名】

上野の人なり、十五にして立身の志を抱き、大阪に赴

きて、石田三成に仕ふ、

談義

小幡信世の忠節

小幡信世と云ふは、石田三成の臣にして祿
二千石をもらふて居りましたが、關ヶ原の戦
ひに三成の蹤跡を失ひ、それを尋ねて江州石
山に至りました時、土民に縛せられ大津なる
徳川の陣屋に引かれた、家康公厳しく三成の
所在を詰問しましたら、信世の答へますやう
私は三成の家來でありますから主人の所在を
知りておるは勿論の事です、されど主恩は海
よりも深くござるから、今自分の身が苦しい
からと云ふて、それを自白するやうな信世で
はござらぬ、たとひ拷問の爲めに骨砕け肉破
るゝの苦しみに遇ふても決して口開きは致し
ませぬ」と云ふた、家康公これを聞いて、「ア

、忠臣である、此忠臣にして今日生命を保つ

ておるのは、三成の死生如何を知らぬからで
あろう、モハヤ拷問するには及ばぬ」と云ふ
て、繩を解き之を放たれた、信世直に近傍の
寺院にいたり、事の顛末を寺僧にのべて、且
つ云ふやう「某幸に明將の特赦に遇ふ、武
士としてこの上もない褒れであるされど、今
にして決せされば、此後如何なる耻辱をうけ
るやら分らぬから、ドーン貴僧我れの屍を御
隠し下され」と云ふて、終に自刃して死なれ
た、家康公これを聞て、ますく其忠節に感
じ哀惜せられたとある。

オフミ

御文

【書名】

五帖八十通、木願寺第八世蓮如上人述、圓如上人編、又
は御文章とも云ふ、

歌

鏡をはいざ立よりて見てゆかん

年経ぬる身の老やしぬらん

鏡と云ふ名をきけば、いざ立よつて見てゆ
きたい、己れがやうに年よりた身は我顔の衰
へたかおそろへぬかを照してみたとい云ふ歌
の意、今八十通の御文は凡夫往生の鏡と御殘
し下された大切な御教化なれば、時々この鏡
に照らされて、二世安樂の身の上とならねば
なりませぬ。

歌

逢はずともさこそ思ひのかはらずば

逢ふよりまさる文の音信

逢ふて話の出来ることなら、郵便葉書や電
信電話はいりませぬ、明け暮れ膝つき合せて
一軒の家に起臥す親子の中では、何程親切な
異見教訓をするかさて手紙を出す必要はなる

か、聲も届かぬ仕方も見へぬ、遠方に居る、子や娘に異見をするには、一行く一句く心を込めた手紙に如くものはなる、布哇や米國に渡航して居る息子に向ふて、随分辛抱して御金をもうけ、身の用心を専に、殊に安物を買ふて鼻を落さぬようにして、息災で戻りてくれい、内にはこうして待つて居る杖柱に思ふ其方、もしも不勉強をして、身を持ちそここのうたなら此上もなる不孝ちや程にこ、書いてやるより仕様はありますまい、今蓮如上人八十通の御文は、貴方の御膝元で直々の御教化を頂く人が目當ちやなる、末代今時に生れおくれ、聲も届かず御姿を得拜まぬものへ御心つくしの御形見ぢやぞや、

後の世のしるしの爲めにかきおきし

法のことは形見ともなれ形見とは、かたちみすがたみの略語で、親にても形見の品をもらうたら、其形見の品を見る度に、呉れたる人の事を思ひ出す、今八十通の御文は誰に下された御形見か、皆御同行方への御形見ぢやぞや。

因縁 大江貞元と貧女

大江貞元と云ふ人の處へ顔色の衰へた貧しき女が大きな鏡を持ち來り、何卒これを御買なされて下され、女の身では大事の道具であるれど、日暮しの難義な爲めに賣代なして飢寒を凌ぎまする」と云ふゆへ、不便に思ふて手に取つて見られたれば、其包み紙に、

今日のみと見るに涙のすま鏡

なれにし影を人にかたるな

と書いてあつた、今日のみと見るに涙の増す鏡とは、翠帳紅閨の中、紅粉翠黛の爲めに朝夕ながめ馴れたる鏡も、身の貧しさに賣り拂ひ、此鏡を見るも今日か暇乞ひ、其中へうつす我が影も今日が見おさめと、思へば涙がこぼるゝ、賣り拂ふ鏡に顔の暇乞ひでさへ、我が影ながら名残おしい、貧苦にやつれたこの姿、必ず人に語つてくれるなど云ふ、あはれな歌のこゝろである、今凡夫往生の鏡たる八十通、日々夜々に御化導を蒙りて居たが、もはやこの御座が御暇乞ひと思へば、只何となく名残惜しう思はるゝであらう、これが現世での御教化のあひおさめと思ひ大切に聴聞せられたいことである。

因縁 ウエルヘルム皇帝の仁恵

獨逸の皇帝に、ウエルヘルムと申す御方があつた、或日近衛大佐某につげらるゝやう、「朕明日は近衛兵の操練を見やうと思ふ、午前九時までには兵士をそろへて朕が臨むを待てよ、佐官つゝしんで領納してまかりかへつた翌朝目がさめてみると九時すぎ、驚いて練兵場へかけつけば、皇帝はさきに出てござる、大佐に御催促、さて事は果て、皇帝は御かへりになりたが、大佐は心に怖れ心痛しておる明日昇殿せよとの御沙汰がある、大佐中心安からず、昇殿したれば皇帝は「前日の苦勞の報酬ぞ」とあつて物品を賜はりた、家に歸り開いてみれば、目ざまし仕掛の時計であつた大佐ますゝ前日のあやまちを悔みつゝ御仁恵をたふとんだ事がある、今御文の御教化が

それで「今日より後は」とは、これまでのことは是非なし、今日よりは他方の信心を得たらん人に相尋ねて信心決定して其信心の趣を弟子にも教へて、もろともに一大事の往生をどげよと教へ玉ひた、これが善知識の朝な夕なの御化導と申すものである。

因縁 一語一萬兩の話

印度の或國の王様が、位と云ひ富と云ひ、一として不如意の事なき身なるに、只一つ不如意なることあり、それは子のなきことにて王子出産のなきことを日頃深く歎いて居られた、或時王様が他國へ行き玉ひた不在中に、フト王子誕生の事ありしゆへに、取り敢へず臣下の者が馳せ参じて謁見の上、王子御誕生のありしことを申上るに、王は只「ニコ」と

笑ひ玉ふのみにて何とも御返答がなぬ、二度申上ても、三度申上ても御返答がなぬ、遂に十度まで重ねて申上し時、王は初めて「オ、左様か、真か」と仰せられて、嬉しさのあまり其臣下に金十萬兩を與えられたと云ふことである、處が其臣下が王に御尋申すには「一度ならず二度ならず、十度申上るまでも御返答のなかりたのは何故ですか」、其時王の御返答に、「もし一度限りにて返答したなら、汝は定めて二の語は繼ぐまい、同じことを十度まで云はせておいたのは、一語々々が鶯の初音の心地で、飛び立つばかり、愉快を感じたからである」と答へられたとある、十語で十萬兩であるから、一語が一萬兩に當るので即ち一語一萬兩の喩とは之を指したものであ

る、後生に大事をかけてみれば、八十通の御文も一字一句が無價の寶の如く味はれます、

オホイシヨシラ 大石良雄

【人名】

藤千五百石を食み、赤穂藩主淺野侯の老職なり、

談話 大石良雄と備前侯

大石良雄は、もと備前侯の家中にて、幼少の時に殿の御側近く仕へて居りました、或時殿大病にかゝらせられ、いろ／＼と藥をすゝめまするけれども、少しも召しあがりませぬので、近従の人々みな困りはて、居ました、其時良雄は「我れ之を差上やう」と云ふて、藥を煎じおきて、自ら殿の御前に出で口を極めて様々に悪口を申しました、殿、大に怒り玉ひ手打にせうとて、病氣ながら立腹のあまり、良雄を追ひかけ玉ふ、良雄はあちらこちら

らと逃げまわる、何分御病中のことゆへ殊に御疲勞あつて、はやく湯を持ち來れ」との玉ふた、その時、待従の人が、右の藥を持ちまわつたれば、引續き二三杯も召しあがつた、後に病氣御本腹となり、良雄の才のすぐれ、且つ忠心の程を賞せられたとある。

談話 大石良雄と淺野侯

播州赤穂の城主淺野内匠頭、元祿九年の頃春雨の降る物靜かな時に、大石内藏之助を召して御酒を下された、其時の仰せに、「この赤穂城は日本屈指の名城にして如何なる大敵を以て攻むることも落城する氣遣ひはなぬ」と云はれた、内藏之助は頭をさげて恐る／＼申上る様「殿の御意にはござりますれど、この城を名城と思召す御油斷あらば、大なる害が御

座りませう、都て日本の名城と申しまするは熊本とか名古屋とか、近くは姫路など名城と申せども、それよりは當時大坂の城こそ日本第一の名城にして、東は志賀や生駒の聳る高山も遠ければ城中を見おろす恐れもなく、スハト云は五番七番の淀川堤をきれば二十里四方の大海となる、北には六國の水を併呑する大河をひかへ、淀川を境にせき止め西に播磨灘を引き受け、南に紀州灘、海水は漫々として諸國の入船も眼下に見下し、如何なる大軍で攻むることも更に落城の恐れなし、されど秀頼公の時には落城したてはありませんか、然るにこの赤穂城は中々大坂城のくらべものにはなりませぬが、それに我君は要害堅固の様に思召さるゝは、御賢慮の至らぬ故

かぞ存じまする」と申上ると、内匠頭、莞爾と笑み玉ひ、今此城には大石内藏之助と云ふ英雄があるから、たとひ如何なる大敵が押しよせるとも落城する氣づがいはなる、内藏之助よ、我れ汝を思ふこと石門鐵城より大丈夫に思ふぞよ」と仰せられたれば、内藏之助、ハット頭を疊にすりつけ、殿の御言が肝玉にこたへ、涙ハラ／＼と流し「コハ勿體なき御仰せ、不肖なる某をそれ程までに思召し下さるか」と、うれし涙にむせばれたとある、其後、内匠頭は吉良上野之助との殿中の騒動が起り、遂に切腹となりた、けれども内藏之助は豫てたのみに思召した殿の御信任があるから、とう／＼四十七人同盟して敵打を致しました、我れ汝を思ふこと石門鐵城より大丈夫

に思ふぞよの御信任があついでゆへ、粉骨揮身の報恩的活動をなし、忠臣義士の英名を後世にのこされたのである。

談話

大石良雄と木庵禪師

大石良雄が主人の仇を復すると云ふことは親や妻にさへも話さなんだが、それ程に秘密にしておることを残らず打明けて話した人が僅に二人ある、一人は木庵禪師にして今一人は細井廣澤である、細井と云ふ人は世間では書家として名を知られておる人であるが、先哲叢談でみると、實に文武兩道の達人である又木庵禪師は學徳兼備の大徳でありましたから、山科を去る時に禪師を訪ふて、いろいろの御話をいたし、復讐の後には、自身や四十七人の爲めに吊ひをして頂きたひと云ふことを

依頼しておいて出發したと云ふことである、これ禪師の心の中にすこしも曇り氣なく、清浄な徳を具へてござるゆへに、大石は安心して秘密も打明け後事も依托したのである。

談話

大石良雄と寺坂吉右衛門

淺野侯が殿中にて吉良義英に斬りつけたと云ふ大騒動の起つた時、足輕の寺坂吉右衛門が早の使として三日三夜に播州赤穂に居らるゝ國家老大石内藏之助の許へ知らせた、江戸から赤穂まで百七十里の道を三日三夜にかけつけるのであるから、十二分に疲勞しておると大石は吉右衛門を玄關へ呼んで、大音聲にて馬鹿ものめ不届ものめと目の玉の飛び出る程に叱りつけた、なせなればこれが警覺と云ふもので、叱りつけられて内心に怒氣を

帯びたから身體がシャンとする、もしも之に反して、吉右衛門大儀であつた、さぞ疲れたであらうと云ふやうな、やさしい言をかけたなら、吉右衛門は腑ぬけのやうになつて仕舞ふから、それでわざと怒鳴りつけたは、身體を弱られぬやうと云ふ大石の用意周到なる計ひと申さねばなりません。

大石良雄の和歌

大石良雄、既に讎を復し、細川家に御預けの後詠める歌あり、曰く、

水にうつる花やもくすに浮かへて

散りしをうらむ庭の梅ケ枝

自盡を賜はり従容として死に就くの時、

極樂の道はひとすじ君とともに

阿彌陀をそへて四十八人

が云ふには「上杉の方で軍兵を出すなら、キツト歸り道を追ふのである、此日中になつてから殊更兵を出すと云ふことはあるまい、大方これは浮言であらう」と、果して其通りであつた。

其後父に別れて松山藩邸に捕はれることになつたが、其時良雄が、謹んで平生の心得を忘れてはならぬと戒めると、良金は「私は不肖ながら數年大人の教訓を受けておりますから今この大節に臨んで兒女の如く卑劣な振舞は致しませぬ、もはやこれが今生の御別れ、未來で再び慈顔を拜するでありませう」と答へて、父子一生涯の別を告げたが、自盡の命令が下つた時には、良金は父の手紙を刀に巻いて坦然死に就いたと云ふことである、實に

今ははや心もはるゝ身もはるゝ、浮世の空にかゝるくもなし

オホイシヨシカ子

大石良金

人名

主税と稱す、赤穂老臣大石良雄の嫡子なり、

大石良金と父の教訓

大石主税良金は父良雄に似て非常に剛毅な性質であつた、復讐の目的を達して義士一同凱歌を奏して泉岳寺に憩んだとき、良金は僧徒に戯れて云ふやう「君等は芝居の試合は見ても未だ眞劍勝負の試合はしらなひだらう、今にも上杉の追手が來たら、此處で一大決戦をして、君等の眼りを覺してやろう」とて刀を舞はして踊つたとある、さて其日の午後になると、或者が上杉の軍兵がやつて來たと云ふので、衆人は大に騒ぎ出したすると、良金

斯父にして斯子ありと云ふべしであります。

オホウチヨシタカ

大内義隆

人名

後柏原天皇の費用を辨じて太宰相大貳に補せられ後に兵部卿となる、

大内義隆の辭世

大内義隆、家臣陶尾張守が爲め、長門國大寧寺に殺さるゝや、

打つ人も打たるゝ人ももろともに

如露亦如電應作如是觀

と詠んだ、此時家臣冷泉判官隆豊は、指を切り其血を以て大寧寺の扉に記して曰く、

みよや立つ雲も烟も中空に

誘ひし風の陶も残らず

陶尾張守は頓て毛利の爲めに亡されてしまいました。

オホヲカタツスケ

大岡忠相 【人名】

徳川幕府の臣にして越前守と稱す、公事を裁判して和曲なく智量衆に超ゆるを以て名あり、

談議

一人の子に二人の母親

或時、江戸に一人の女がありました、夫に死別れて、たよるところもないので、人すゝめるを幸ひ、或御屋敷に奉公することに致しました、しかし生れたばかりの乳呑兒があつて、奉公の身では育てることも六ヶしいと云ふので近在の乳呑子をなくしたばかりの女の處へ里子にやつて育て、もううことに致しました、さて其女は十年ばかりもつとめてかへりました、もとより我が子を我が手で世話したい心から、これまでたび／＼御ひまを願つたのでありますが、いつも今暫らくと云

はれて、とう／＼十年にもなつたのであります、そこで早速里親からわが子を引き取ろうといたしましたが、里親は其子の智慧のあるのを見込んで、未々は此子にかゝろうと思ふて居たのでありますから、兎や角いつてかへそうも致しませぬ、しかたがありませんから奉行所へ訴へて出ました、そこで大岡越前守は二人を子供とともに白洲に呼び出して取調にかゝりました、里親は「この子は私の實の子でございます」と申立てる、實の親は、「イヤ私の實の子でございます、この人の處に里子にやつておいたのでございます」と申立てます、一人の子供に二人の母親はない筈といつていろ／＼と調べますけれども、やつぱり同様に申立てまするので、さすがの越前

守もさばき兼て居りました、しばらくして越前守は二人に向ふて、「どちらにも證據とてはなし、この大岡もさばき兼ねた、しかたがない、其子の中において、手を取つて引きあへ勝つた方に其子を取らせう」と申しました、

「かしこまりました」と雙方より引つぱり合ひましたが、中の子供は痛心に堪へ兼ねて、ワツと泣き出しましたので、實の親はハツと驚いて手を放しました、里親はそれみよといつて立ちあがろうとします、越前守ハツと立つて、「これ待て女」と聲をかけ、「其方こそ偽物だ、あの女は實の母ぢやから、子供の泣き聲におもはず手を放したのぢや、其方はもてが他人だから、子どもの泣くのもかまはずひつぱつたのだ、不屈者め」と叱りつけました

里親はとう／＼恐れ入つたと云ふ話があります。

談議 算盤の名人

大岡越前守、或時出入の庄屋に命じて算盤の名人を雇ひ入れたいから至急に周旋してくれよとたのまれた、そこで庄屋は諸所を尋ねまわりて漸く一人の名人を見出し、同道して越前守の邸に至りました、越前守大に喜び直に引見せられて「汝は算盤の名人なる由、就ては汝に尋ねるが百を二つに割れば何程になるか」と尋ねられた、名人曰く「算盤を御拜借申したひ」と云ふ、庄屋はこの有様を見て大に氣をいらち、百を二つに割ると云ふ位なことには算盤がなければ返答の出来ぬやうなことでは、さても名人とは云はれぬと思ひ、袖を

ひいて「五十ちや」く微聲でしらせた、されど名人は一向聞かざるもの、如く平氣でおる、小使が算盤を持ち來ると、直に算盤に向ふて威儀を正し、一方に百をおき、一方に二をおいて、二一天作の五と算盤をはちき、「五十でござりまする」と御答申上たれば、越前守は横手を打たせられて、「如何にも其方は人名ぢや、百を二に割ると云ふごとき、わかりきりたことでも、算盤にかけねば返答せぬと云ふは、中々小事と云へとも危略にせぬ名人の名人たる所である」と非常に賞讃せられ、早速召しかへられたが、果して非常なる算盤の名人でありたそうです。

談話 小供の裁判

昔、江戸にて大岡越前守が町奉行をしてこ

ざる時分に、小供が寺へ手習ひに行き、其戻りに喧嘩をして、一方の子を殺して仕舞ふた處が殺された子の親が公儀へ訴へ出で、何卒して我子の敵を取りて下されよと云ふ、奉行大岡越前守の仰せらるゝ様、我子を殺されたるゆへ腹の立つも最もちやが、何心もない子供で致したことをゆへ、どうぞこゝを聞きわけて勘忍をしてやりてくれ」と云はれたれど「イヤ、彼はなかく一方ならぬ奴でおとなを欺く位な奴でござる、依りて是非々々敵を取りて下され」と云ふ、越前守は「それで子供心で殺したか、おとな心で殺したかを調べてみるから、子供心でありたならば勘忍するであろう」と仰せられたら、「如何にも子供心なら勘忍しませう」と云ふた、それから

越前守は、向ふの棚へ饅頭と小判とを飾りておいて、饅頭を取れば子供心ぢやからこらへてやる、小判を取ればおとな心ぢやで罪に行ふと云ふて約束をなされ、其子供に向ふて、「サア汝に棚にあるものをやるほごに、ごちらなりとも好き方を取れよ」と仰せられたれば、今の子供は、スツクと立ちて取りにゆく親は側から之を見て居て、ドウゾ饅頭の方を取ればよいがと、神や佛を念じる様に思ふて御座りたが、なさないことには、饅頭を取らず小判を取りて來た、そこで彼の殺された子の親は「それ御覽なされ、何も角も合點なくで殺したのでござりませう、サア敵討を……」と云ふと、越前守は「まづ暫く待て、今小判を取りて來た處が小供心ではないか、

小判を取ればすぐに敵を討たる」と云ふことをきいて居ながら、小判を取りて來た處が小供心と云ふものぢや、サアこれでこそ勘忍をしてやれ」と云ふて、子供の一命を助けられたことがある、これ越前守の智慧と慈悲との用きと云ふものぢや、何れを取りても殺さぬつもりぢや。

オホキヨ 應舉 【人名】

丹波桑田郡の人なり、書を許野派の畫家石田幽汀に學び、自ら輿軸を出して一家を爲す、

談話 應舉と谷風

谷風と云ふは横綱御免の大力士であつた、或時京都へ來て興行せしに、彼れ大力無雙なることが散聞に達し、時の天皇より重藤の弓を賜はりた、谷風の喜び一方ならず、かゝる

恩典は實に一家の名譽なれば、何とかして之を後世子孫に傳へたひの思ひより、其頃名高かりし圓山應舉に依頼し、之を書きて額に仕立て、保存せうと決心した、或時應舉が未だ寐ておる頃に應舉の門前にドシンと地響きのする程大きな音が聞えた、何事が起りたであらうかと起き出てみれば門前に白い大きな石がおいてある、さても不思議なことぢや、かゝる大石が天から降りて来たのであらうかと驚いて見回しておると、横側に雲突くばかりの大男が裸體で立つて居る、それを見るなり應舉は再び驚いて、「貴殿は力士の様ぢやが何人ぢや」と問ふと、答ふる様「私は谷風と云ふ力士であるが、此度當地で興行しておることにが寂聞に達し、朝廷より重藤の弓をたまわ

り身にあまる名譽の恩典に預りましたのでこの今日の喜びを子々孫々の末までつたへたいと思ひこの弓を額に書いてもらいたいと思ふて態々出てまいりました、就ては書工は金銭に目をかけぬ慾の離れたものと聞くゆへ、これと云ふて御禮にする様なものもなく、己が身に相應した心一杯の御禮が致したいと思ふて、今朝未明に白河へ行き、漸くにして此石を手に入れ、只今これへ持參して御頼みにま

では、あれ程にたのんで来たゆへ、直に書いて呉れるものと思ひ、今日も出来るか明日も出来るかと日々待つて居たれど、中々書いてくれぬ、其中に京都の興行も終り、大坂の興行も終り、江戸へかへりて待つて居たれど、何のたよりも無い、書工と云ふものは何たる氣の長いものかと思ふて居たが、漸く三年目に出来上りて来たゆへ、谷風は大に喜んで立派に仕立て記念として床の間にかけて居た、其後京都へ興行にまいりた節、應舉の許へ御禮にまいり、いろ／＼話の末「書工と云ふものは何たる氣の長いものか、實は三年間待ち兼まして御座る」と云ふたれば、應舉の申さるゝに「中々ソウゆう譯ではない、論より證據これを見られよ」と、押入にある葛籠を

出してみると、何千枚とも知れぬ澤山な紙に重藤の弓ばかり書き屑しにしてありた、それを見てさすがの谷風も大に驚き、「かゝる弓一本を書くに、ド！して斯く迄澤山な書屑が出たのですか」と尋ると、答へらるゝ様「弓は至りて書き易いものであるが、弦が中々かけぬもので、何分一筋の糸を張りつめたものゆへに、それを書くに、若し中途にして息を續ぐと弦にくるひが出来、一息でズートひかねば眞の弦にはならぬ、それが爲め斯くまで骨折して、漸く三年目に一枚出来上りたのである」それを聞いた谷風は、その六ヶ敷ことを知ると共に、その己が爲めに盡し呉れたことを大に喜んだと云ふことである、これは谷風が大きな石を擔ひて頼みに来たは、身分相

應に誠の一字を以て御禮にかへたものゆへ、
應擧も三年の間辛捧して書いたのは、誠を以
て酬ひたのである。

應擧と臥猪

或時、應擧に臥猪の書をたのんだものがあ
つた、應擧はこれ迄臥猪を見た事がないので
心に思ふには、矢瀬に老婆があつて、いつも
薪を負ふて家に來るから彼れに聞いたら分か
るのであろうと思ひ一日、應擧が老婆に向ひ「
汝は野猪の臥ておるのを見たことがあるか」
と尋ると「たまには山の中で見ることがあり
ます」と云ふから「汝今後これを見つけたら
早速我に知らせしてくれよ、御禮をするから」
とたのむと、老婆は承知して歸つた、後一ヶ
月ばかりたつと老婆があはたしく來て、我

家のうしろの竹林の中に野猪が臥しておるこ
知らせたから、急いで酒食の仕度をし二三の
門人をつれて矢瀬に行つて見ると、正しく野
猪は臥して居るので、悦んで應擧はこれを寫
してしまつて、老婆に禮を云ふて家に歸つた
其後、右の寫し書を清寫して殆んど全部出來
上つた頃鞍馬から一人の老翁が來た、そこで
應擧はこの老翁に問ふて「汝臥猪を見たこと
があるか」と云ふと、老翁は「いつも山中で
見ております」と答へたから、應擧は清寫し
て居る野猪の書を出して、此通りであるか」
と問ふと、老翁は「ヤ、しばらく熟視して、此
書は能く書いてはありますが、臥猪でなくて
病猪であります」と云つたので、應擧は驚い
て其故を問ふと、翁が云ふやう「一體野猪が

叢の中に眠つて居る時は、毛髪は立ち四足
は屈して全身に勢があります、僕が以前山中
で病猪を見ましたが、其状は實にこの書の通
りでありました」といつた、そこで應擧もな
るほど合點し、老翁に臥猪の形容を問ふと
翁は一々細かに説明してくれた、そこで應擧
は先きの書をして、更に臥猪の圖を製作た
それから四五日たつと、彼の矢瀬の老婆が來
たので、應擧は竹林の中の臥猪の様子を尋る
と、老婆の云ふには「實に不思議なことには
彼の猪は其翌日に死にました」と云ふた、そ
こで應擧もいよく鞍馬の老翁の言に感じた
のである、それから十日ばかり過ぎて鞍馬の
翁が來たから、其後に清寫したのを見せると
老翁は驚歎して「これこそ眞の臥猪である」

といつたので、應擧も大に喜び、老翁に厚く
禮謝したと云ふことである、應擧などの大家
になるこの一書をこしらへるにも、かやうに
心を用いたものである、我邦に絶妙の畫人と
して其芳名が今日までも香ばしいのは、決し
て偶然の結果ではありませぬ。

應擧と幽霊

應擧、或時幽霊の幅を書きたしとて、日夜
圖案に苦心せらるれど、いよく筆を取つて
みると、欠點多くして心になふ所一つもな
い、爲めに畫絹を何程書き盡したやら分らぬ
程であつた、恰度其頃應擧に一人の愛妾があ
りたが瘡痂と云ふ難病にかゝりて居たもので
あるから一人の下女に看護をさせておいて、
自身はやはり書をかいておられた、或時病頓

に草まり臨終間近くなりましたから、下女は書室へ馳せゆき、此趣を再三申陳べたけれど、碌々耳にも留めず、一心に筆を取つておらるゝ、下女は詮方なく筆持つて居る應擧の手をしつかりと握つた、これ何をするのかと云はれたから「御新造が危篤です」と答へた「ナニ危篤」と初めて氣がついた、應擧は今更のやうに驚いて、早速病床へかけつけてみれば、今息を引き取つたばかりの處でありたさすかの應擧もこの有様をながめて思はず落涙し歎息して居たが、今落入りたばかりの愛妾なれど、長病の事ゆへ、眼は凹み髪は亂れ顔は瘦せ衰へておる、應擧は其すがたをジツと見つめて居たが、やがて生たる人に云ふ如く「和女の身體を貸してくれ、跡の追善供養

はおろそかにせぬ程に」と云ふて、死骸を抱き起し梁へつりておいて、三日三夜これを標本として幽霊の一軸を畫かれたとある、ナント熱心なものではないか。

應擧と盲馬

應擧の年若かりし時、野馬の草を食ふ處を畫きしに、或農夫これを見て「この馬は盲馬でありますか」と問ふた、應擧答へて「ケ様に兩眼ともに開いておるものを、盲馬かとは異なる間ひである」「何故に左様な異なる間ひをなさるゝのぢや」と反問した、農夫曰く「馬が草を食をうとする時には、必ず先づ眼を閉ぢます、これ草の爲めに目を傷けんことを恐れてゐる、然るにこの馬は顔を草の中に入れてゐながら、兩眼ともにバツチリと開いておりま

するから、それで私は盲馬でありますかと尋ねたのであります」と云つた、之を聞いて應擧は深く感じ入り、それより一層畫に心を用ゐたとある。

應擧の手習ひ

應擧は名高き畫家でありましたれど、書は甚だ拙かりたので、己が雅號たる應擧の二字を皆川淇園に書いてもらひ、それを手本として、殆んど六年が間習ひました、故に應擧の文字は終始一樣にて、宛も印を捺した如くである、古人常に己が足らざる所を知りて節を折ること斯くの如くである。

消防夫と死靈圖

或時、應擧が住みて居られた家の隣家より焼け出したが、消防夫某、非常に力を盡して

働いたので、應擧の宅はどうも火災を免れた、應擧は大に之を喜び、金若干を包みて酒肴料に……と云ふて與へましたら、消防夫の云ふやう、「先生もし何か私共へ下さる思召あらば、私の背に死靈の畫を書いてもらいたいさすれば、之を肉に彫りて永く紀念と致しますから」と云ふて、ハヤもろ肌を脱いだ、應擧も止むを得ず、戯に死靈の圖を書いたので、消防夫は大に喜び、直に彫師の手を勞してはりつけ、人に之をみせますと、如何なるものも其ものすごい有様を見て驚かぬものはなかつたとある、或年の祇園祭禮に消防夫は參詣したが、ワト向ふを見ると社殿の寶鏡の中に死靈の現はれておるに驚き、よくよく心を留めてみますと、自分の脊上の彫物であつ

たので、漸く安心はしたがあまりに、驚いた
爲め消防夫はそれから病にかゝりた、それゆ
へ或僧が針を用いて死靈の書のごみを滅じ
たので病はおい／＼に癒へましたとある、應
擧も能く書き、彫師もよく彫つたものぢや。

オホクボトシミチ 大久保利通 【人名】

甲東と號す、明治維新の元勳なり、明治十一年五月參
朝の途次赤坂紀尾井町にて刺されて薨す、

逸話 大久保利通機先を制す

大久保利通、壯年の頃には京攝の間を往來
して居られた、或日、京都二條通を散歩して
おると、他藩の士が三人肩をならべて來るの
に出會ふた、刀の鞘が觸れたと云ふのが發端
て争論を生じ、血闘しやうと云ふに至つた、
利通の同行者有馬と云ふが一町ほどおくれ

おりましたが、この喧嘩のありさまを見て急
にかけつけた、されど有馬のまた來ない先に
敵は已に刀を抜いた、利通はいきなり敵の面
上に唾をはきかけた、敵驚いて拭ふて居る間
に、抜き打ちに飛びかゝり一刀に之を切りす
てた、他の二人は血を見て驚いてにげ去つた
利通は之を追ひかけようともせず、血を拭ふ
て刀をおさめやうとしておる處へ、有馬は漸
くかけつけて「御手柄々々」と云ふた、電
光石火の如き早わざを以て機先を制する所が
大久保公の特色なのであらう。

逸話 大久保利通の豪膽

明治七年八月、内務卿大久保利通は臺灣の
案議を處理する爲め清國に使用したが、辨論
數回、議論は容易に決せない、大久保は一日

李鴻章を訪ふて話をする最中に、突然大砲を
放したのを聞いた、これは李鴻章が大久保の
膽力を試めそうと思ふて、私に議政堂の前
で大砲を放たしたのである、大久保は其時卷
煙草に火をつけて居たが砲聲を聞いて毫も顔
色をかへず、平然として煙草を煙らしつゝ、李
鴻章と話を續けたので、流石の李鴻章も大久
保の大膽には敬服したと云ふことである。

逸話 大久保利通の壯語

大久保利通が凶變に逢ふ數日前に、暴徒が
檄文を其邸に投じて豫め警告しました、其檄
文に

我輩近日君が首を得んとす、然れども暗
夜不意を襲ふて跡を暗すが如き卑劣を敢
てせず、

と、利通見終つて莞爾として云ふやう、「大丈
夫もごより此事あるを期す」と云ふて、毫も
顧みず、何たる男らしき壯語でありませうか
果して紀尾井坂の變が起つたのである。

オホタキンジャウ 太田錦城 【人名】

加賀大聖寺の人にして、椽筆漫筆の著者なり、

太田錦城の處世訓

太田錦城は加賀の人なり、初め皆川淇園に
學び、轉じて山本北山に學びしも皆其意に滿
たず、獨力苦學ついに一家を成せり、今其訓
言を録す、

飲食もなるべき丈は薄くすべし
房室もなるべき丈は少くすべし
是身を全ふするの法なり
衣服もなるべき丈は質素なるべし

器用もなるべき丈は儉朴なるべし
宮室もなるべき丈は卑陋なるべし

是家を守るの法なり

奢侈の念を抑へ制すると、放縦の
欲を抑へ制すると、天下國家を治
むる人も、一身を守るものも、抑
の一字、至近切要の學なり、

オホタドウクワン

太田道灌

【人名】

書を讀み歌を詠じ兵學を講じ土木を興す頗る多方面に
趣味を有する武士なり、

談叢

太田道灌と少女

太田道灌、或時、深山へ獵に行かれしに、
俄かに大雨に出遇ひ雨具の用意はなし、兎や
せん角やせんと思案に暮れて御座りたが幸ひ
谷底の方に荒破家があるから、それへ立寄り

りてとらせ侍りけり、心も得でまかりす
ぎて、又の日山吹の心の得ざりしよしい
ひおこせて侍りける、返りごににいひつ
かはしける、

七重八重花はさけとも山吹の(兼明親王)

みの一つだになきぞかなしき

とありますから、賤しき女にも心ありて山吹
の花を差出し、簀を貸せよの仰せを斷つたの
で御座りませう」と申たれば、さすがの勇者
と云はれし道灌も顔を赤らめ耻ぢ入り其後、
熱心に歌道を學びて、ついに達人となられた
とある、「人は侮るべからず」の教訓として大
に味ふべきことであります。

因に記す、此太田道灌は江戸城を築きたる
人にして太田源六資長といひし人なり、初

て、俄かの大雨に出遇ふて難義するから、簀
があらば借して下されよとたのまれたら、十
五六の少女が出て、垣根に咲いて居る山吹の
花を一枝折りて差出した、道灌は其意がわか
らぬゆへ、「花の所望は致さぬ簀を貸せよと云
ふのちや」と繰返して仰せられたれど、少女
言はず花語らず」で、女はさらに何とも返事を
致しませぬ、さては乃公を嘲弄するのである
か少しく怒氣を含んで責められたれど、一
向要領を得ませぬ、歸館の後、中村重頼と云
ふ人に此趣を話しましたら、重頼の云ふや
う「これは古歌にあることで、即ち後拾遺集
に、
小倉の家に住侍りける頃雨ふりける日、
みのかる人の侍りければ、山吹の枝を折

め武州荏原の館にありしが、豊島郡江戸の
地、千代田實田祝田の里と云ふ所を以て城
を取り、康正二丙子の年より初め、長祿九
丁丑の年四月八日に成就せり、これ現今の
宮城なり。

談叢 太田道灌の頓智

太田道灌、或時將軍義政の饗應に招かれま
したが、義政は一匹の猿を養ひおき見なれぬ
人を見ると飛びつかせて興を添へておられた
から、道灌はひそかに猿つかひに賂ひして之
を旅亭に借り來り、出仕の装束をして其傍に
いたり、飛びかゝらんごせしを鞭にて痛く打
ち伏せました、斯くて其日の饗應に趣きまし
たが、義政は窃に侍臣をして猿を飛びかゝら
しむべく用意せしめておきましたたが、猿は道

灌を見るなり恐れて平伏しましたので、人々
これを見て道灌は只人でないと云ひました、
これは道灌が只人でないのではない頓智が只
人より勝れて居ましたからク様な奇計をなし
て人を驚かされたのである。

談叢 太田道灌の潔き最期

太田道灌、智勇人に勝れ、武藝に達し、和
歌も巧に出来、ことに佛法を信じて龍穩寺の
泰叟和尚に参じたり、又雲岡和尚と云ふを萬
年山に請じて法益を受けられた、然るに此時
山内顯定、扇谷定正の二人が關東を管領して
居たので、世にこれを兩上杉と云ふて居まし
たが道灌は定正を輔佐して居まして、萬事政
治の仕方がよいから自然に定正の評判のよろ
しい處より、顯定は大に之を忌んで居ました

が、すると其時定正の麾下に謀叛をしたもの
がありましたので、この謀叛は全く道灌が張
本であるから御用心あるがよろしいと申しま
した、其時定正は相州糟谷に居ましたが、道
灌はかくと知らずに糟谷に行つて定正に面謁
をした、定正はかねて人を以て道灌の左右を
窺はせおき、道灌が浴室にはいつた時、四方
より槍をつきつけ「ヤア道灌入道常より和歌
を嗜んでおるが、只今はどうぢや」と云はせ
ました、大抵の人ならば和歌どころではない
震ひやがつて仕舞ふのであるが、流石はかね
て修行の積んで居る道灌、少しも驚かず、
かゝる時こそ命のおしからめ
かねてなき身と思ひ知らずは
と詠んで悠々として刃を受けて死んだとある

歌謡

太田道灌と和歌

太田道灌、寛正年中に上洛せし時に、後土
御門天皇より武藏野の曠原を尋ねられました
から。

露おかぬ方もありけり夕立の

空より廣き武藏野のほら

と詠じ、又其風光を尋ねられては、

我が庵は松原ついき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

と詠じて差上りましたら、叡感斜ならず

武藏野は高茅のみと思ひしに

斯かる言葉の花や咲くらん

と云ふ御製を賜はりたごある、

又従軍して居る際に利根川を渡らうとした

が、生憎闇夜にて淵の淺深がわかりませぬ、

その時道灌は、古歌に

底井なき淵やは騒ぐ山川の

淺き瀬にこそ仇浪は立つ

と云ふを思ひ出し、石を投げて水音をき、
水音が高いから馬を入れてもよいと命じ、難
なく河を涉り得たことがある、又上杉定正が

兵を廳南へ寄する時、夜半道灌をして潮の満

干を見せましたが、道灌は陣屋を去る二三歩

にして直に歸り來り、潮は今干き候と云ふ、

定正訝り如何にして知りしやと問ふと古歌に

遠くなき近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮の満干をぞ知る

とあり候へば、これにて知り候べきと答へた

とある、

又、小作の城を攻めた時には、敵多くして

寄手皆逡巡す、そこで道灌は、

小作はまづ手習の初めにて

いろはにはほへとちりくゝになる
と詠じて部下を勵まし、寡何ぞ衆に敵せざる
ことあらむやと、士卒に和唱せしめて進んだ
ごある。

歌

めぐり来てまたも悲しき月日かな

わかれし人の今日とおもへば

太田道灌が妻の一周忌に際して詠まれた歌
ぢやと申し傳へておる、人生に於て最も悲惨
なるはこの愛別離苦の苦みである、されども
去る者は日々とうとで、五十日すれば涙は
出やむ、百日すれば悲しみも何處へやら、終
には忌日命日さへ忘るゝ程になりゆくものな
れども、又めぐり来る一周忌の當り日には去

年のことが思ひ出され去年の今日は斯うであ

りたがと、其當時のことに思ひ至り、あつき
涙にむせんだと云ふ歌のこゝろである。

雜録

太田道灌の和歌

月前述懐

なをからの心をかくす我かげに

いとはで照す月そはづかし

短慮不成功

いそがすはぬれざらまじを旅人の

あとよりゐるゝ野路の村雨

人しれぬ心のあだに急ぎ来て

疲れてともにふしゝばの露

述懐

君におき民にふしつゝ朝夕に

つかへんと思ふ身ぞおほけなき

定正刺客をして道灌を浴室に刺さし

む、道灌神色變せず、槍幹を抑へ絶

命の歌を詠じて曰く、

昨日までまゝ妄執をいれおきし

へんなし袋今やぶれけむ

オホツキバンケイ

大槻盤溪 【人名】

嘉永年間風に西洋砲術を講じて其蘊奥を極めし名士な

り、

大槻盤溪と山陽

大槻盤溪が青年の頃に京都に遊びましたが

其時分には頼山陽先生の名聲は天下に鳴り渡

つて居りました、それゆへ四方の書生は皆行

いて調を請ふもの日々數十人を下らなかつた

けれども先生は人に許すこと甚だ稀れであり

まして、皆謝絶して面會しなかつた、盤溪も

やはり面會を謝絶せられし一人でありました

所が盤溪は催詩樓の記一篇を懐ろにいたして

頼山陽に見せやうとして居りました所、山陽

に謝絶せられたものでありますからして、

不本意ながら空しくそれを置いて歸りました

其後で山陽先生、其文を一讀するに及び、忽

ち案を打つて云はるゝやう、「斯の如き佳客、

豈ごもに一盃を傾げざるを得ざらん」と、乃

ち急に呼び迎へられまして、臂を把りて文を

論じたと云ふことが、世の佳話となりて傳へ

られてあります。

オンアイ 恩愛 【術語】

互に恩恵を施し愛著するこゝ即ち親子夫妻等の愛情を

云ふ、摩訶止觀に「色使に使はれ恩愛の奴となり自在

を得ず」とあり、

歌

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道に迷ひぬるかな

人の親たるもの、子の愛情に引かされて、知らず識らず其明を蔽ふことは、さながら闇の夜に方角に迷へるが如くである、闇の夜は物の黒白も見へねば道にふみ迷ふもことばりなれど、親の心の子故の恩愛に迷ひて、氣儘に成長せしめ、終に其子のあしきを知らぬは淺ましきことである、古人もこれを禽犢の愛とて禽鳥の雛を育て牝牛の犢を舐めるに喩へて戒めておかれた、人の親たるものはよく注意をせねばなりませぬ。

因縁 遁世出家についての疑問

随聞記といふ書物の中に、斯う云ふ話が載せてある、一人の僧ありて、其師匠に尋ねて

申しまするに、「私には一人の母親がありて、私は其一人息子であります、もし私が遁世して出家を致したならば母は一日の露命を持つことも出来ませぬ、さりとて私が世事にのみかゝりて佛道に入らず、空しく過したならば未來の行く先が案じられます、依て母を捨て佛道を修行すべきや、又たとひ未來は如何様にならうとも母を養ふべきや、其邊を承り度う御座る」と云ふ御尋でありた、之に對する返答に「それは困りたことである、併しそれは他人の計ふべきではなぬ、よくよく自分で思案するがよい、何か工夫をして母の自活の道を立て、おいて佛道に入るか(是一)、母を見送りて後に佛道に入ればよけれど老少不定のならひなれば、我身が却りて母に先達つ

やもしれず(是二)、又母を捨て、佛道に入るも眞實報恩者の道理に相應するから佛意に契はぬと云ふ事もなぬ(是三)、以上の事よくよく考へ合せて自ら計られよ」と云ふのでありた、「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、進退こゝに谷まる」とは、常に重盛のみならず、聖道門の人達の皆等しく泣く處である、佛道に入らんか、大恩ある母を捨てねばならず、母を養はんか、未來の苦患を忍ばねばならず、右せんか左せんか、一切菩薩の泣き玉ひた所も全くこの追分道でありたのでございませぬ、和讃に「一切菩薩の玉はく乃至恩愛甚だち難く生死甚だつき難し」とありて、絶ち難きは恩愛の絆であり、盡き難きは生死の苦患で御座ります

これから思ふてみれば、一家團樂共に法味を愛樂することの出来る當流の御教は、實に譬ふるに物なき程の喜びであります。

因縁 爲家卿の恩愛

大納言爲家卿、最愛の娘を先き立て、我子追善の爲めと思ふて、過にし娘の黒髪にて梵字を繡ひたまひし時の憂さつらさ、絲針の筋もわからぬ程涙をこぼして、この黒髪を見るにつけ、親をこそ先立つる筈なるに、順にはづして我子の黒髪にて梵字を繡すべきとて育てたるかご、せきくる涙おさへかねて、我が涙かゝんとしても撫でざりし

この黒髪を見るぞ悲しき

と詠せられたとある。

オナガク

音楽

【術語】

眞俗佛事編に「樂をなして三寶を供養すれば功德甚深なり」とあり、

談議 土耳其帝と音樂

殘忍刻薄を以て名高き土耳其帝アマラス、曾てバグダット府を陥れて降人三萬人を得たりければ、將士に命じて之を塵にせんとせしに、降人中に一樂人あり、アマラスに請ふて曰く、生前若し帝の前に於て一曲の樂を奏するを得ば死して餘榮ありと、アマラスこれを許す、樂人即ち樂器を取つて之を奏し、バグダットの陥落、土軍の勝利を唱ふ、其聲嚙喉として或は高く或は低く、乍にして悲慘乍にして壯烈、荒涼黯澹の光景、恍然として目前に現はれ來り、數萬の軍人皆感歎落涙せざるなく、そらに憐愍悲哀の情を催し、流

石のアムラスも思はず涙を澀ぎ、遂に俘囚三萬人を解放せりと云ふ、音樂の人心を和ぐるこそ斯くの如し。

オンシンビヤウドウ 怨親平等 【術語】

怨敵と親友を同視すること、即ち一視同仁の意なり、俱舍論に「諸の有情類、平等々々にして親怨あることなし、

談議 大徳の善行

昔一人の大徳があつて、市人も村人も其徳を慕ひ、我もくと供養いたしました、同じ他の出家等が之を嫉み誇りますのを大徳の弟子が聞いて、甚しく憤慨して師匠に向ひ、某比丘が和上のことを悪しきまに云ひふらします、實に憎い奴でございませんか」と申しました、大徳はこの事をき、終りまして、侍

者に命じて早速自分を誘つた僧を呼び來らせました、彼の僧が來ますと大徳は怒る所ではない、反つて快く話し、衣を與へられました、弟子等は案外な師匠の仕打に不審を起し師匠に對して「和上は何故に彼の失禮な奴をお叱りもなく、反つて懇めて衣を御與へになりました」と尋ると、大徳は「イヤ我れを誘るものは我れの恩人であるから供養をしたのぢや」と答へられたとある、「己れに敵する者を愛せよ」とある格言と同一の意義でありませう。

因縁 岡崎四郎と長尾新吾

原頼朝が始めて鎌倉に幕府を開き、其入府せらるゝや、先づ石橋山合戦の賞罰を正し玉ふに、長尾新吾は眞田與市を打たるゆへ、

罪を定めて岡崎四郎に預けらるゝ、そこで岡崎は新吾をつれて我邸にかへり、其晩は獄屋に入れおき、明けなば刑に處せんものと思案に夜も更けたるが、たま／＼法華經を讀誦するの聲きこゑければ、岡崎は不思議に思ひ、立ち出で、聞けば獄屋の中なる長尾新吾なり、岡崎更に耳を澄ませて聞き入り、「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」といへるに至りて涙を流しておもへらく、今此經を聞く時は、討たれた與市も討たる新吾も悉くこれ佛の子、斯く云ふ四郎も佛子なれば罪を定めし有司も佛子にて血こそ分けねども共にこれ兄弟なり、迷ふが故に恨みもあり、恨むが故に苦みもあるのぢや、ア、淺間布のこの身やと、一種の靈感に打たて、暫くたゝすみ居ると、

程なく夜もほのく、と明けましたから、早速頼朝公の御前に罷り出で、新吾の命を乞ひければ、仰せに、「一度汝に預けしものゆへ、殺活は一に汝が心に任す」とありければ、岡崎は難有く御受けをなし急ぎて我家にかへり新吾の繩をきり出家をすゝめしに、新吾も涙を流して打ち喜び直に出家して道心堅固の沙門となられたとある、是岡崎四郎の耳に法華經の御法の響きし功力でありませう。

力の部

カイクワ 改過 【世語】

遷善と熟し自己の過失を改め善道に遷るを云ふ、

の鳥であるか、其梟の飛び來るに鳩ゆきあひて曰く、汝いづくに行く、梟の曰く、我れ東の方へうつらんとす、鳩の曰く何故ぞ、梟の曰く、里人皆我が聲を憎むがうたてさに、すみ所をかへんと思ふなりと、鳩の曰く「なんち鳴く聲をかへてこそよからめ、聲をかへずしては、たとひ何地にうつりても、また汝の聲を憎むであろう」と誠めたとある、古人の歌に、

おみなへし花の心のあたなれば

秋にのみこそあひわたりけれ

人にあかるゝ心を直さずは、行く先きも々々、皆人にあかるゝと云ふ教訓である、人誰か過なからんや」で、如何なる人にも過失は大なり小なりあるものですから、過を

談義 榎木僧正

良覺僧正と云ふのは極めて腹の悪しき人であつたので、人が異名をつけて、坊の傍に大きな榎木があつたから、榎木僧正と云ひました、僧正はこの異名を聞いて大に腹を立てその榎木を切りてしまはれたら切株が残つて居たから、人は又切株僧正と呼びかけた、それを又聞いて腸を立て、切株を残らず掘りおこして仕舞ふたが其跡が池のやうになつたから、人々亦堀池僧正とよぶやうになつたのである、過つて改むることを知らぬものは、皆この良覺僧正と同じく、何處までゆいても何回手をかへても人より憎まるゝものである。

談義 梟と鳩 (作話)

梟といふ鳥は、猫鳥とも云ふて悪しき聲

改めて善にうつり、人世の行路を全ふせねばならぬと云ふ處に着目して改過遷善の實をあげねばならぬことである。

談義 ヘンリー王の喜び

英國の第四世ヘンリー王の子にヲウルスと云ふがあつた、此の人は理非のわからぬ人ではなひが、至極短氣な性質で、其友としたる人も全くの善人ではなかつた、或時其一人の友人が罪を犯したるにつき、裁判官がスコインが仕置を云ひつけたれば、大に王子は怒を發し、無法にも其裁判官を打擲した、こゝに於て評判八釜敷くなりて、かゝる無法の行爲を其儘ではしておかれまい、さればとて王子の事なれば父王へ對して、憚る處もなかるべからずなどと評し居たるが、裁判官

は王子を法廷へ引致し相當の處分を申渡したるに、オウルスも其理に服して神妙に入牢し居られたるが、父王の云はるゝに、「我に明斷なる役人あり、これ一つの慶びなり、又理非を知つて法に服するの子あり、これ二つの慶びなり」とて、太白をあげて祝せられたと云ふことがある。今日在監の諸子も、一旦の邪心より罪惡を犯したると素より惡むべく厭ふべきことなれども、罪を罪として法律に服したからには、日々に改過遷善の方面に向つて進行せねばならぬ事である。

句 折りかけて月に耻かし野路の梅

昔 或盜賊が野中の一つ家に腰をかけ、十二三の少女に向ふて「女中さん酒はなひか」「此頃は酒もござりませぬ」「それでは菓

子はなひか」「ハイ菓子もござりませぬ」「それは困つた、なせに酒も菓子もないのだ」「ハイ私は女中でなくつて此家の一人娘でござりますが、母親と二人暮して細々商ひをして居ましたに、母は大病にかゝり百日あまり病床についておりまして、其介抱やら藥代やらで資本も使つてしまひ、それゆへ菓子一つも仕入ることが出来ないのです」と、涙ながらに物語りますと、盜賊もそれを聞いて大に同情を表し、「それは實に氣の毒なことで、親一人子一人で定めて不自由なことであらう」と云ふて、懷中より金二十圓を取り出し、「これは少しなれども介抱の手傳ひ、藥や滋養物を買つておあげなされ」と云ふてやりますと、娘の答ふるやう、「これは檀那様、あ

なたは何れの御方かは存じませぬが、之を頂く筋は少しもござりませぬ、唯の一度も御使ひあるきも致さぬのに、之を頂戴する道は決してござりませぬ」と云ふ、「イヤ、これは此方の寸志ぢや、其御志はありがたふござれど、道にはづれたものはよう御もらい申ませぬ」と涙ながらに申したれば、盜賊は大に感じ入り、「己れは年が年中道にはづれた金ばかり、人を縛つて及物三昧強盜するやら強姦するやら、人を欺いて金を取る、之が人間の所作と云はれふか、十三や四の少女さへ、道にはづれた金はようもらはぬとは、實に見あげた心がけさてくあやまり入りまし

ある、「誠あれば感ず感ずれば應ず」るの道理で、清淨無垢なる少女の至誠に動かされて、罪惡の結晶とも云ふべき盜賊もついに、改過遷善の曙光に接することが出来たのである、一たび善心に立ちかへると、神佛の照鑑に恐れ入り、「善は小なりといへどもなさいるなかれ、惡は小なりと云へどもなすなかれ」の思ひに住するのが、人の人たる本分である、よ

古語

煩惱の其中から念々稱名常懺悔。
放之背義殺之違仁令我泣者夫蝎乎。

これは程明道の言である、程明道は大儒碩徳ゆへ人間の道に少しも背かなんだが、或時蝸（ひばかり）を見て、これは大毒虫ゆへ其儘にしておけば人の害になる、害になるを知りながら生かしておくは義の道に背く、それかさて之を殺すは仁の道に背く、本に我心を痛めるものは此蝸であるかと云ふて泣いたとある、恐れながら 天皇陛下の大御心がそこぢや、火付人殺の大罪人を生かしておいては國家の害になり懲惡の道がたぬ、それかこ云ふてこれを殺すはむごいことぢやと、張りさくやうに御心を痛めたまふ、其結果として在監の人々に改過遷善の道を講せしめたまふのが監獄教誨である、してみれば臣民たるものは、上御一人の渥き御慮の程を感じて精々

自分々々の身を慎まねばならぬことである。
因縁 手代の懺悔
 美濃大垣の豊島屋某の子、幼きより尾張名古屋なる伊藤某の店に、丁稚奉公をなし居たが、長ずるに及びて手代の列に加はりた、元來此店の番頭手代等十六人ありて皆放蕩にして酒色に耽けるの惡弊あり、だから某も何時しか誘はれて、主家の金銀多くを私費すに至りた、然るに事遂に顯はれ手代の者悉く暇を言ひ渡され、即時に逐出されたとき、他の者等は皆豫て覺悟の事なれば、更に驚くことなく出行きたれど、某のみは、忽ち是迄の罪過を悔ひ、悲み歎きて番頭に請ひて、年幼きより當家に召し使はれて、久しく養育を蒙むれる御恩程、實に海よりも深く山よりも高し

ざるを一旦の過ちより、悪しき路に踏み迷ひ洪恩を忘れ務を缺ける上に、夥多の金銀を浪費せし罪免るべき様はありませぬ、如何様なる重き御處置あるとも、一言の申分ないのに却りて憐みを垂れ給ひて、唯永の暇を賜ふのみにして赦し給ふこと、限りなき寛仁の御沙汰なれども、今此儘暇を賜はりて、再び當家へ出入すること叶はずば、主の恩を報ゆるの期なく、生涯不忠の身とならんこと、如何にも嘆かばしき次第でありますから、何卒今日より改めて丁稚となして召使ひ給へ、聊かも怠りなく身を碎き、心を盡して其職を務め、生涯に私費の主金を償ひたく、此上の御憐み然るべく取なしと給へど、泣々願ひ出でたので番頭等も大に感じて理はりある願なりとて

其由主人に言ひければ、主人も深く之を感賞して遂に其請を許した、某は天にも登りし心地して、大に主恩の厚きを喜び、其日よりは丁稚となり、己の務めを勵みしのみならず、同じ丁稚の勤めをも助けて、其勞に代り少しも幼年の者を侮らず、能く他の朋輩手代番頭を従ひ勤めければ、主人も其行ひに感じ、後ち再び手代に取り立てた、某の喜び一方ならず、ます／＼精勵して節儉を守り、給金の中わづかを以て己れの用を足し、餘はことごとく主家へ返して私費の償ひとした、斯くすること數年にして全く償ひ終つたので、主人始め番頭等も大に之を賞與し、重立ちたる手代に取り立て、別に住むべき家屋の外に器財までも與へられ、後々までも家富み榮へたごあ

る、能く過を補ふものは君子なりとある格言は、現實にこの手代の行爲の上に現はれたと云ふべしである。

因縁 父の改心と娘の念力

東京千住より一里ほど離れたる在所に佐藤孫兵衛と云ふ人がありたが、財産もあり實直な質でありたから、御一新の頃に戸長の役をつとめ、誠に評判のよい人であつた、両親と女房とかよと云ふ娘と都合五人の家に下女下男をつかい何不足なく一家和合して睦まじく暮して居られた、然るに或時戸長達の懇親會が千住の町で開かれ、孫兵衛も出席したが或悪友に連れ出され、千住の貸席扇屋と云ふに上り、孫兵衛には、おたまと云ふ女を當てがうて其夜は面白く遊んだが、謙直一方の孫

兵衛は翌日よりかのおたまのことを忘れ兼ねひそかに家を出で、は扇屋に上り、次第に逸樂に溺れて、役場へはいつも欠勤して、五日も十日も居續する様になつたので、両親や女房は心配して、いろいろと異見をすれど馬の耳に風同様で、少しも受けつけぬ、遂には田畑や諸道具をそろ／＼と賣りにかゝり、家屋敷をも質入してしまい、両親は離座敷に閉ぢこもり、家の門はしめ切つて女房と娘が留守をしておると云ふ有様、

傾城の涙で藏の屋根がもり

吉原があかるくなれば家はやみ

とは實に／＼最も千萬なことで、佐藤の家はこの川柳が事實となつて來たのである、或日娘のかねが離れ座敷の口に立つておると、老

人夫婦の話に、さて孫兵衛が放蕩を止めさするには致し方がなから扇屋のおたまを受け出して女房となし、嫁は不憫ながら親里に歸すより外はあるまいとの相談であつた、娘のかよはこれを立聞きして大に驚き、母親が里へ歸られ扇屋のおたまと云ふ女郎が其代りに此家へ來たことなら、如何なる憂目をみることであらうか、この事を母様に知らせたらごんなに心配をなさるであらうとひごり、心にいろいろと心配し、モハヤこの上は神佛の御守りを受けて父上の改心をはかるより外はなむご、それから山奥の觀音菩薩に願をかけ、毎夜母親の熟睡するを待つて素跣で半里あまりの山路をたどり、山奥の觀音堂に詣で、一心に祈念いたしました、斯くの如く六日の間

は無事につとめ、いよ／＼今日が満願の日であること云ふ七日目の朝から、衰弱が來て急に容體がわるくなつた、それで母親も心配のあまり扇屋にゆいて孫兵衛にかくと告げましたら、孫兵衛も驚いて我家にかへり、かよの枕元に座して介抱しましたが、かよは奥山の觀音様へ七日の願をかけて父の改心を祈りておることを語りました、これを聞いて孫兵衛は總身に汗をながし、迷の夢はサツパリと醒めこの後は誓つて改心致すべし、これと云ふも其方の真心が觀音菩薩に感通し、觀音様が其方にのりうつゝて御諫言下さるのであるとて從來の非行を悔ひ改めそれより和樂の家庭をつくられたとある。

カイケ 改悔 【衡語】

改は改轉、悔は悔過と熟して安心領解の上に於ける従
來の心得違ひを悔ひ改むるを云ふ、

句 今日になり菊つくらふとおもひけり

これは悔みて悔み甲斐のなること、

蜂の巢や昨日は知らで悔まる、

こは悔みて悔み甲斐のあること、其別をよく

知らねばならぬ、前の句は九月九日の節

句になりてから、作りたればよかりたに後

悔しても、これはあこの祭りで何の所詮もな

い、地獄へ落ちてから、エ、地獄へおちるで

なかりたにと思つても、これはあこの祭りや

悔みても悔み甲斐はなる、依て蓮如上人は「

いのちのうち不審もとくくはれられ候は

では定めて後悔のみにて候はんするぞ、御心

得あるべく候」と、御警めあらせられた、後

の句は、軒端に大きな茶釜ほごな蜂の巢があ
るのを知らずに、昨日はあの下で晝寝をした
が、ようママさ、なんだことぢや、モウ今か
らは行くまいぞと、これは悔みて悔み甲斐の
あることぢや、「今迄信じ奉らざるこの浅間
布さよとおもひて、なおくふかく彌陀をた
のめよ」と御手引下さる、今改悔文の改悔
も、所謂悔みて悔み甲斐のある悔みにして、
日頃のあやまれる心中を悔ひ改め、本願の大
道へおい出してもらいたいことである。

百語 鸚鵡能言へ不離飛鳥

鸚鵡と云ふ鳥は「お父さん」と云へ、云へ

ば「お父さん」と云ひ、「お母さん」と云へば

云へば「お母さん」と云ふ、真似はしても、
お父さんと云ふは父上の事やら、お母さんと

云ふは母上の事やら知らずして、たゞ人の口

真似ばかりをするので鳥の仲間は出られませ

ぬ、今も丁度其通り、口に改悔はのべながら

難行難修が何やら自力疑心がどうやら、離れ

工合もすて鹽梅も筋道さへも得心せず、一心

一向にたのみ奉る一念の時、御助は一定往生

治定と、口では立派に云はれるれども、心の底

を詠めてみりや、若存若亡ご二の足ふみ、

往生如何と案じ煩ふやうな人々なら、鸚鵡同

様の口真似と云はねばならぬ、それでは迷を

離れて佛果にいたると云ふことは出来ぬ。

因縁 周茂叔と作り花

唐の周茂叔と云ふは至りて蓮を愛する人で

ありたが、家の周圍には池を掘りて蓮を植ね

年々客來をして楽しんで居られた、或年の夏、

葉は澤山に出たが花は一輪も咲かぬ、周茂叔

は大に歎いて居られたが、其處へ利口な男が

来て、私が花を咲かせて進せうとて、作り花

をこしらへてそこかしこへ咲かせた、所が至

りて面白い、サアこれなりや御客も出来るこ

それから朋友へ案内を出し各皆喜んでよば

れて来た、其蓮の花をながめて、詩をつくり

文を綴りて楽しんで居たが、一人の客の不審に

思ふは、年々蝶が澤山に來るのに、今年は一

匹も來ぬはごうであらうかと云ふと、如何に

もと云ふて一同に不審する、一人の客が立つ

て蓮池の本へ行てみたれば、蝶が來ぬも道理

よ作り花でありた、サア作花で人を欺したと

客達が大きに立腹し、周茂叔は實に赤面せられ

たごある、如何様作花で人を欺したが蝶は欺

されなんだ、今在座の同行は、難行すてました彌陀をたのみましたと、口に改悔はのべながら、作花みた様な手作り安心なら、娑婆の同行や僧侶は欺されようが、阿彌陀如來は欺されぬぞや。

滑管 氣の弱い男

或人が足を怪我の爲めに痛め、接骨醫の處へまいりましたに、治療室を見れば澤山なる療治の道具がそなへてあるが、至りて氣の弱い人物でありたから、大に驚き、たいさへ痛む足をあの道具にて療治などをやられては、とても堪らぬと思ふから、醫者の前では怪我せし足を出さずして痛まぬ足を出して見せた醫者は其出したる足を診察して、「これは何とも」ないと云ふた、今の人は「左様で御座る

か」と云ふてそのまま、歸りたと云ふ話がある同行方がよい處ばかり出して出言して領解をのべるが、善知識の前はそれでもすむが他心徹鑿の如來様はよく御照覽ちやぞや、早く心の中を打ち出して改悔をいたし、自力疑心の疵を直してもらい、他力の安心に基かねばならませぬ。

カイハラエキケン

貝原益軒

【人名】

筑前の人なり、名は篤信、字は子誠益軒と號す、著書頗る多し、

貝原益軒の教訓

貝原益軒は、教育を畢生の志とし、平易の語を以て訓誨の書を著はす、その初學訓、養生訓、女訓の如き婦女兒童のよりて益を受くること少からず、今其教訓の一端を左にか

く。

人の心は唯仁義禮智信の性なり、人の道は唯君臣父子夫婦長幼朋友の人倫の行なり、五常の外に心なく、五倫の外に道なしと知るべし、これを知るは知なり、これを行ふは行なり、此外にさらに心と道を求むべからず（下畧）

又曰く、

一言の過にて莫大の禍となり、一事の誤りにて一生の憂となる、慎しむべし平生慎みある人も、事により時によりて怠り弛みぬれば、一言一事のあやまちによりて思ひの外なる禍となることあり一言一事も慎まずんばあるべからず、又曰く、

今日は明日の計をなし、今日は來月の計をなし、今年は來年の計をなし、平生は一生の計をなし、生前に早く死後の計をなすべし、

辭世に曰く、

過しかたは一夜ばかりの心地して八十路あまりの夢を見しかな

カキザキ

柿崎

【地名】

越後國中頸城郡にあり、川越名號を以て名あり、

扇屋夫婦の入法

親鸞聖人、越後國御經回の砌り、柿崎の扇屋と云ふに立寄り、「一夜の宿を恵み候へ」とたのみ玉ふに、扇屋夫婦は至りて慳貪邪見なる質にて、同情の念は毫もなく、一言下に謝絶した、されど聖人は、軒の下でも庭の隅

でもよいから是非に……」この御懇望であ
 りたから、古き筵を貸し與ゑ、軒の下へ導い
 た、聖人は丁寧に御頭りを下げさせ玉ひ、「一
 夜の宿りを許し玉はるも、實に多生の縁なり
 とて、筵をかへ軒端に出で玉ひしが、時し
 も霜月下旬の頃なれば、寒風は法衣を吹いて
 御膚は氷に等し、されど元來慈悲深重の聖人
 なれば、かゝる寒苦も厭ひ玉はず、只南無阿
 彌陀佛々々々々、稱名の御聲すみわたる
 イトも殊勝に聞る玉ふ、夜もいたくふけゆく
 程に、さらに人語の響なし、三更と覺ゆる頃
 フト夫婦は目を覺まし、宵の法師はこの寒天
 に凍へ死にはせぬかご、耳を傾けてよく聞け
 ば、難有くも聖人稱名の御聲心耳に澄み、
 殊勝にも尊くも喩へて申さん様もなし、扇屋

夫婦の者、宿善開發の時至りけるにや、稱名
 念佛の聲を聞くより、身の毛いよ立ち、唯何
 こなくしみく尊かりければ、さてもあの稱
 名の聲の尊さよ、痛はしき旅僧の分野や、い
 ざん内へ呼びいれて且く休ませ申さんと、
 夫婦もろとも立ち出で、聖人を請じ、「かゝ
 る軒端に臥し玉ひて、さぞや御寒むくおわす
 らん、まづ此方へ入らせ玉へ」と、御手を取
 りて爐邊に伴ひ奉り、焚火して聖人をもてな
 しけるに、聖人深く喜び玉ひ、「さてこそ地獄
 行の罪人を淨土へ救ひ得たり、我身の寒苦は
 厭ふに足らず、彼等を教化して淨土に導かん
 このうれしや」と、彼等夫婦に向ひて、彌
 陀超世の大願より、信心正因現生不退の御理
 りまで、細々と御教化ありければ、夫婦の者

は謹んで之を聴聞し、隨喜の涙にむせびまし
 た、聖人は御満足のあまり、南無不可思議光
 如來と云ふ九字の名號をかき與ゑ玉ひ、又戲
 れに歌を一首、
 柿崎にしぶく宿をとりければ
 主人の心熱柿なりけり
 ご遊されければ主人取り敢へず、
 かけごほる法師に宿をかしけるに
 かきくれたりや九字の名號
 ご御返歌申上たり、聖人も深く喜び玉ふたご
 ある。

で跡より追ひ付きまいらせ、御形見の名號を
 願はんさて、其儘御あごを慕ふて行きたりし
 に、聖人は求山寺川と云ふ川を越えて、向ふ
 の岸へ上り玉ふ處である、妻、之を見て此方
 の川岸より聲はりあげて申す様、「いかに聖人
 にはこの川を越させ玉ひしか、老少不定は世
 の習ひなれば、再び御教化を蒙らんも計り難
 し、我にも御形見の名處を賜はれかし、其方
 へ來りて頂き奉らん」と云へば、聖人の仰せら
 る、様、「この川水甚た早ければ、女の身にて
 涉り難し、そなたにて紙を開くべし、名號を
 かい得さすべし」との事ゆへ、妻は聖人の
 仰せを心得難くはおもへども、懷中より紙を
 取り出し、此方の川岸に立ちながら、押開き
 て待ちければ、聖人は彼處にて御筆を立て玉

川越の名號

其翌朝扇屋を御出立の後、彼の扇屋の妻心
 に思ふ様、主人は難有き九字の名號を頂戴せ
 しも、妾は何も受けざりしこの残念や、い

ひて川向ひの女の手元へ紙を目當にさらく
と書き玉へば、不思議や墨黒々ど川向ひの紙
面にあらはれ、六字の尊號うつらせ玉へば、
奇瑞のあまり妻女は驚き、うれし涙にむせび
つゝ、伏拜みく喜びながら我家にかへり、
深く御崇敬を申上たごある、これ世に名高き
「川越の名號」の由来であります。

カクニヨ 覺如 【人名】

名は宗昭、本願寺三代なり、在職四十二年、師に依つ
て所宗の法義ますます其精を究む、口傳鈔改邪鈔著
述多し、

因縁 覺如上人と唯善大徳

宿善について、覺如上人と唯善大徳とが御
諍論なされたことがある、唯善大徳は覺如上
人の伯父君で、其頃大谷には南殿北殿と云ふ

二つの御殿がありました、北殿には覺如上
人、南殿には唯善大徳が御座らせられて、
至りて交り篤き御間柄でござりましたが、一
日フト御法義上について御諍論なされたこと
がある、其顛末は下の如くである、覺如上人
が或信者に對して仰せらるゝには、「宿因深厚
の人は本願名號のゆはれを聞き得て信心決
定するなれど、無宿善の者は法を聞いて信ず
ることはならぬ」と仰せられたれば、唯善大
徳は傍より仰せらるゝやう、「第十八願には十
方衆生とありて、善人も悪人も男子も女人も
皆ことごとく呼びかけ玉ふ手廣い御誓ゆへに
宿善のあるものは助かるが宿善のなるものは
助からぬと云ふ様な、そんな手弱い本願では
なる、宿善のあるものもなるものも、皆こと

くく往生をさげるゆへに、さてこそ不思議
の誓願と云ふのぢや」と仰せられた、其時覺
如上人の仰せに、「信心決定が宿善によること云
ふことは決して私の臆説ではないので、源
大經には「若人無善本不得聞此經」又は「宿
世見諸佛樂聽如是教」と説き、善導大師は、
「過去已曾修習此法今得重聞即生歡喜」と仰
せられてある、ケ様な譯でありますから、
我等此度善知識に遇ふて法を聴くことは、偏
に宿善に限るのである」と、經釋の明文を
引かせられ、且つ其上に道理を以て仰せらる
ゝには、宿善のないものでも、法を聞いて信ず
ることが出来るなれば、阿彌陀如來は神通を
以て十方衆生を一時に信心決定せしめて、無
上菩提の證果を得せしめそうなものである、

然るになせ我々は今日まで迷ふておるのであ
るか」と道理をおしたて、御攻めなされた、
唯善大徳の仰せに、「それでは念佛往生にあら
ずして宿善往生と申さずばなるまい」など
の玉ふゆへ、覺如上人は、宿善の當體を直に
往生の正因とみるではござりませぬ往生の正
因は唯信心である、されど其名號のゆはれを
聞信するには、宿善開發して善知識にあはね
ばならぬのであるから、宿善は其體往生の正
因ではなれども、信心を得るの階梯として
是非ともなければならぬのである」と仰せら
れたれば、唯善大徳は一言の御返答も出來ず
して、口を閉ぢて逃げさせられたと云ふこと
である、當時伊勢の入道行願と云ふ學匠が
ありましたが、この御諍論の顛末をきいて評

せらるゝには、北殿の仰せらるゝ宿善説は經釋の明文を論據として條理の立たる主張なり南殿の義勢は文證なく理證なく、所謂入道法門なり」と批評を下されたと云ふことである

カサギ 笠置 【地名】

南山城木津川の沿岸にあり、笠置山は山勢雄偉にして巖崖怪を争ひ、景勝頗る佳、山上後醍醐天皇行在所の趾あり、

後醍醐天皇と藤原藤房

後醍醐天皇、笠置へ御越になつた時、御供をしたものは藤原藤房と弟季房の二人しか御座いませぬ、山から山、谷から谷越へて金剛山をさして御いでのなる途中で、大層御つかれなされて山中の松の木の下でどろ／＼と御眠りなされた、すると風に誘はれて松ヶ枝に

かゝつて居た朝露の残りがバラ／＼と御顔へかゝる、思はず御目を御さましたなされて、さしてゆく笠置の山をいでしより

天が下には隠れ家もなし

と御詠じなされましたが、一天萬乗の大君が天が下には隠れ家もなしとは何と云ふことでありませうぞ、北條高時はかくまで陛下をば惱まし申上げたのである、其時に藤房卿も見るに見兼ねて、

いかにせんたのむ陰ごとて立よれば

猶袖ぬらす松の下露

と詠じて、主従三人涙にむせばれたとある。

カシヨウ 迦葉 【羅漢】

具には摩訶迦葉波と云ふ、十大弟子の隨一にして頭陀第一とす、結集三人の一なり、

拈華微笑

釋迦如來 靈山會上で御説法のありました時、釋尊はたい花を拈つてござるばかりで、一語も御説きなされなかつたのです、數多の御弟子達が聞いて居たがそれは何の事であるやら少しも分らぬ、其中に第一番の御弟子たる摩訶迦葉といふのが、たい獨りニツコリ微笑した、それを釋迦如來御覽になつて、「我れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり汝迦葉に付屬す」と仰せられた、これは釋尊が悟りを開かれた佛法の極意を今迦葉にゆづるぞこの御言であります、これが言語や文字によらず、心から心に傳ふると云ふ以心傳心の法門であります。

迦葉尊者の宿福

往昔、迦葉佛と云ふ佛が御出世なされて、其如來御入滅なされ五百年すぎた後の像法の間に、この迦葉佛の御姿を大木像にこしらへて、時の人が恭敬尊重した、其時一人の貧女とて、貧乏なる女があり、一口に云へば乞食婆ちや、この婆が道を行くに一文の錢を拾ひ大に喜んでこれで着物をこしらへて着やうかうまいものを買ふて腹一ぱい食おうかと案じて居たが、イヤ／＼おれは前生の福力の拙いもので、たま／＼人間へは生れたれと一軒の家もなし一食の貯へもなし、人の門戸に立つて餘りものをもううて野山に寐起する有様、人間に生れたと云ふは名ばかり、犬も猫も同じこと、此やうに貧しいは、前の世に慳貪で佛に物を差上げず、法の爲めに布施をせず、

僧を供養したこともなし、邪見慳貪の報ひあらはれて、此世に於てもかく貧乏で三寶に御供養申すこともなければ未來は定めし地獄道か餓鬼道か、今の苦しみより百千倍おそろしい苦しみを受けるであろう、イヤ／＼此文の錢を着物にしたとて後には破れてしまふ食物にしたとて一生の飯米もあるまい、ごぞ之を佛に御供養申し未來の種が蒔きたひものちやと思ふて箱打の處へ行いて、「あの迦葉佛の御顔の箔が落ちて見苦しくなられた、ごうぞこの金錢を打ちのばして修覆をして下され」と云ふたれば、「それは奇特なことぢやがこの城中に長者も金持も多いけれども誰一人御修繕をするものもなぬに、其方の様な貧乏人が其様に思はるゝのは難有いことぢや、併

し下からみれば僅かな様なれど餘程の損じやうじやによりて、なか／＼此文の錢では出來まいけれども、たらぬ處は私が足して手間賃どもに已れが手傳ふ、さるかわり此功德にて生々世々の間、そなたご己れご夫婦ご生れ終に佛道を成就せう」と約束せられた、其一文の錢の功德で、それより以來九十一劫の間地獄へも落ちず餓鬼道へも行かず、常に人間天上の間に生れかわり死にかわり、毎に長者の家に生れて夫婦となり、あまつさへ身體が金色に光りかゝやいて、今生にては釋迦如來の御出世に遇ひ奉り、阿羅漢の證りを開いたごぞ、如來自ら慇懃に御經の中に御説きなされた、これ捧げた錢はわづかに一文なれども眞實の志から差上たれば、其功德が九十一

劫の間あらはれ、佛道修行の妨げを防ぐ因縁となり、終に證りを開いて本意を遂げられたとある。

因縁 迦葉尊者夫婦の出家

迦葉尊者の前生の因縁は上に申陳べた通りであるが、今生に於ても亦前生の宿福力で長者の子に御生れなされ、何不足はなれども兎角浮世の名利を嫌ひ玉ひ、御出家の願ひがある、御両親は之を深くなげき、ごうぞ出家を止めたいと思ひ、いろ／＼と勘考の末、妻を迎えたるならば其恩愛に引かれて出家を思ひ止まるであらうと云ふので、両親がかれこれと器量を吟味せらるゝを迦葉が御聞なされて「なる程父母の仰せならば妻を持ちませうけれども、常並の女は御断り申す、丁度私の様

な軀に金色のかゝやく女ならば迎へたまへ、夫婦になりませう」と云はれた、何を云ふても深窓の中に養はれ奥深く暮すものを一々穿鑿してもあるかれず、何としたものであらうぞと案じ煩ふて居られたれば、波羅門達が思案をめぐらし、それは我々媒を以て天竺中を尋ね申さんごて、黄金を以て天神の形をこしらへ念を入れて磨きたてたれば、きら／＼と光りかゝやく、其天神を車にのせて大きな幟をたて、大勢の波羅門がつきそうて五天竺の城下／＼を引いてあるひで、そも／＼此天神に衆人の愛敬縁結びの天神ぢや、一度拜する女は廣大の福徳を與ゑ、良き夫婦の縁を得ると云ふてふれてあるきたれば、女は淺はかなものぢやゆへ、やれ珍らしいことぢや、我

も拜め人も拜めと云ふて、奥住居をして居る娘達が、我れもく出て拜む、斯くの如く段々まわりて迦毘羅衛城と云ふ處へ行きたればこゝに、陀毘羅長者と云ふ人の娘、町の騒ぎを聞いて何事ぞと問ふたれば、腰元共が、「只今珍らしい天神を引いてまいり、衆人愛敬縁結びの天神ぢや、これを拜めは女は幸ひを得てよい處へ嫁入ると申しますから、姫様にも拜みなされませ」と勧めたれば、それは珍しい事ぢや私も出て拜まうと云ふて、門へ出て彼の神の前にまいりますと、此娘の體が金色でひかりかやくやうに見ゆる、波羅門共がどつくりと見すまし、サアこれこそ望む人なれと急に立歸り其趣を申せば、親達も大に喜んで、早速媒をたのみ相談して

遂に迦葉の嫁となられたが、世間并みの人とかわり愛欲の念少しもなく、宿善の顯はれて只佛道に心深いゆへ、元より迦葉も出家の願ありければ、夫婦もろとも釋尊の御前にいたり、出家を願はれたれば、如來は善來比丘と御意なされた、すると頭髮がサラリと落ちて妙報の袈裟虚空より下り、其座で夫婦ながら目出度き證りを開かれた、これ前に申した九十一切の前の約束、錢一文の功德のあらはれであります。

カセンエン 迦旃延 【羅漢】

具には摩訶迦旃延と云ふ、十大弟子の隨一にして論議第一と稱す、

因縁 慈母の教訓

迦旃延 此に扇繩と云ふ、扇繩とは扇の繩

と云ふ文字です、もどこの尊者は幼少の時父親に離れさせられて、母親一人の養育で育てあげられ、六つの時母親が引つれ釋迦如來の御前に御出なさる、時、天竺は殊の外あついで云は、土用の中、門々に水を出しておくやうに、天竺では人の軒や木の枝に扇をつないで置いて、往來の人が其所に休んで風を入れて往く時に迦旃延と母公と諸共に或軒端に立寄りて居たがつりてある扇の風にさそはれてひらくと動くを見て母公が御尋ねなさる、には、「あの空にある扇が落ちそうなものぢやのに、虚空に翻りて下へ落ちぬはごうしたことぞ」と云はれたれば、迦旃延の御答に、「これは母上の御尋とも覺へませぬ、扇が空

にあらう筈はなけれども、あの上からさがりである繩につながれてあるから落ちませぬ」と申された、其時母公ははつたりこけて涙を流し、「されば我は夫に別れてより年頃若い後家のことなれば、人に袖妻引かるゝこともあり、再び嫁入りをすゝめらるゝこともあれどそなたが不便さに心ならずも貞女の道を守り今日まで身を全ふじておるのは、其方と云ふ繩があるゆへ、それにつながれて貧しい年月を暮して来たが、今日より如來の弟子にして出家得度をさせる程に必ず勇猛精進に佛道修行をして、九族天に生るの因縁ともなるやうになれど、懇ろに教訓なされた、迦旃延尊者は其母公の詞が、骨髄に徹して忘れず、精進に修行なされたゆへに、終に無學の聖者と云

ふて羅漢果の證りを開かせられた、此因縁を以て扇の繩と云ふことを天竺の言に迦旃延と名くるのである、「三つ子の心百まで」の喩の通り、親の異見を聞込んで修行すれば必ず志を成するものである。

カチオデラ 勝尾寺 【寺名】

攝津國三島郡粟生に在り、懸頂山菩提院と號し眞言宗に屬す、西國巡禮第二十三番ノ靈場ナリ、

行教 上人と國恩

攝州勝尾寺の開基行教上人は徳行のすぐれたる名僧であつた、或時朝廷より其徳を慕ふて御召になりたが、上人は世を厭ふ世捨人なればとて斷りをせられた、勅使は大に其不都合を責め「いかに行教、汝は皇國の人民ならずや、天皇の勅を奉せざるは如何」と云はれ

たれば、行教上人「イヤ我は國に在て國に居らず、日本に住んで日本に住まず」と云はれた、其時勅使「汝のすめる此山は日本にあらずや」と云ふと「イヤこの行教は山に居て山に居らず、疑ひたまはゞこれを見玉へ」一本の枝を以て枝の上に座をくんだ、勅使はこれを見て驚ながら「其枝の下は何國ぞ」と云はると、行教上人、座した儘虚空をさして四五間舞び上りた、流石の勅使も驚き入りて平臥せられた、是により空く勅使も引取り、其由を朝廷へ申上られたれば、終に此寺に勝王寺と云ふ寺號を下された、其御禮に行教上人參内せられ勝王寺とは王に勝る寺、實に以て恐れ入る日本の國體に背きますから、王の字を改めて尾の字に替へて下され、我れ佛道

修行しておれど、臍の尾を埋みあるこの御國いかに國恩を忘るべきや」と申上られたとある、佛教信者はこの通りに國恩の辱きことを忘れてはなりません。

因縁 教信沙彌と勝如比丘「教信」の下を見よ

カツカイシウ 勝海舟 【人名】

名は安房、海舟は其號なり、幕末に於ける徳川家の柱石なり、

談叢 海舟の至誠

勝安房伯は徳川幕府最後の黒柱でありまして、徳川一家の興廢は勿論、我國の安危も其一舉一動にあると云ふてもよろしい極重要な地位に居られました、もし當時勝伯が大義名分の如何も顧みず、三百年來政權を私したる徳川家を戴いて飽く迄戰爭をやられたな

カツカイシウ

らばどうでせう、江戸百萬の生靈は砲煙彈雨の中に葬むるは無論のこと、その勝利は何れにあるにもせよ、外國の干渉は踵をめぐらすしていたり、二千五百年來金匱無欠の國體も或は忘はしきことが起るかもしれませぬ、所が勝伯は一時世間の毀譽褒貶に恐れて大義名分を無視する人ではありませんから、徳川家が三百年來政權を私したることの恐れ多いことを悔ひ、殊に當時我國の狀態は勝伯が越前藩を介して京都の新政府の參與に呈した書に、遠くは印度の破れ、近くは支那長毛官兵是非曲直を鳴らして同屬相喰む西洋諸國其虛に乗ず、今や皇國殆んど同轍に陥らん」と云ひあります通りでしたから、歸順の正道を以て小は徳川家の安全をはかり大は國家を危

機一髪の間きいぱつに救すくひ出して帝國進運ていこくしんうんの基もとといた
しましたのは、忠君愛國ちゆうくんあいこくの至誠しせいより出てたる
活劇くわつげきと申まうさねばなりませぬ。

海舟の鍊心

勝海舟かつかいしう、自ら語かたつて曰いはく、

予よが本當ほんごうに修行しゆぎやうしたのは劍術けんじゆつばかりぢや、
一體たいい予よが家は劍術けんじゆつの家柄いへがらであるからとて、予よ
の父ちちも骨折ほねをつて修行しゆぎやうさせんと、當時たうじ擊劍げっけんの指南しなん
をして居ゐて島田虎之助しまだこらのすけと云いふ人ひとにつけた、此この
人は世間普通せけんふつうの擊劍家げっけんかとは違ちがふ所ところがあつた、
島田しまだの云いふには、「今時いまとき皆人みなひとのやつて居ゐる劍術けんじゆつ
はほんの型かたばかりぢや、折角せつかくの事ことに足下そくかは本
當たうの劍術けんじゆつを御ごやりなされ」と、

それより島田しまだの塾じゆくにつめて自ら薪水しんすいの勞らうを
とつて修行しゆぎやうした、寒中かんちゆうになると島田しまだの指揮しきに

時には二三人にさんの同門生どうもんせいも來くることもあつた
が、寒さむさと眠ねむさに辟易へきいきし、何時いつも夜半よはんより近
傍はたの家いへを叩たたき起たして寐ねるが常つねであつた、然しかれ
ども予よは馬鹿正直ばかしやうじきに一度いちども左様さやうなことはせな
かつた、この修業しゆげふの効かうは忽たちまち幕府ばくふ瓦解わがの前後ぜんご
に顯あらはれ、千辛萬苦しんはんくに堪たへ得えて少しも痺ひるまな
かつたのは全く此修業このしゆげふの御蔭ごかげである。

ほんに此時分このじぶんには寒中かんちゆうに足袋たびをもはかず、
裕あは一枚まいで平氣へいきであつた、寒さむさ暑あつさと云いふこと
はごんなことやら幾いくんど知らなかつた、今此いまこの
齡とほひになつて身體からだも達者たつしやで足あしも確たしかに根氣こんきも丈
夫ぶなのは、全く此時このときの修業しゆげふの餘慶よけいぢや、

島田しまだと云いふ先生せんせいが劍術けんじゆつの奥義おくぎを極まむるには
先まづ禪學ぜんがくを修ためよとすゝめられた、それで牛
島うしまの廣德寺くわうとくじと云いふ寺てらに行いつて禪學ぜんがくを始はめた、

從したがひ、毎日まいにち稽古けいこがすむと夕方ゆふかたより稽古けいこ着ぎ一枚まい
で王子權現わうじこんげんに行いつて夜稽古よけいこをした、何時いつも拜殿はいでん
の石段いしだんに腰こしをかけ、瞑目めいもく沈思しんし、心膽しんだんを練磨れんまし
更に立たつて水劍すいけんをすぶりし、更に復元またもとの石段いしだん
に腰こしをかけ再び心膽しんだんの練磨れんまにかゝり、それよ
り復起またつて木劍ぼくけんをすぶりし、此この如ごときもの數すう
回くわい、遂つひに天明てんめいに至いたるそれより、直たちに歸かへつて朝稽
古あさけいこをなし、復夕方またゆふがたより王子權現わうじこんげんに出でかけ、一
日も怠たりなかつた、始めはじめに深更しんかうに唯一人たひ、森
々くとして樹木じゆもく茂しげれる社内しゃないに立ち居ゐることとて
何なんとなく、氣怯きせつれし、寒風かんふう梢すへを拂はらふ聲物こゑもの凄すく
覺おぼへず毛髮もうはつを立てたるが修業しゆげふの積つむに従したがひ、
何なんとも感かんじなくなりて、遂つひには四面寂寥めんせきりやうの中
にありて、ひうくご梢すへを掠かすむ聲こゑを聞きくこと
が一種しゆの趣おもむきを添そへる様やうになつた。

大勢おほせの坊様ぼくさまと禪堂ぜんだうで座禪ざぜんをしておると、和尙わじやう
が棒ぼうを持つて片端かたはしから肩かたを叩たたくのであつた、
斯かうして殆ほとんど四ヶ年よんねん眞似目まじめに修業しゆげふした、こ
の座禪ざぜんの功こうと劍術けんじゆつとが土臺つちだいとなつて、後年こうねん徳
川とくがわ瓦解わがの時とき、萬死まんじの境きやうに出入しゆつにふして遂つひに一生しやうを
全まつた、あの時とき分ぶん刺客せつかくなどに逢あふたが危難きなん
に際會さいくわいして、這のれぬ場合あひと見みたら、先まづ身命しんめい
をすて、かゝつた、而しかして一度いちども死しななかつ
た、斯かくの如ごとく難局なんきよくに處しよして、綽しやく々ととして餘
裕ゆうがあつたは、これ畢竟ひつぎやう劍術けんじゆつと禪學ぜんがくとの二
道だうより得えたる賜たまひであるのぢや、

以もつてその素養そやうの深ふかきを知しることが出來できませ
う、

海舟の豪懷

精神せいしんを鍛練たんれんして臨機應變りんきおうへんの自在じざいを得えたる者

は古來其人に乏しからずと雖も、幕末の偉人勝海舟の如きは最も有名なるもの、一人であります、海舟が京師にありし時、勤王黨と呼べる人々の中に痛く海舟を悪む者がありまして、何とかして彼を殺さんと計りましたが或日四條通を過る折しも、傍の物影より覆面したる武士一人、銃を以て海舟を狙ひ、今しも火蓋を切らん様子なれば海舟も一時はギョツとしたれども少しも騒がず、突然件の武士の方に打向ひ、狙ひがまるで外れて居る、それでは己れが體は打てんぞと手を振て申しましたる舉動の如何にも泰然自若たるを見て彼の武士も其氣に吞まれたものか、銃丸を放たすして一散に逃げ去りましたと申すことで御座ります、海舟が豪懷、驚歎の外はありま

せぬ。

カテイ 家庭 【世語】

父子兄弟夫婦の集合に依りて成立するものを家庭と云ふ。

新編君の失敗

大學出の學士が新に細君を迎へた、この細君は某女學校の出身であるから、その家政も學校仕込みであるので主人も大に得意であつた、主人は或日曜日を下して友人三四輩を招きて鮪を馳走するこの案内状を發した、友人達は新編君の御手料理ときては、近頃以て一層の上鹽梅ならんと、打喜び、案内の時刻を違へず出かけた、處か時は正に十二時を報ずるもまだお鮪が出ない、一時を報じてもまだ出ない、客達もあまりおそいので腹は空にな

つてくる様子、主人もこれを見兼ねて、モウ準備は出来たであろうと、臺所へ行つて見ると、細君の姿は一向見へず、只女中一人、酢瓶を手にしてぼんやりとして立つておるのみであつた、とりあへず細君の行衛をきくと、「お二階……に」このことゆへ、早速二階へ上つてみると、イヤハヤ引越しの間際のやうに取りみだしてある、箆司の引き出しは三つも四つも引き出してある、書籍は皆取り出して甚だ混雑を極め、又細君の顔も汗をだらだら流しておる、主人は大に怒り、「其様なことは後でもよいではなひか、モウお鮪が出来る筈であるのに、どうしたのか」と云ふと、細君の云ふやう「實に何とも申譯がござりませぬ、お鮪をこしらへる分量加減を記しておい

た、ノートブックが見當りませんので、大に氣をもんで居るのであります」と答へたので主人も今と云ふ間に合はぬから「近所の鮪屋へ注文しろ」と命じて、漸く二時半頃に鮪屋からお鮪が臺所へ到着したので、まさか買つたごもいへぬから、甚だおそくなつてすみませんと、白らをきつて居たこのことである、如何はご學校仕込みでも、お鮪一つこしらへるのでさへ、ノートブックの御厄介にならねばならぬと云ふやうな、應用のきかぬことでは、一家の主婦として家政を料理することは甚だ覺束ない。

監獄教誨師の實歴談
或教誨師からケ様な話を聞いたことがある、如何なる習慣犯者と云へども、親が故郷では

泣いて居るであろうと云ふと、多少の感情を動かすものであるが、或時一人の窃盗罪で入監して来た男があり、この男は母親がある。云ひながら、親の事を云ふても一向感じなぬ、のみならず左の如く申しました、ナニ貴僧、母が泣いたとてそれは自業自得であります、私を泥棒にしたのは母ですもの……、私が幼少の頃御寺へ遊びに行いて歸りに草履が見えなんだゆへ跣足で歸りましたら、はは六層怒りまして、人に草履を盗まれておめく、跣足でかへる馬鹿があるかと申しました、此時私の小供心にも、なるほど人に草履を盗まれた時には、代りてはいて來ねばならぬわいと思ひました、それから後に下駄を失ふたことがありました、今度は母に叱かられまいと

思ふて、外の下駄をはいて歸りますと、母はそれを見て、何だ馬鹿、こんな穢い下駄を替へて來る馬鹿があるかと叱りました、此時私は善い下駄をかへたならば、よいのであらうと母の言によりて感じたのであります、其後又下駄のなくなりましたことがありましたとき今度は思ひ切りて立派なる下駄を代りにはいて歸りました、スルト母親は今度は怒らずに、御前は下駄をかへたナアと云ふたきりでありました、私の盗み根性はケ様にして母親から養はれたのでございます、それですから今日私が監獄にまいりまして、母に對して氣の毒と思ふよりも、一層恨めしく思ふのでございます」と申したと云ふことであります、私はこの話を聞いて非常に感じたことである、

世の中の小供を持つた親達は、この話をふかく玩味し小供の間から悪を遠け善に進むやうに教へねばなりません。

鮎の御馳走

或人が同僚の宅を訪問して世間話に時間を費し、今や辭し去らんとして挨拶をするに、「晚餐の用意をしておるから、是非召し上りて下され」と云ふ、無理に辭退するも却りて失禮であると思ひ、遂に頂戴した、處がその膳の上に、大なる鮎が三尾のせてある、鮎は至りて好物であるから、二尾は酒の爲めにつくし、飯を食はんとして第三尾に箸を下すや主人の傍に居た四つ五つの男の子が「アレお客さんが坊の分まで食ふてしまつた」と云ふて大聲あげて泣き出した、これは定めて妻君

が其小供に「お客さんはとても三尾も食べられぬにきまりて居るで、一尾は残るに違ひな残りましたら坊にやろう」と云ふて、約束して居たのであらう、それゆへ小供ははやく御飯がすめばよいがと思つて父親の傍で見て居たのちや、斯う云ふ工合であるから二尾までは何とも云はなんだが、第三尾目に箸を下すや否や、己れ忘れて泣き出したのである、主客共に赤面して非常に閉口したさうであります家庭教育の責任者たる主婦は、ケ様なることは十二分の注意を拂はねばなりません。

徳本上人の道歌

怠らぬ夏のかせぎのほごくも
穂にあらはれて出づる秋の田、
徳は本財は末とて陰徳を

つめば陽報ありとこと知れ、
貧くて心のまゝにならぬのを

憂ひとせぬが智者の清貧、
持つ人と持たぬ人とは性による

たさひ實は多く得ることも、
心には綾錦をもさせよかし

身にはつゝらのころもきることも
蟻の目に馬の下腹みゑがたし

蜉蝣は蟬のいのち知らじな、
ごしよりは家の實よ村おさま

信心者ほど人は尊む、
苦くとも良薬ならば親達か

雜錄

一 正直 篤實と合せて百匁

家内繁昌の妙薬

こらへて飲んで子にものませよ

一 忠孝 躬を粉にして百匁

一 儉約 しつそにして一斤
五常 仁義禮智信とよくよくよりわけ
て五兩

一 堪忍 五兩目
右の薬調合に念を入れ毎日朝起して慈悲の
袋に入れ、あしき友を除き、水一生を入れ
案じ用ふべし、驕奢をよくくすまじ、費
を省き用ゆ

一 禁物
色と酒 慾其外差合なし
これ延壽長久の良薬なり用いて其功能を知
へし。

カトウキヨマサ

加藤清正

【人名】

虎之助と稱し尾張國愛知郡中村の産なり、慶長六年

本城を築き肥後守に任ぜらる、

談話

加藤清正と庄林隼人

加藤清正は戦國武士中一異色あり、肥後國
に在城の時、夜陰の事にてありしが、雪隠へ
行かれ、小姓共二三人附き添ひ行きて手水所
に待ち居る、清正はいつも廁へ入るに不淨を
にくみ足の高さ一尺ばかりの下駄をはきては
ひられける、今宵頻りに下駄にてごんくご
踏みならし給ふゆへに、小姓の者ども驚きて
戸外より窺ひみるに、清正公の曰く、されば
の事よ、今急に思ひ出したる事あり、庄林隼
人介を呼ぶべしといはれける故、庄林へ使を
立てらるゝに、モハヤ夜半の事にてはあり、
庄林も此程は風邪にて平臥してありければ、
さるものも取りあへず亂髪にて登城しけを、

カトウキヨマサ

清正は元來痔疾を煩ひて長雪隠にてありしか
ば、いまだ雪隠より出でもやり給はぬ所へ隼
人介參上仕れりと申す、清正雪隠の内より
申されけるは「汝を呼び寄する事、別義にあ
らず、其方の家來年ごろ二十ばかりの若者に
いつも茜の袖なしの軍羽織を着たるあり、彼
が名は何と申すか」と尋ねられしかば、庄林
答へて、「出來助と申して尾州の産にて候、生
付心もさかしく候ゆへ草履取に申し付け候が
中々働あるものにて候」と申す、其時清正
「さればごよ、其事なり、いつぞや川尻に芝
居能あり、見物に行きし時其方も供に召し連
れられしが、彼の草履取り、出來助が、小便
をするを見るに、肌にまんちうかたびらを着
し、脚胖はくべき處を臍當をしたり、今天下

漸く治まりて皆人平服になり、兵具の用意なごそこくなる事にてある中に、かれが心懸下郎には珍しき者なりと思ひしまゝに要用にまぎれ、打忘れいたる所、只今フトこの閑所にて思ひ出し、かれが事思ひやれば、中々尺寸の間もすておくべきことにあらず、彼等に褒美してこそ武士の本意なれと存じつめしより、つらく思ふに、人の死生、世の治亂、身の盛衰、天地の變は測り難し、かく思ひ居る内、我死ぬるか、汝死ぬるか、彼死ぬるか、なれば一人欠けても其志無にならんこと、残念千萬なりと思ふなり、深更ながら時人を待たぬ理、延引すべきにあらざるゆへ呼びよせたることなり、早々歸りて出來助に申聞かせて早々取りたてつかはすべし、しかし、傍

輩のそねみもあるべければ、高知は無用たるべし、其方家内の者も嘸氣遣ひすべき間早々歸るべし、去りながら風邪と見ゆる間、酒を呑むべし」とて、麥のひしほを肴として酒を呑ませらる、庄林 涙にむせかへり、さかくの返答もそこくにて難有さ肝に銘じ、「殿にもまづ御休み候へ」と申しければ、清正は帳臺へ入り給ひぬ、其跡にて庄林近書の小姓等に、「御前には長雪隠を遊ばされたるまゝ、御風を召さぬやうに、皆々心をつけて給はり候へ」と云ひて宅にかへり、出來助を呼び出し段々清正の懇志の程を申し聞かせし上、六十石に取り立て近習に申付しかば、出來助も難有きこと、骨髓に徹して、これよりいよく忠勤を勵み、度々比類なき高名をあらはしけ

るとぞ、主の臣を思ふ、斯の如きも、亦日本武士道の精華なり。

談叢 加藤清正の同情

一日、加藤清正が海を渡らうとするとき、忽ち颶風に遇つて、船も覆没せんとしたので、船長が「これは海の神が祟をするのである、若し人を海に投げ入れて、神様に祈つたら、此の災難は免れるであらう」と訴へると、清正毅然と色を正して曰ふには、「人間の生命は至つて貴重なもので、貴賤貧富の別はないのである、苟にも同情ある人間であつたら、他人を殺して、自分が生きやうと云ふ様なことは、爲すに忍びられるものでない、しかし是非にと云ふならば、汝輩に指命するであらう」と、そこで水手も奮勵して船を漕いだが

稍やあつて風は止み波も静まつて、船中の兵卒も悉く無事を得たと云ふことである。

カ子サ子 兼實 【人名】

世に月輪關白と號す、關白忠通の子なり、權大納言兼右近衛大將を経て内大臣となる、
 在家の念佛と出家の念佛
 兼實公、一日吉水の禪坊へ御參詣なされ、ゆるく御法縁に預かれて後、聖人に御尋なさるゝやう、出家の念佛と在家の念佛と、其功德に勝劣がござりまするか、聖人の御答に、「在家出家の隔はありても、念佛の功德には更に差別はござらぬ」と經論の文を引いて懇ろに御示しなされた、殿下は膝を叩いて喜ばれ、「御聞せに預れば預るほど難有くござるが、これについて一つの御願あり、今の御法

話に相違なくば、御弟子中の一生不犯の清僧を一人私へ御下げ下され、私に一人の娘あれば、此れご夫婦の契りを結ばせ、在家往生の手本と致度うござると、願ひ出られた、聖人御最もご思召し、我が祖師聖人を召し出して委細を御話しになり、「そなたが殿下の御所望に應せられよ」と申付けられた、祖師聖人は驚いていろくくと御辭退なさるゝと、聖人は硯と紙を取りよせ、行者宿報設女犯の四句の偈文を書いて前へ差出し、「これ禪空、そなたは救世菩薩の告命を忘れられたか」と仰せられた、この一言には何とも御返事の致方がない、救世菩薩の告命と云ひ、殿下の御所望と云ひ、又御師匠の仰せと云ひ、今は辭するに言もなく、毀譽褒貶を顧みず、末世凡夫の

行状を示して在家往生の先達をしようご御決心なされ、遂に妻帯を決行し玉ひたのである。

【因縁】 足引の御影
 法然聖人足引の御影と云ふがある、これは夏の頃に聖人は沐浴あそばして、浴衣がけに足をのばして涼んで居られた、そこへ禪定殿下御入りになり、障子の外から御覧なされたら、御首りの正上に正圓な御光明が輝かせられ、御姿の相好は生身の勢至菩薩に拜まれたまふ、幸に畫工の正法坊と云ふがそこにおられたで「これく一寸あの聖人の御姿をうつしてくれよ」との御たのみ、畏まりましたと直に障子の外よりひそかに寫し取りた、さて殿下は聖人へ御對面なされ、ゆるくと佛法

の御物語をあそばしたが、ヤ、ありて仰せらるゝやう、「最前貴僧の御首りの上に光明が輝き御姿は勢至菩薩にみえましたゆへ、直に寫し取りました」と申上られたら、聖人は早速其畫を御覧なされ、畫工の正法坊も召されて仰せらるゝには、「畫はよく出来ておれど、關白殿の御所持なさるゝ畫像に浴衣がけは是非もなるが、足をのばした體を畫いたは、其方の注意がたらぬと云はねばならぬ、兼實其人は源空が門人なれども、攝政關白は朝廷の官位である、その官位に對して恐れ入りまするでこの畫像所持は御斷り申度うござること段々御かけあい遊ばす内に、不思議なることには伸したまひてある足をズット引縮め、端身正座せられた故これを足引御影と申し傳へてお

る。

ガマン 我慢 【術語】
 七慢の隨一なり、我を恃みて心をして高擧ならしむる煩惱を云ふ、

【譬喩】 頭と尾との喧嘩
 一疋の蛇が居つて頭と尾とが争ひました、頭が尾に向つて「己がゑらいのだ」と云ひますと、尾が頭に向ひ「ナニ己が御前よりゑらいのだ」と申しました、すると又頭が云ふには、「已れには耳があつて聲をき、目があつて物を見わけ、口があつて物を食ふ、そして行く時には前にあるからゑらいと云ふのよ」尾も負けなひで、「ナニ己がゑらいのだ、其證據には己れが動かぬ時には何處へも行れぬでなひか、己れが御前を行かすから進めるのだ

それが嘘か本真か一つ見せてやる」と云ふて木を三廻りまいて三日の間放さぬから飢くなつて堪りません、大方餓死する程腹が減りましたから頭もどうく降参し、成程御前の方がゑらいから放してくれろ」と申しましたので尾も放しました、さて頭の云ふには「御前の方がゑらいと極つたからは先きに行つて呉れろ」とすると尾は得意氣に進みましたが、未だ澤山行かぬ前に大きな深い坑へ墮ち込んで死んでしまいました、これは雜譬喻經に示し玉ふ處で、我慢を張るものは自他を誤ると云ふの教訓であります。

滑稽 風鈴

嫁と姑が風鈴の鳴音について議論を始めた嫁の曰く、「あの風鈴はチリン／＼と鳴る」、

姑の曰く、「否よ、チリタン／＼と云つて鳴る」と、各その意見を主張して約半日にも及んだ、處が嫁のいはく、「然らば其正邪を定めるには檀那寺の和尚さんにたのむことにしやうではなひか」と相談を持ち出すと、姑も早速承諾を致しました、嫁は直に其趣を和尚に申出で、「何日何時に其裁判をして下さい」と堅く約束をなし、且つ五十錢の銀貨を紙にひねりて、和尚に差出し、老ひたる姑に敗を取るは残念なれば、是非に勝利を得るやうとくれ／＼願つて歸りました、すると程なく姑も和尚に面會を求め、亦五十錢を紙に包んで差出で、勝利を得るやうにたのんでかへつたさて其翌日二人共に和尚の前へ出ると、和尚は暫く考へこんだ、それは其筈で、姑よりも

嫁よりも五十錢づゝの菓子料が取つてあるからちや、やがて漸く口を開きて曰く、「拙僧はお婆さんに五十錢、お嫁さんに五十錢、都合金壹圓」と云ひつゝ、件の金を手の中で振つて、「風鈴の音はチリン／＼でなし、チリリンでなし、チヨロリンだと云つたとある、この滑稽談は、昔、伽耶舎多尊者の殿の銅鈴の風に吹かれて鳴る其音を聞いて、師の僧、伽耶舎多尊者に問ふて曰く、鈴鳴るか、風鳴るか師曰く、風にあらず、鈴にあらず、汝が心鳴るのみと答られたとある。と同一轍である、俚諺にも「うぬぼれと梅毒氣はないものはない」と云ふてある通り、何でも自分はい、人は悪いと云ふ了見は誰し

カモウウジサト

も持つておるので、一家の不和を來すも、兄弟相争ふのも、朋友間の不信を來すも、皆己れの我慢からおこるのであります。

ガモウウジサト

蒲生氏郷

【人名】

下野宇都宮の人なり、名は秀實、通稱伊三郎、修禪庵と號す、山陵志職官志等の著あり、

談叢 蒲生氏郷の誠實

蒲生氏郷の許に、佐々木が鏡一と云ふ名高い器があつた、細川忠興が之を下さいと非常に懇請したので、互理某と云ふものが「これは代々傳はるものであるから他人の手に渡すは甚だ惜しいことである、之に似た鏡を贈られた方がよろしかろう」と遮つたが、氏郷はなきなきと人には言ひてやみなまし心の問は、如何答へん

と云ふ古歌が耻かしい」といはれて、遂に佐々木の鏡を興へたごある。

歌話 蒲生氏郷と和歌

蒲生氏郷は多角面の武士である、南化和尚につきて儒佛兩教を聞き三條四殿及び宗養紹巴等につきて和歌を極め、茶事に通じ禮節も倣ふた人で、恒に語りて云ふやう、「和歌は往々にして人の云ふべくして未だ云ひ能はざる幽玄なる影を示すものである、これによつて千古の理を首肯し得ることが出来る、殊に左の二首の如きは軍法の心得ともなれば、大將たるもの、最も味ふべきものである」とて、左の二首を示されました。

雲はみな拂ひはてたる秋風を

松に残して月をこそ見れ、

月すみて雲皆空に消えはて、
深山かくれを行く嵐かな

カラスマルミツヒロ 烏丸光廣 【人名】

和歌に長し書を能くするを以て名あり、權大納言正二位に進み、著書頗る多し、

逸話 烏丸光廣の讀書

烏丸光廣卿は一室に座して家人の入るを許さず常に書を讀んでおられたので座席に汚痕を生じたと云ふことである、後水尾天皇或時樓に上つて公卿以下の第宅のいたく破れたるを御覽じて、所司代板倉重宗をしてこれを修葺せしめられた、そこで重宗が一番荒れて居る光廣卿の處へまいりて、御邸を修葺いたしますから、暫く他へ御遷り下され」と云ふと、光廣曰く「東廂に雨漏れはこれを西室

に避け、西室破るれば乃ち北舎にうつり、我れいさゝかも厭ふことなし、このまゝに打捨ておけ」とて少しも動かす書を讀んで居つた重宗も困つて此由を言上すると、詔して「主人に管することなかれ」と仰せられて、さうく修造したといふことである。

カルダイ 迦留陀夷 【羅漢】

黒光と譯す、其形色甚だ黒きが故に此名あり、教化第一とす、

因縁 迦留陀夷尊者と日暮の托鉢

迦留陀夷、此に黒光と譯す、黒光とは黒く光ると書いた文字で、この尊者は色が眞黒で其上漆でぬりたものゝやうに光りがありたゆへ黒光と云ふ、或時日暮に在家へ乞食に御出なされたれば、黄昏時のくらまぎれに、目ば

かり光る眞黒な姿を見て、黒鬼かと思ひ、懐胎の女が驚愕して流産したことがある、これより如來は迦留陀夷に夕暮時の托鉢を制し玉ふたと云ふことが雜一阿含經に説いてある。

因縁 迦留陀夷尊者と吝嗇婆

迦留陀夷尊者、或時城中を托鉢せられたら波羅門の家に吝嗇婆々がありて嫁や孫の留守を考へて餅を食はうと思ひ、人が來れば食はさねばならぬから、誰も這入らさぬやうに晝中に門の戸をしめて餅を焼いて居た、尊者は之を濟度しようと思ひ、神通を以て地の下をくいらせられ、餅を焼いて居る婆の前にスツクリと立ちて鉢をさげられた、婆はびっくりして、其方は何處から這入りた、餅がほしそに立つて御座りても、可愛い子や孫にさへ

食はずのが惜しさに、留守を考へて焼いて居るのちやもの、其方の目の玉が飛び出ても上ることはならぬから、はやく歸りて下され」と云ふ、すると尊者の目の玉がヒョイと飛び出てぶらん／＼に成りた「さてもきたなひ坊主ちや、其様なことをしてみせてもやることはならぬ、そこへ逆さまに立つてもやりはせぬ程に」と云ふたれば、尊者はくるりとひつくりかへりて逆様に立つた、婆は驚いて「たつた一つの餅を貰ふとて色々の狂言をする、其様にもがいても死んでもやりはせぬ」と云ふと、尊者は忽ち滅盡定に御入りなされバツタリ息がとまりた、そこで婆は當惑した、この迦留陀夷は此國の大王波斯匿王の御后たる末利夫人の御歸依の僧であるか、こゝで死なれ

ては如何様な御咎めにあうもしれず、絞め首にでもあわされたら大變ちや、これは餅の一つや二つにはかへられぬと思ひ「どうぞ生かへりて下され、餅一つ進上しませう」と云ふと、尊者は定中より聞かせられ、直に出定したまへば、老婆は「うれしや／＼早う御歸り下され、餅を進上します」と云ひつゝ、一つ摘んで鉢の中へ入れようと思ふたれば、あつだけの餅が残らずねばりつき、皆鐵鉢の中へ這入りた、そこで尊者は「これは忝けなひと受けさせられ、歸ろうとなさるゝと、老婆の申すに、「此餅一つ進上せうと云ふので皆取られてたまるものか」と追ひかけてくる、尊者は餅の入った鐵鉢をかへたまへ、釋尊の處まで逃げてかへられたれば、老婆は餅をかへし

て下され」と云ふて大聲にて呼びつゞける釋尊の仰せらるゝに、「婆よ心を鎮めてよくきけよ、迦留陀夷は波斯匿王の歸依僧にして、毎日／＼百味の珍膳を供養せらるゝゆへ、此餅一つをそれ程にほしがるではなけれど、汝が邪見慳貪に、未來惡趣に沈むを可愛さ不憐さに種々の神變を現じ、こゝまで汝を連れ來りて見佛聞法の縁を結ばせうと思ひ、餅を持つて歸りたのちや、此餅を一會の大衆へ供養せうとは思はぬか」と告げさせられたれば老婆は「それは難有う存じます、御供養は申したけれど、この大勢の御出家ゆへ此餅で行き届きますまい」と云へば、釋尊の仰せに、「それは苦しうなひ、供養せうと云ふ志さへあるならばよきやうに取計ふてやる」と、

如來の神通力を以て、千二百五十人の比丘衆及び八萬の大衆へ一つづつ配りて御歩きなされた、總人數供養しても、迦留陀夷尊者の所持せられし鐵鉢の中に、餅はやつぱりもこの如くちや「老婆これを見よ三寶の福田へ入れらるものは此通りちや、僅かな餅を大衆へ供養しても、尙あまりあるぞ、汝はこの餅に執心のはなれぬ淺間しき根性ちや」との玉へば、老婆申上るやう「イエ／＼只今不思議を拜みまするからは、何の執心がござりませう」と申す、そこで釋尊の告げ玉ふに「汝の執心未だ全く離れず、其證據を見せう」とて、彼の餅を傍の蓮池へ投げ込み玉へば、忽ち一とたたまりの火炎となりて燃え上りた、そこで老婆は中心より懺悔して深く佛敎に歸し遂に法

眼定云ふ目出度き證りを開かれたとある。

因縁 迦留陀夷尊者と波羅門

天竺舍衛城中に一人の波羅門がありて、迦留陀夷尊者に歸依し、常に御供養を申して居た、この波羅門の死なんとする時、世繼の息子に遺言して、迦留陀夷尊者に供養すべきやう申残して死なれたゆへ、息子は親の遺言を守り、怠らず尊者を供養をして居た、或時、波羅門の留守に尊者が波羅門の家にいたり、御齋をあがりて御座りたれば、五百人の盗人が押し入りて来たが、其中に器量のよい男が居たれば、彼の波羅門の女房が其男に思ひをかけ密かに通じた、其上女房の思ふやう、今日此様に不義をいたしたれば、夫に知られては我が命あやうし、他に恐るゝものはなければ

ども、かの迦留陀夷が告げようもしれぬで……と盗人に告げたれば、盗人等は毒喰は皿までちや、序にこの尊者を殺して仕舞て大勢より集りて手を切り足を切りなぶり殺しにして、馬糞の中へ埋んで仕舞ふたとある、此事が大王へ聞え、波羅門の家内どもは残らず成敗仰せつけられた、このこと諸の比丘達なき、傳へて、この因縁を釋尊に御尋ねなされたら、仰せに「この迦留陀夷が先生神主でありたとき、五百人の商人が一匹の羊を引き來りて、之を神に祭りて福德を祈れど云たれば、彼の神主が羊の四足を切りて祭られた其罪によりて地獄へ落ちて永々劫の間、苦んで居たが、今漸く人間に生れ我が弟子となりたけれど、其餘報がつきぬゆへ、此様な淺間

しき死様をしたのちや、其時の五百人の商人は今の盗人なり、其時の羊は波羅門の婦人これなり、羊の四足を切りたゆへ、其報ひで今又足をきられ手を切られて殺されたぞ」と説かせられた、この様な神通自在の聖者でも先世の業報をまぬかれ玉ふことはならぬのであります。

カワムラズイケン

河村瑞軒 【人名】

資性敏捷にして奇巧に富む、有名なる土木家なり、

河村瑞軒の廢物利用

河村瑞軒は江戸の人である、彼れがまた金持にならぬ極貧の頃に、京が大坂へ行いて何か職業を習はうと思ひ立ち、江戸を出發したが、旅費がなくなりて致方かなるから、大井川の邊からさうくあともごりをした、其時

金袋に半錢の錢もなるので、途上にして、ある西瓜の皮を拾ふて命をつないて居たが、塵芥の捨て、ある場所に古い雪駄が二三足あるを見て、フト心付き、其皮をもぎとりてよく洗ひ、三角に切りて細き竹に結びつけ、「蠅たき」を作り、蠅たきとよんで賣りあひたが、幸にも其日の夕暮には残らず賣りきりて、いくらかの金を得、それで其日の命をつなぎ、翌日からは、人のほきすてたる草鞋を拾ひあつめてそれをすきに切り、左官の家を持ちゆきて、之を賣りて生活をして居たケ様なる困苦を嘗めて遂に大なる金満家となりたのである。

カンクワ

感化 【世語】

師長の言葉に感動して善化さるゝを云ふ、

談叢 藤澤典獄と土手のおきん
 東京の典獄に藤澤と云ふ人がある、中村おきんと云ふ婦人の出獄に際し、同人の境遇を憐み、深く將來を戒しめ、再びかやうな所へ來ぬやうにと懇諭せられた、おきんは迷惑に思ふたか、初めの内は辛抱して居たものの、訓誨の度の懇切を加ふると共に、益々聞くのがうるさくなり、遂に堪えきれず「そんな説法は止して、早く出して下され」と云ふた、典獄が折角の親切も寸毛の効能がなかつた、このおきんと云ふ者は、十三才のをり北海道に渡り、其後處々を經巡ぐりて墮落し、其社會にて土手のおきんと異名を附けられし尤者である、典獄もせんすべなけれど、此儘にして置も不本意なればとて、氣を替へておきんに

向ひ、「そんなら説法は止しにせやう、然しおまへも久しく親の墓參をしなかつた、定めし戀ひしい事であろうと考へる、これにて墓參でもするがよい」と、五十錢銀貨一個を與へ、尙ほ此後からはからだを大事にするがよいと言へば、今の今まで懇切なる訓誨をうるさしと斥けしに引換へ、俄に落涙して深く其の厚意を謝し、從來の非行を悔いたと云ふことである、典獄も満足はしたものの、餘り變化の急劇なるゆへ、一時の刺戟であらうと考へたもの、念の爲め其後人を派して探らしめしに、曩に與へし五十錢は出獄人保護者に預け置き、改俊の状を現はしたと云ふことである、是等は感情の類加の外に、人生に於ける理論の力の甚微弱にして、感情の力の雄偉なることが

證せらる。

談叢 孔子聖人の感化

孔子聖人の春秋に古人を評するに随分酷い評じ方がある、「趙盾其君を弑す」とあるなどこれは實に酷い評じ方である、實際に趙盾は手にかけて殺しては居らぬ、然るに斯く酷な評じ方をなさるとは、一口にいへば孔子は随分人の悪口を云はるゝやうに聞えるが、然し孔子家語の中に「孔子の家に仕ふる下女や下男は、半年たゝぬ間に人の悪口を云はぬやうになる」とある、下女や下男と云ふものは、随分人の悪口を云ふて評するものぢやが、それが半年たゝぬ中に、人の悪口を云はぬやうになること云ふてある、そうしてみると孔子は書物の上では随分酷なことを書かれるが、實

際に奉公したものが善良になる處より見ると孔子の酷なのは人を愛する親切の心より出るゆへに、人が用いて實行するのであるから、これ等を指して感化と云ふのであらう。

カンシン 鑿眞

唐の揚州、江陽縣の人なり、天平勝寶六年に來朝す、始めて戒壇院を建て、大に律宗を唱へ、兼て台教を傳ふ、

談叢 鑿眞和尚と三戒壇

鑿眞和尚は日本に戒律の法門を弘めて人民を救濟したいと云ふ思召で、唐の玄宗皇帝の天寶元年に舟を雇して出發の途に就かんとする間際に故障が起りました、其故障と云ふのは外でもない冤罪の爲めに獄に投せられたのです、それから其翌年の天寶二年十二月に佛

像や經論佛具畫師等、八十餘名を率ひて出發せられました。が、今度は非常なる激風の爲めに遮られて飛んでもなる處に漂着せられた、それでも猶屈せず翌三年に出發せようと思はれたが、其間際になりて故障が出來て出發することが出來なかつた、それから天寶七年にまた舟を舩して出發せられました。が、今度も風波の爲めに餘所に漂着せられました、鑿真和尚が最初出發せようと思はれてよりこれで前後五回です、大抵の人であるならば、モハヤ志も屈して仕舞ふべき處であるのに、和尚は決して中止するやうなことはなされませぬ、ケ様に兎や角する中に自分の杖も柱ともなるべき弟子方も或は病死をなし、或は袂を分つと云ふ様な事があり、そのみなら

ず和尚も多年の辛苦艱難の爲めに眼病を患はれまして、あはれ盲目となられました。それでも最初の法を傳へて救つてやろうと云ふ志は依然として堅く、遂に天寶十二年十一月、遣唐副使胡應同船して出發せられました。今度もまた風波の難に遇はれたなれど、幸に覆船だけは免れ、天平勝寶五年の冬、ヤット薩摩國に着せられ、翌六年都に上り、戒壇を設けて授戒會を行ひ、先づ聖武上皇を登壇せしめて菩薩戒を授け、次に皇后皇太子より公卿百官等、授戒するもの百三十餘人であつたと云ふことでもあります、それより次第に評判が高くなり、天下の三戒壇と申して大なる戒壇を三ヶ所に設け全國の授戒者を司らしめたのであるが、今日より當時の事を考

へてみますると悲喜こももく至るのであります、今日よりザツと千二百年以前で、まことに交通不便な時代に、しかも齡七十にあまつた盲目の身でありながら、言語も通せぬ外國に渡來して、上は一天萬乘の陛下より下は百官の歸依を受けられたと云ふものは、弘法救濟の情が溢れ、かやうな自信教人信の活動となつたのであります、畢竟する處は我等に大慈悲の門戸を開かれたのであります。

カンソウ 關叟 【人名】

伊豫の人なり、俳句を以て名あらはる、

俳話 關叟と士朗

伊豫に風關叟と云ふ人あり、此人は風の妙句をよみしゆへ、時人之を呼んで風關叟と云ふた、或年江戸へ行いたが其歸り途に名古屋

へ立寄り、士朗と云ふ俳句の宗匠を訪ふた、すると士朗の申しまするに、「貴方は今江戸より御歸りのことでもあります、旅中俳句も澤山に出來たでありますから、ドーカ拜見致したい」と申されましたら、關叟が「中々御目にかける様な句はありませんが、只一句だけ不二の句を讀みました」とて、懐紙に認めて差出した句が、

風やたゞ白砂の不二の山

といふのである、それを見たる士朗は感心して「然らばこれに私が脇句をつけます」とて考へかけましたが、中々一寸脇句がつかぬ、其内に夜がふけたから關叟は寐てしまいました、た、さて翌朝になりて關叟は目を覺まし士朗の居間へゆきますと、士朗は徹夜して考へて

おります、そうして申しまするに、「急ぐ用事
 がなければ今日は逗留して下され其内に考へ
 つけるから」と申しまするゆへ、關叟も其意
 に随ひまして其日は見物に出かけ、夕方に歸
 りまして、「宗匠どうです句案は出来ましたか
 と尋ると、「どうしてもつかぬが、私はこの句
 について不二山のぐるりを心を通して數十度
 めぐるりあるき、あちらからもこちらからも
 不二をながめたれど、ドーも句案が出来ませ
 ぬ、貴方は何處から不二を見てこの句が出来
 ましたか」と尋ねた、關叟の答へに「丁度暮
 方の頃にも川を渡る時、左不二を見て出来
 た句です」と云ふて、士朗は横手を打つて「
 成程そうであるか」とて直につけました句が
 いらの川原に落る冬の日

士朗の熱心には實に敬服の至りではありませ
 んか、僅か一句の附句にても一晝夜考へても
 ぞ！してもつかぬゆへ、不二を見た場所を聞
 たら直に句案が出来た、これはすべて何事に
 ても熱心と云ふことがなければ成功せぬと云
 ふの一例證として、興味ある逸話である。

カニニン 堪忍 【術語】
 人の忍ぶ能はざる事を堪へ忍ぶを云ふ、堪忍は成功の
 基なり。

警語 京都人と東京人
 京都のものは土地が穩かなゆへ風呂屋の湯
 までがぬるい、東京は元來機性があらいゆへ
 洗湯の湯までがあつい、京都の者があつい
 へば、東京のものゝ云ふには、「これ
 くらいの湯があついと云ふて辛抱が出来ぬな

ら、地獄の釜は何とする、あついがわるけり
 や出てしまへ」と云ふと、京都のものも腹を
 立て、己が口で己が云ふのちや、いらぬ御
 世話ちやと互に口論して湯の中から出ると一
 枚の張紙がしてある、其文句が面白い、
 鶯は谷を出で、うめよ〜と囀る
 雀は藪を出で、たけよ〜と囀る
 ぬるきとても凍へもせず、あつきとても焼
 けもせず、洗湯人を殺さず、堪忍々々
 と書いてある、これを見て兩人ともになる程
 腹をたてるは悪いと合點が出来た、
 三度たく飯さへこはしやはらかし
 思ふまゝにはならぬ世の中

句 氣に入らぬ風もあろうに柳かな
 これは柳に寄せて堪忍の有様を詠じたもの

である、柳は西へでも東へでも風の吹くまゝ
 に動いておるで、西へ向きたいと思ふても風
 が東へ吹けば東へなびかねばならぬ、氣に入
 つたやうにばかり風は吹いてくれぬ、氣に入
 らぬ風はあつても、氣に入らぬからなびかぬ
 と云ふて我慢を張らず、只風の吹くまゝに動
 いておる如く、我々が世渡りをするについて
 も、萬事氣に入つたことばかりはないけれど
 も、娑婆は堪忍土なりと心得、何事にも堪忍
 を第一として、氣に入らぬ事でもいやらしき
 顔をみせず付合ふて行かねばならぬ
 この堪忍は成功の秘訣にして、家内安全の守
 り札であります。

談叢 中澤道二の堪忍、ナカザリドウニをみよ
雑録 馬琴の堪忍の箴「ハキン」をみよ

キの部

キカク 其角 【人名】

姓は榎本近江堅田の人なり、芭蕉翁を師として俳諧の奥義を極め十弟子の首なり、

俳諧 其角と明月

其角が明月を待受けて居られたれば、其年の十五夜が雨降りて月が見られなんだ、其時に。

一年の月を曇らす今宵かな

とよまれた、其翌年の八月十五夜は晴天であつて、殊に勝れた月見であつた、其時の句にも、

一年の月を曇らす今宵かな
と同じ句を申されたとある

キクチタケトキ 菊池武時 【人名】

勤王家なり、後醍醐天皇より錦旗を授けられ事を奉んとして成らず、遂に戦死す、

歌謡 英雄に迷信なし

菊池武時、勤王の旗下に参せんとする出陣の途上、楠田神社の前を過ぎ、馬踏して進まず、衆いふ、「此神前を馬上にて乗りゆくを怒らせ玉ふなり」と、武時の云ふやう、「我れ今朝家の難に趣く、もし之を止むるの神あれば邪神なり」とて、

武士のやたけ心の一筋に

思ひきるとは神は知らずや
と詠み、箭を番へて祠扉を射たさある。

キクチヨウサイ 菊池容齋 【人名】

徳川幕府の臣なり、狩野派の書を學んで一機軸を出し孝明天皇より、日本書史の號を賜ふ、

談話 石橋の繪畫

菊池容齋、始めは高田圓乗と云ふ人の門に入りて書を學び、熱心と勉強を以て成功して今尙世人に珍重せられて居ります、或時某侯より能舞の中なる石橋を金屏風に書いてくれよごたのまれた、容齋は承諾をして手附金五拾兩を下されよと申出た、侯の使者はその腹のきたなきにあきれたれど、云はるゝまゝに五拾兩を渡した、さて容齋は此金を懐口にして幕府の能役者たる觀世太夫の許に行き石橋の能を一曲舞ふてみせて下されよごたのんだ、而して五拾兩はその謝禮として差出したので

ある 觀世太夫は大に其熱心に感じ、日を卜し装束をこゝのへて舞ひましたが、如何にも其技倆の優れたるに驚きましたけれど、容齋は流石の老手でありましたから、その舞の終ると同時に、二枚の圖を製して示した、觀世もこゝはしかく、かしこはしかく、と己れの思ふ節々を語りて、遂に完全なる石橋の圖をなしたと云ふことであります、彼の使者も之を傳へ聞きまして大に愧ち入りたと云ふことである。

ギザン 義山 【人名】

京都の人、姓は三覺氏、字は宜照、信阿と號す、淨土宗の學僧なり、圓光大師行狀圖畫翼贊等書多し、

因縁 義山の修養

昔、京都に義山と云ふ大徳が居られたが、

或寒き夜平素より入魂なる客人に訪はれ、彼れ是れ四方山の話をする中に夜は更けて寒さはますます、甚しく空腹にもあるべしとて小豆の粥なりとも進せんものとて厨司に居る小僧を呼び起してこれを申付けられたが、如何なる譯か、待てども来ぬから和尚自ら勝手に入られた。客は憮然として暫く待つておると、人の泣聲が聞こえたので、こいつは不思議と耳を聳て、聞く所が全く和尚の泣聲である、コ、怪しからぬ事と思ふて耳を澄まして聞くと、和尚は、無始の薰習によりて折角の功德を奪はれたりとて、さめく泣き居られしが、暫くの後ち和尚が勝手より出て来たられたれば、客人は不審顔に「和尚には何故に斯くは泣き玉ひしや」と、再三其由を尋ねけ

れば、和尚の答へらるゝやう、拙僧は平生より日課として毎日念佛若干遍づ、唱へて、後生の爲めに慈悲善根を積み来りしが、今勝手に行て見れば、日来からよき客人の用にて備へおきし箸を、不心得なる小僧共が取出せり、今夜の客人はつね々心安く御出なさる方ゆへ、日用の品にてよきものを、分別なき小僧かなと思ひ、忽ち憤怒を起して小僧を呵責したが、後でつらく思ふに、今日積みたる功德善根も僅かなる貪欲より瞋恚の燭を起して煩惱の賊の爲めに奪ひ取られたるかと思へば、折角の修行も水泡に歸したりと、悲しさにたへず、思はず聲を立て、泣きたるなりと申されたと云ふことがある、修養に心がけのあつい御人は斯くの如きものである。

ギジヨウ

疑情 【術語】

疑は疑惑、情は情識、不了佛智の疑を指す、正信偈に「運來生死輪轉家決以ー爲所止」とあり、

歌

手に結ぶ軒端に近き清水にも

蓋とりて見よ有明の月

水は湛るてありても蓋がありては月は宿らぬ、後生大事の清水にも疑の蓋があれば御助けの月は宿らぬ、疑蓋無雜を信とす、兎角疑の蓋をこれよと仰せられる。

譬論

西瓜と火

西瓜を買ふときは赤いであろうか、白いであろうかと思ふ、これはなせかなれば、きつと赤いときまつておらぬからちや、湯を見ては冷かであろうか温かであろうかと思ふ、これは冷かなもあれば温かなもあるからちや、

ギジヨウ

されど火を見てはあつい冷いかと云ふことを疑ふものはあるまい、なせかなれば火は必ずあつたときまつておるからちや、今阿彌陀如来が我等が爲めに修行最中ならば疑ふも最もなれど、今は本願すでに成就し、淨土すでに建立したのむものを、必ず救ふの玉ふ勅命である、この勅命をきながら疑ふのは、丁度火がもしや冷かであろうかと思ふのと同じことであります、疑は物の不定なるより起るので、決定しておるものに疑はないのであります。

譬論

疔癩持の老人

疔癩持の老人が梅干の壺を見て俄に梅干が食いどうなり、一つ下されと乞ひたれば壺ぐるめに出した、そこで壺の中へ手を入れたは

よかつたが、手が出ぬゆへ、自分は勿論家内の人々、いろ／＼と世話をやけども抜けぬゆへ、亭主が金槌で壺を破つて出した、初め手の出なんでも道理こそ、手の中に一杯梅干を握つておつたからちや、梅干放せば苦もなく手はぬけるのである、それに梅干を放す事を知らなんだが不調法である、我等も疑心自力の梅干さへ放せば生死の壺はぬけられるが、この梅干はなすこがいやなら彌陀大悲の金槌で打破つてもうより仕方はない。

醫諭 浴衣と幽霊

夏のおぼろ月夜に若い嫁が便所にゆこうとして、裏口をあくれば、キヤート云ふて打倒れた、姑は何事が出来たかと思ふて飛びおきてみれば、殆んど氣絶せんばかりにふるふて

居る、「何ちや／＼」と尋ると「柿の樹の下に幽霊が……」と云ふ、「あれは御前浴衣を洗濯して干しておるのちや」と篤くと云ひきかすれば、「やれ／＼それで御座りますか、且那樣の浴衣でありましたか」と、姑の言によりて疑はれた、それから蚊帳の中へはいりてから、「嫁女あれは浴衣ではなぬ幽霊ぢや」と姑が申しても、「イエ／＼幽霊ではござりませぬ浴衣です」と、モハヤ再び疑はおこりませぬ。

因縁 匠石と郢人

匠石と云ふ大工、郢と云ふ處におる左官が鼻端に白土を塗ること、薄き蟬の羽の如きを斧をつかふておとすに、郢人自若としておるゆへ、過たずしておとす、世人大に之を賞賛

しました、宋の元君之を聞かれて、寡人の爲めにせよとて、臣下のもの、鼻の上に白土をつけて出てよと仰せられた、匠石が云ふには郢人は已に死せり、彼のものは拙者を信じて鼻を任すゆへ、その業が出来ます、貴方様の臣下の方は私を疑ふてござるゆへに、業は出来ませぬと申したれば、元君大に感心してかへしたまふたごある、我々が後生大事の鼻端の煩惱の土は、彌陀の匠石様、五劫永劫かためさせられ、彼尊には御無調法はなる、御任せ申しさえすれば、たのむ一念の時、一時に消滅と云ふて落して下さるけれども、何分我々は今の臣下の如く、助かるか助かるまいかどうであらうと任せかねるゆへ、助け玉ふ縁がなるのである、實に「疑は事の賊なり」と

は、最も至極なことでありませぬ。

因縁 須達長者の母

須達長者の母親は、非常なる佛法嫌ひにて釋尊を見ると逃げてしまふ、長者は「かし御法を聴聞させたいと思へども、致方がなるものですから、其趣を釋尊へ申上たら、釋尊の仰せに、彼れは燈光如來御出世の時に大般若の御説法の下で、たつた一字疑ふた罪によりて、百大劫地獄へ落ち、五百生畜生に生れ、今は漸く人間に生れ、六根具足しながら、佛法を嫌ふて聞く機がなるのである」と御答なされたことがある、虎がおそろいとか、狼がこわいとか云ふても、疑ほどのおそろしいものはなるのちや。

キチニチリヨウシン

吉日良辰

【衛門】

現世の幸福を断るより、方角の善悪を論じ、日の吉凶を擇ぶなり、涅槃經に「如来法中無有選二擇一」

設議

長治郎と鬼門説

伊藤長治郎は播州伊保の人であるが、幼年の頃より真宗の感化をうけ勤儉力行大に産を興し名を擧げた人である、その家政を繼續せられた時には、先の主人即ち自分の亡兄が財産を減損したる後であるから、困苦勦勵大に家道を恢復しようと思ひましたれど、未だたやすく其志を遂げることの出来なむ頃、友人某來りていふやう、當家には庭内鬼門の方位に雪隠あり、これ大に家運の回復を妨ぐるものなり、然るに君は真宗の宗規に拘泥して鬼門の雪隠を取のけざるは、祖先へ對して不

忠實である」と云ふたら、長次郎の答ふるやう、「苟くも勤儉力行さゑしたならば、方角なぞは決して心にかけるには及ばぬ、且つ我が祖先は皆真宗の信者でありたから、もし私が鬼門の妄説を信じて安心立命の立脚地を失ふたならば、たごひ一時の富貴を得るも死して祖先に對するの面目はなることなるので、不孝これより大なるはなる」と、終に從はずして雪隠尙今に存在しておると云ふことぢや、長治郎晩年人に語りて云ふやう、「此雪隠は子孫をして乃祖の堅志力行は他方の信心より起ることを思はしむるに足る」と、この一事を聞いてもその信念の如何に篤かりしかと云ふことが知れるであらう。

設議

吉良義英の吉夢

淺野侯の敵たる吉良義英は、四十七士に殺

さる、三日前の晩に、一富士二鷹三茄子の夢を見た、富士山ばかりを見てさへ吉夢ぢやと云ふて喜ぶのに、其上まだ鷹の夢、茄子の夢これは大極上々吉の吉夢ぢや、定めて近のうちに大名に取り立てられ、出世する前兆であるうと、一家一門を招きよせ、非常な盛宴をはつて吉夢を祝せられたが、其翌晩に首を切られ赤恥をかいた、二三日すると何者の仕業か、其門の扉に一首の歌、

そりやみ鷹わが茄子ここのあらはれて

夢みたやうな富士の死にざま

してみれば吉夢もあてにはなりませぬ、況んや吉日良辰をゑらぶなどは一種の迷信と云はねばならぬ。

設議

元日と眼玉

昔、大坂に古林見宜と云ふ名醫がありました、人が、或人の見宜に向ふて、「灸をするに悪日ありや」と問ひしに「あり」と答ふ、「我々にも覺へ得らるゝことならばごまを教へたまへ」と請へば、見宜答ふるやう「年中に灸をすまじき日は正月の元日なり、身體の中に灸をすまじき處は眼玉なり」と答へたところこれ日に吉凶なし、如何に吉日なりとも悪事をせば悪日なり如何に灸は効ありとも眼玉の上へすれば害ありと云ふ教訓であります。

縁談ががらりとかはるみくじ箱

人間一代の身のかたづき身の納りを、鬪を振つて出た目が勝負、こんな危い心中では萬物の靈長とは申されぬ、童子教にも「信力堅

固の家に、災禍の雲おこらず」と云ふてある別して真宗の御門徒は、現世利益和讃を何と頂かるゝぞ。

願力不思議の信心は 大菩提心なりければ天地にみてる悪鬼神 皆悉くおそるなり

句 咲くことに日をゑらばぬや梅の花

普請の柱立、嫁取り髻取りには日をゑらぶ我が佛教では涅槃經の仰せの如く、如來法中無有選擇吉日良辰、まいる日は吉日なり、まいれぬ日は悪日なり、名號の爺は積善の山へ信心の柴刈りに、信心の姥は光陰の流れ川へ懈怠の垢を洗濯に。

キトウ 義堂 【人名】

京都南禪寺の僧なり、空華上人と稱す、土佐長岡の人、

逸話 義堂和尚と妖怪

足利義滿の時に羽蟻多く飛べりて管領始め凶變の兆として憂懼したるに、或人これを義堂和尚に告ぐ、和尚曰く、世間の妖怪は只人の一念の中にあり一念不生前後際断すれば何の吉凶かこれあらん、是の如く觀する時、吉は他より吉、凶は他より凶、すべて吾に關せず、たい一念頓忘すれば、これ即ち安樂の世界なりと、幾もなくして羽蟻飛散し去つたといふ、羽蟻を以て凶變の兆とするは何たる愚見であろうか、凶變を惹起するものは羽蟻其物にあらずして、却て羽蟻を凶變と妄想する所の愚見其物であろう。

逸話 義堂和尚の黜勉

義堂和尚は道義殊に高く、座禪諷誦病といへどもやめられなかつたれば、御弟子が老體

にさはりてはと御諫め申したれば、和尚答へて、「ナニ露の如き人命、少しも惜しむに足らんや、もし勤勞の爲めに死せば、これ子の願ひである」といはれて、いよく劇しく勤められたそうですが實に敬服の至りではござりませぬか。

キトコウイン 木戸孝允 【人名】

本姓は和田、幼にして桂氏に養はれ、桂小五郎と稱す後、木戸準一郎と改む、孝允は其名なり、明治維新の元勳、

逸話 木戸孝允と音曲

木戸孝允が未だ一寒士たるの時であつた、消閑の爲に同輩と共に音曲稽古したが、孝允は伶俐な性質であるから、他の者より早く上達したのである、そこで音曲の師匠が孝允に

語つて「貴方は咽喉の素生が好いから、今一息で本職になれます」と云ふと、孝允は之を聞いて慨いて云ふには、「大丈夫たるもの、かゝる小枝を以て生計をなすべきでない、我が音曲を學ぶのは、唯無聊を慰める爲めである然るに案外上達して、本職にまでならふと云ふに至つたのは、恐く我が業を破るであろう」と、其日からは斷然稽古を廢めて、一生涯に二度と音曲を弄ばなかつたと云ふ、大事をなさんとするものは斯の如く心掛けねばなりませぬ。

逸話 木戸孝允の都々逸

維新の大業成りて後、薩長の兩藩動もすれば相軋するので、孝允公、大に之を憂ひ、ドーカ之を融和したいと云ふので、名和盟と

云ふ人などと共に周旋し、薩長の人々を招いて、宴會を開かれたことがある、席上公は筆を執つて、

梅と櫻を一時に咲かし

咲かした花の其苦勞

と、一首の都々逸を認められた、これは梅と櫻は薩長の兩藩を指し、咲かした花とは社會を指したもので、當時の政界諷し得て妙なりと云ふべしである。

逸話

目安箱

木戸公、維新の際に目安箱と云ふを設けて衆庶より建白書を投入せしめられたことがあつた、其中に太鼓様の圓形の繪を描きて、其中に

色と酒との二つの外に

誰も迷ふは皆この事よ、

金のかはりに鉛と云ひし

それは昔のことよ、

黄金の色の佛様さへ世に捨てられて

今はちはやのかみばかり、

と云ふ文句が記してあつた、これは其頃新に發行されし紙幣と廢佛論の流行とに對して、不平なるの諷刺なのであらう、此一事に徴しても、公の意を政道に用い玉ふことの深きを知ることが出来るのである。

キノクニヤアンザエモン

紀國屋文左衛門

人名

紀伊國加田浦の人、或は曰ふ熊野の人なりと、細行を修めず奇計を喜び、時々花街に豪遊す、紀文大盡の名たかし、

説書

紀文大盡の鰐鮫退治

紀文大盡と云ふて一時名をあげた紀の國屋文左衛門は、紀州熊野浦の生れで、小供の時分から度胸が大きくて、又不思議な策略家であつたと云ふことです、此人が十八の時でございいますが、熊野浦の海中に大きな鰐鮫が居りまして、他の魚を追ひ散らしたり漁師の船を顛覆したりいたしますので、此浦の漁師は永い間休業致しまして大層迷惑して居ましたが、文左衛門はこの事をき、ますと何を思ひましたか村人を大勢呼び集めまして、木の人形を澤山こしらへ、其人形の中へ毒薬をつめこんで、之をつんで大勢の漁師と一所に海上へ乗り出しました、すると例の鰐鮫はよい食物にありついたと思ひましたか、大きな口を

開きまして跳りあがつて船へ近付いてまいりました、文左衛門は之を見と直様かの人形を海中へ投込みましたが、暫くすると海上は一面に眞赤な波となりまして、大きな鰐鮫が海面へ浮いて出ました、斯くの如く大敵の鰐鮫を退治したものですから、村内の人々は神様の様に尊みました、文左衛門はこの鰐鮫の腹を裂いて見ますと、大きな革袋があつて、中に小判が千兩ありましたから、早速役所へ届けて出ましたれど、主のない金であるから悉皆文左衛門へ下されたので、文左衛門は此金を村内の貧民へ割當して施されたのである。

説書

紀文大盡の亡者丸

紀州第一の富源たる密柑の眞盛りが大層な暴風雨で船の往來が止つたものであるから、

地方の人々は、大に心痛し密柑はおい／＼下落して二百三文と云ふ相場になつた、これに引かへて江戸では十月の輔祭と云ふがおおい近付いて密柑の需用も非常に多いと云ふことを聞いて、紀の國屋文左工門は大に喜び、漁師から古船一艘を借り入れ、一人前百兩と云ふ大金（今の百圓なればさほどの大金でもありませぬが、其頃の百兩といへば、現今の千圓ほどの價値はあつたのです）にて船頭を雇ひ入れ、船頭十八人と自分と十九人が揃への經帷子で額の處へ三角の紙を張りつけた工合は此世から亡者です、依て船も亡者丸と名け、死ぬる覺悟で出かけたのちや、風はますます暴く海はいよいよ荒れ、危いとも凄しいとも譬へやうのない中を乗りきつて一晝夜あ

まりで江戸についたのだが、此冒險の一擧にて五萬兩ばかりの純益を得たと云ふことで、彼の名高き、

沖のくらしいに白帆がみえる

あれは紀州の密柑船

と云ふのは、此時の流行歌であるそうです、

キボウ 希望 【世語】

こひれがひ、のぞむと云ふ事、即ち將來の成功を豫め期するの謂なり、

譚話 饅飩屋と乞食

四十七士の中で名高き寺坂吉右衛門は、うごん屋となりて吉良家の模様を伺ふて居る、毎夜この附近で商賣をして居れば、時々吉良家の門番や下人共から呼び込まれる、ところが、其際に邸内の模様をよく／＼見てお

いて仇討の時の用に立てようと云ふの考へである、或夜例の如く商賣に出かけましたが、都合よく吉良家の下人共から呼びこまれ、四五杯のうどんを賣りて邸外へ出てみれば、一人の乞食が菰を着て寐て居る、フト其顔を見れば誰あろう御家老の大石内藏之助様である吉右衛門は非常に驚いたけれども、言を交へることもならず、それより十町ばかり隔つた處で、待つて居ると、乞食姿の大石は其處へ來られた、吉右衛門は目敏く之を見て、大地に平臥し「ア、實に忠義の爲めとは云へ、御家老様が乞食にまで身をやつしての御骨折とは、たい／＼恐れ入るの外はござりませぬ」と、感謝の辭をのべると、大石の云はるゝやう「義士の中には母親の自害を見捨て、出立

したのもあれば、妻を傾城に賣りてまで盡してくれて居るものもある、現在の困苦は容易ならぬけれども、やがて敵吉良義英の首級を打ち、先君の墓前に備へる時節があるで、それを樂みとして居るから、如何なる艱難を嘗め辛苦に遇ふても、さらに苦しいとは思はぬ、其方がうごん屋となりて仇家の動靜を伺ふも、己れが乞食に身をやつして其處此處を徘徊するも、皆是れ忠義の爲めより外はなむのでないかと互に希望をのべて別れたとある君が爲め木賣り竹賣り夜蕎麥賣り身を惜まざる義士のはたらき「望むは忍ぶの術なり」とある西該の如くで將來に大なる希望ありてこそ初めて現在の大困難をも忍ぶどころの勇氣が起るのである、

主君淺野侯の敵を討ふと云ふ大希望の下に、四十七士は種々なる困難を嘗めつくして、遂に其目的を達したのであります。

格言 希望は生命なり

面白い西洋の昔噺がある、さる村に至りて正直なる夫婦がありました、天災がうち續いて作物は出来ず家は非常に貧乏を致しまして、モハヤ浮ぶ瀬もないやうになりましたそこで夫婦のものは日々歎息をして泣いてばかりおりました、これでは仕方がない、叶はぬ時の神だのみと夫婦は一生懸命に神様を祈りまして、ドーカ福を授かりますやうにと願ひますと、神様も夫婦の誠心を感じられたと見へて、或夜夫婦の夢に枕頭に神様がたゝせられて、われ汝等の至誠に感じ、汝に一の

指輪を興ふべし、この指輪を持ちたれば、汝等の願事一つは必ず叶ふべし、何なりとも望む所を願ふべし、されど一つの願ひ叶ひなば他に如何なることを願ふとも叶ふことあるべからず、よくよく考へてよき望みをかくべしと云ふかと思はれは夢さめた、さて不思議なこと、翌朝神前に詣で、見ると一つの指輪がある、昨夜の夢と思ひ合はせて喜んで拾ふてかへり、さて何を願はんかと夫婦顔を鳩めて相談すると、女房がせめて田地の一反なりともほしいと云ふ、亭主がそれしきことはこれから一年働いて儉約さへしてゆけば出来ぬことはなからう、それに一つしかない望みを使ふてしまふてはならぬと云ふて、精を出して働きましたから、頓て一年の内には望み通

りの田地が買へた、あゝまづこの望みを使はずにすんだ、さて何を望まふかと云ふと女房の云ふには、牛もなく馬もないから、牛や馬が出来るやうに望まふではないかと云ふと、それしきことは何でもないと云ふて汗水をたらして働くこと、今度は一年たつた、ぬ内に、牛も馬も持つ身分となつた、すると女房が、この指輪に願へは何でも叶はぬことはなひと云ふのに、何もそんなに汗水出して働くことはなひ、大地主にても大名にても早く望んでなろうではなひかと云ひますと、亭主がいや／＼そんなことには此大切な望みはつかへぬ、お前も私もまた年が若いから、これから先き生命にかへるやうな望みが起らぬともいへぬ、其時に願ふても仕方がない、たゞ一

つの望みしかかなへぬと云ふのであるから、幸ひ田地もふへるし牛馬も出来たゆへ、今一稼ぎして何でも一番大事な望みの出たときに使はうではなひかと、一生懸命に働きますと其家はます／＼富み榮へ、數年の後には村中第一の金満家になりたが、どう／＼其指輪を使はずして夫婦は死んでしまいました、昔の貧乏に引きかへて其子孫は有福になつたと云ふことです、此話は味つてみると餘程面白いと思ひます、夫婦のものが目前の不満足に泣いて居たならば、何時までも貧乏でござりましたらうに、一點希望の光明が輝いて一生懸命に働いたものですから、終に福徳長者となつたのである、實に希望は生命なりとは此事であります。

キホウイツタイ 機法一體【術語】

機法と一體、離の意にして即ち淨土教の信念の他力なることを顯はせるもの、これ宗義の標目たり、

譬喩 月の光りて月を見る

月の徳を談する時は、見せる徳も見らるゝ徳も共に月の手元に成就してあると云はねばならぬ、これが機法一體の成就の南無阿彌陀佛と申すもの、然らば月に見せる徳があるから別に見るには及ばぬと云ふて、奥座敷に寐ておるまゝで月見はすむと云ふのが、十劫秘事の異安心、常流の御正意はそうではなる、奥座敷の闇中に居る人は、ケ様な徳のある月を見ずに居るから、此人々に對して、はやく出てみなされ、只今雲間に月がさるきつておるから……と勸むるが常流の御教化なので、無

善造悪の機の上にはやく彌陀をたのめくの御勸めはこのゆはれである、奥座敷の闇中に居る人この御教化を受けて、屋外へ出て月に向へば、立ち處に月が見らるゝ、

みな人の月を見んとて樂めど

月に我身を見られこそすれ
月に向ふ一念に、月に具ふる見せる徳の光りが我々の目に宿るゆへに月の光りて月を見るのちや、今も丁度其如くで無明疑惑の闇中に居る人に、六字のゆはれを得させうと思召しはやく彌陀をたのめよと勸めたまふ、この御勸めによつて、阿彌陀佛の我等を助けましますゆはれを聞けば、かゝる機までも御助け候へどたのまるゝのちや、この疑なくたのまるゝのは、更に我が機のはからいにあらず、

かねて佛の方に御成就の南無の二字が、衆生の心中に満入して下されたものであります、月を見ると、見心わすれて月を褒める、御助けを信受したすがたは、たのみながらたのみ心を打忘れて、御助け尊やとよろこぶ、これが他力安心の妙旨と申すものであります。

歌 南無と云ふそのふた文字に花さきて

阿彌陀佛に實はなりにけり
すべて花の咲かぬ木には實の結ばぬと云ふのが顯花植物の定義であるが、殊に梅の特質として花さくと同時に實を結ぶことは誰しもよく承知のことであるふ、これを蓮如上人は聞信の一念に喩へてよませられたのが只今の歌である、この歌のこゝろ南無と歸命する一念の處に如來の方より發願回向と譲り與へて

下さるのが、この六字丸々を貰ふたところちや、如來の勅命に信順した花がありて、これと同時に御助けの木の實を結ぶこと、恰も梅の花が咲くと同時に實を結ぶの理に應ずるので、たのむ一念にはなれぬ御助けのことちや

托鉢坊主

犬も食はぬと云ふ夫婦喧嘩に花を咲かせて大變なる亂痴奇騒ぎの眞最中、門口に托鉢坊主がホォーイと云ふて立つた、亭主が通らつしやれと云へど、やはりホォーイと云ふて立つて居る、そこで亭主が腹を立て、通れと云ふにまだ居るとは貴様は聾か」と云ふと、托鉢坊主は「御前は氣違ひだ」と云ひかへした、亭主はなほ「腹を立て、己れがどうして氣違ひだ、サア其氣違ひの譯を聞かう」と

腕まくりして立ちかゝると、「それが即ち氣違ひぢや」と云ふ、「なせ已が氣違ひか」、「サア其氣違ひの譯を云ふてきかそう、おれは物を貰ふ機で門に立つ、貴様はくれぬ氣で通れと云ふ、もらう氣のものと、くれぬ氣のものと氣が丸きり違ふからそれで氣違ひと云ふたのぢやとある、今大悲の親様が發願回向の熾斗つけてやろうと云ふて下さるのに、これが信心であらうか、あれが安心であらうかと、凡夫の方から信心安心の持ち物をもつて行かうとは、彼尊と私と氣が違ひはせぬか、御當流は機法一體佛凡一體函蓋相應能所不二。

キミヨウ 歸命 【術語】

梵語南無の譯なり、歸は趣向の義、命は己身の性命、即ち己が重んずる所の命を盡くして三寶に歸向するを

云ふ、○歸は敬順の義、命は諸佛の教命、即ち如來の勅命に従ひ奉るを云ふ、

句 八朔や踊つた足をかしこまり
八朔をたのみの節句と云ふて、八月は田の實の入る月で、その田に實のいる月の初めであるから八月朔日を田の實の節句と云ふたものぢや、それゆへ別家又は家來筋のものは本家へ行いては朔の御祝儀をのべるのは、人として米ほどのたのみはない、今家來として主人程のたのみになるものはないと云ふことを表したもので、依て米をよねと讀むは世の根と云ふこと、稻とは命の根と云ふことぢやそこで、たすける、たすかる、たのしむ、たから、たのむ、皆これ田の實と云ふ言葉の縁から云ふたもので、植付をする時には田を犁

ゆへにたすける、田が犁れるでたすかる、植付けをしてから水が絶へず地にしみこめば追付米を取らうと喜ぶゆへ、たのしみたのしむ田に米が出来れば御飯に焚いて呑みこむゆへたのむ、田に稻が出来て米が取れたら金錢のまわりがよいからそれでたから、今御當流に彌陀をたのめくと仰せらるゝは、空腹なときに飯を食ふ如く、地獄一定と腹のへつたわれ〜彌陀本願の御飯をいたせば、これほどのたのみはないのぢや。

句 ひこり立ならぬ女や藤の花

女は獨り立ちのならぬものと承知が出来たら夫に口返答は出来ぬ、たとひ夫が無理を云ふても、此身は貴方にまかしたのゆへ、殺しなり、生しなりと、どうでもして下されと、

夫の膝に身をうちつけ、しがみついて泣くのが上分別と申すもの、今も夫れで、我身は無有出誰之縁と知られたら、雜行雜修のはからいすて、後生の大事は彌陀にまかせ、たごひすかさされまいらせて地獄へおちたりとも後悔はすこしもござりませぬと大悲の膝によりもたれよりかゝりたが、歸命と云ふ味ひぢや

歌 戀しやと思ふ心はわれならで

母のこゝろのかよひ來るなり
幼き子の方に母を慕ふ心の起るのは、子供の胸の内に起すのなれど、もとは母の慈悲の念力より起すことなり、泣くを見ても、笑ふを見ても、ごうぞ一人前に育て、やりたひと云ふ、母の慈悲の念力のやるせなさか、子の方へ届いたればこそ、子の方から母ならでは

と慕ふ心が起る、今も其如く、たのむべきは彌陀如来、まいるべきは極樂浄土、私を御助け下さるゝ大悲の親様は、只彌陀一佛ぞと、こひしたふ心は凡夫の胸に起る信心なれどもおこさせて下さるゝは彌陀如来の御念力、一度はすくはずはおくまいとある大悲の御念力が届いて下されたればこそ、鬼より蛇よりおそろしい胸の中に、あやまりはて、彌陀をたのむ心がおこりたのぢや。

我が家

旅行をして草臥れた時には茶店にやすむと一時の疲れはやめと、夕方までには三里行かねばならぬ、五里歩まねばならぬと思ふと休みながら、行く先が案じらるゝ、其茶店に腰かけて休むより、宿屋について泊るは樂な

れど、明日はごうぞ雨がふらねばよいが、宿料が高くなければよいが、盜賊などか來はせまいかなと、先きから先きへ心配すると、中々安心して休まれませぬ、然るに三十日も五十日も道中して我家へ歸り、旅装を解いて寐處へはいりた時には、宿賃の心配もなければ明日の天氣のことも心にはかゝらぬ、只樂々身も心も休まるばかり、歸命の御字訓に舍息なりとあるがこの味ひぢや、舍はいると云ふ字、息は休息の息の字でやすむと云ふこと、我家へ歸りて重荷おろしてやれ、うれしやと足をのばした相だが一念歸命のたのみ味ひである。

怒り上戸

友達四五人集りて酒宴を催して居たが、其

中の一人が、始終自宅で腹を立て、妻子に怒鳴りつけ両親と口論して居ると云ふ悪癖のある男ですから、友達の者の云ふには「貴様はよく腹を立てるそうなが、なんどこゝで一度腹を立て、怒りて見よ、それが見物したい」と云へど、中々そう手軽く腹を立てらるゝものではなる、「サア早く怒れ、こゝで腹を立てよ」と云はれても、何だかきまりがわるくて中々腹は立たぬ、瞋恚の煩惱は我等の得手のことであれど、それでさへ、今こゝで腹を立て、怒ろうと思ふても、中々そうはまいらぬものぢや、況んや久遠劫來の初事に彌陀をたのむ心を發起するのは、凡夫の自力で起されぬ今の友達が酒を飲んで居る時に「久しぶりぢや一杯さそう」と杯を出したら、「おれは貴様

のやうな不實な奴の杯はいやぢや」と云ふて杯をひつたくりて向ふの男の顔へ投げつけたら、顔を眞赤にして怒り出すであらう、たのむ心を起すと云ふは此處の味ぢやぞや南無阿彌陀佛の杯を、宿善開發の酒宴の中に婆の胸底へ投げつけて下されたら、骨折らず苦勞せず、かゝる機までも御助け候へたとのみ奉る心はすぐに起るのぢや。

小作と地主

こゝに小作をなすものあり、收穫の時に至りて今年は十俵を納むべしと地主より割つけ、そこで亭主は女房に向ひ、「今地主へ米十俵を渡すときは、あとに飯來が三俵しか残らぬ、今年は夏の間は出來がよくて豊作の様に見えたが、存外虫がつき枯穂が多くありて收

獲がうすい、依て地主をたのんで一俵だけまけてもらおうではなるか、「私もそう思ふております、ドーズ貴方地主へ行いてたのんで下され」と、内の相談はよくきまりたが、地主が聞き入れてくれようか、くれまいかと、たのむ心が持ちかけるのぢやで、かの字が入る、處が地主の方から来て亭主に向ひ、此方の作られた田は豊作の様でありたが、よくよく見れば虫が多く枯穂が多いゆへに、定めて收穫も少かりたであらう、何も角も検見の時に己れが具さに見ておいた程に、十俵の中三俵だけ減じて進めます「安心せられよ」と地主のまことかきこへてみりや、まけてもらへようか、もらへまいかのかの字が、ぬけて御たのみ申すどすがるより外はなる、今各々や

我々は見かけは念佛行者の豊年なれど、心の中を調べてみると、貪欲の虫やら瞋恚の枯穂やらで眞實信心の米がなる、そこでこんなことで御浄土まいりがなろうか、なるまいかと此方から持ちかけたたのみゆへに、かの字が這入る、これは不定のたのみで間にあはぬ、今はこちらからもちかけてたのむではなる、大慈大悲の地主様から、十惡の凡夫五障の女人そちは見かけは善人の豊年なれど、善根功德の米のなることは、五劫思惟の検見の時に見ぬいたから、善根功德の年貢おさめるには及ばぬ、其機のなりで我をたのめ、心す助けろよの彌陀のまことが、我々の胸底へ至り届いて下されたら、往生かなるうかなるまいかのかの字がぬけて、只御助け候へと彌陀に

すがる思ひより外はなる、これがたのむ一念と申すものぢや。

警諭 罪人

王法の掟を背いて人相書のまわりて居る罪人が、まだ其上に人を殺し、血刀提げて逃げはしる、後よりは數多の警官が追ひかける、其罪人を呼込んで助けてやろうと云ものがあろうか、それを見るなり町中が皆戸を閉てかくれて仕舞ひ、誰一人も聲のかけてはなる、然るに向ふの方より一人の官吏が數十人の供をつれ、「ヤレ罪人こゝへ來い、其方の身は已にまかせよ、必ず助けてやる」と仰せられると、罪人が「ハイ私は掟をむいた大罪人、まだ其上に人を殺し、已に警官がおいかけますこんなものでも御かくまい下されますか」、

掟をむいて人を殺し警官が追ふて來ることはもごより承知ぢや、案じ氣はなる、己が命にかへて救ふゆへ、我をたのめよ己にまかせよ罪人見込んで助けるのぢや」と、呼びかけ玉ふ聲きいたら、任せよの言が邪魔になるの、たのめの御意がなければよいのと云ふ様な、小言のあらう道理はなる、よろこび／＼たのむ思ひより外はあるまひ、今も丁度其如く、各々方や我々は、三世諸佛の通戒の掟を背いた罪人ゆへ、永不成佛必墮無間と罪科が定まりまだ其上に十惡五逆の人殺し、謗法闍提の血刀さげた極重惡人、鬼の警官は追ひかける、いやが應でも此度は、獄卒共に引立てられ、火の坑さして落込むより外に仕方のなる身ぢやゆへ、十方恒沙の諸佛方へ血の涙ながして

たのんでも、悪人助けける力はなる、女人ばかりは仕様がなるご、門戸を閉ぢて寄せつけ玉はず、三千界を尋ても、一人も聲のかけてのなる、今日在座の我々に、拜む大悲の彌陀一佛がふみ止りて立向ひ、悪人其儘我をたのめ女人そのなり本願信せよ、助けける親はおれちやぞよと、呼びかけ玉ふ勅命の、御請の出来ぬ道理はなる、しかし私はあまり罪が重い障りが深い、これで助て貰へますか、案じるなもごよも罪は承知の上、正覺の命にかへて引受るの、仰せ一つが聞えてみれば、たのめの御意が邪魔になるの、任せよの仰せが迷惑のと、小ごご處か不足處か、落る心へ落さぬ御意の聞えたりは、世話いらすよろこびく安堵して、よりかゝりよりたのみ、御たすけ

ご候へと仰せにしたがい奉る思より外はなるこゝが歸悦の相ぢや。

醫諭 縁談

人の家の娘でも息子でも、この方へもりたいなり、やりたいなり、が、身代は提燈に釣鐘、つりあはねども、あそこへならばやりたいのこゝろあり、あの子ならばもりたいのこゝろがある、先方では何にも入らぬ、着の身着のまゝとは云はるれど、せめては長持一掉はやりたい、まんざら上着一枚なしでもやられまいと云ふ、すこしの力味心があるからして、それならやりませうの相談が出来ぬのである、そのまゝながらの言に従ひ、此方の力味心をさつぱりやめて、丸の裸のまゝで左様ならばご受けてみよ、立處に相談はさま

るのぢや、今も助けたいの親様と、助かりたいの我等と、出合ふておりながら、まんざらこれなりではあるまい、ちつとはどうかならねばなるまいの力味心があるゆへに落付けぬのであります、その力味心をやめて、ごともなろうとて、ならぬと我が身に介性のなきことが知れて、いよゝゝ左やうなればこのまゝでござりますかどうしてみれば、其心のありだけが、直に後生たすけたまへのたのみ心であります。

醫諭

返事番

親にせよ主人にせよ、十圓金を貸して下されごたのんで見ても、返事のなる間は落付かれぬ、貸してくれるに違ひはなると思ふて見ても、返事きくまでは安心が出来ぬ、たのむ

ものを助けるとある仰せをきいて、たのみかけて見ても、彌陀がごふすとも御返事がない、極樂浄土は見届けず阿彌陀如来に應對はせず、御返事がないゆへ落付が出来ぬ、そこで世間一同に迷惑するはこゝ一つ、ならふ事なら御姿でも拜みたい、御返事でも聞いて落付たいと、まごつくものが多い、餘宗餘門に於ては一日に一萬二萬と念佛をこなへ、稱へた力でこれで極樂まいりに間違ひなると思ふて見ても、阿彌陀様はよしとつむかつしやつたやら、いやとかわりをふりて御座るやら見届けることが出来ぬゆへ安心がならぬ、そこで臨終來迎をたのむ、即ち來迎が御返事、來迎の御返事きいてそこで安心する、最もな事ぢや、然るに御當流に於ては、御返事きく

には及ばぬ、來迎を待つには及ばぬ、名號のゆはれを聞き開かれた一念に、死なぬ先から死にゆく未來は極樂淨土と、安心が出来るとあるが祖師聖人の御勸め、これが愚かな胸にはわかり兼ねることで、返事きかずに落付かれる譯が腹へはまり兼ね、そこで當流には聞く一つが肝要、返事きかすとも來迎拜ますとも聞く一念に決定の信になられる名號のゆはれを懇ろに聞けと御勸めあらせらるゝ、全體御返事聞いて落ち付くと云ふは、捨てた諸佛と見違へて居るからちや、返事聞いて落ち付くと云ふは捨てた諸佛をたのむ時のこと、大蛇は見ることも女人を見るべからずと、逃けさせられた諸佛を追ひかけて、そうはおつしやらずに御助け下されと、おしかけてたのむ時は

御返事きかにや落付けぬ、阿彌陀如來は其諸佛のすてさせられた悪人女人を正客と見込んで、助けてやろうとあるが彌陀の勸命、それに御返事きいて落付くと云ふては、捨てられた諸佛と、正客と見込ませられた阿彌陀様とを同様に心得ておるからちや、阿彌陀如來はこちらから向はぬ先きに、罪は如何程ふかくとも我を一心にたのめ必ず助けてやろうと聲はり上て御呼びづめゆへ、其呼聲をうけこむ一つ、其受け込み心が助け玉への一と思ひ短かく云ふと、こちらから返事の番ちや。

他人と親

家來が主人にたのむにも我が忠義のまことを主人にくみ取つてもらはねば奉公はつとまらぬ、妻が夫をたのむにも貞節のまことを夫

に受取つてもらはねば生涯の給仕は出來ぬ、貧乏人が金持をたのむにも間違ひはせぬと云ふ眞を向ふへ呑み込ませねば壹圓の金でも借る事は出事ぬ、然るに親をたのむはそれと反對で、子の眞を親から受取つてもらうではなる、親の眞を子の意に受取るのちや、子を思ふ親の心のわりなさを

わけて半分親を思ひね

と狂歌堂の申された如くで、親が子を思ふ十分の一子が親を思ふたならば、孝行者と云はるゝこの歌の意、今もそれと同じ事で、諸佛如來をたのむには此方の信心のまことを諸佛如來に押し向けて、我が眞を向ふから受取つてもらはねばならぬ七日のものなら二七日又は三七日と、我がたのむ信心が深ければ神や

佛に納受がある、それゆへ神や佛をたのむには、精進潔齋するやら斷食するやら、此方のまことを運ぶに力を入れる、阿彌陀如來をたのむはそれとあちらこちらで、行者のたのむまことを如來様に受取つてもらうではなる、如來様の助けてやるぞよの御まことを行者の方へ受取るのちや、こゝが親をたのむに御諭へなされる所である。

權兵衛と八兵衛

權兵衛が八兵衛を呼ぶる時には「オイ八兵衛」と云ふと八兵衛は「何ぢやい」と答ふるこれは呼んだ聲と答ふる聲とが別々ぢやで、當流安心の御諭へにはならぬ、當流の安心は呼ぶ勸命と受ける領解とが全く一つなので、山の頂でオ、オと云へば、其オ、イの聲が

谷間へひいきて、オ、イと答ふる如くである
彌陀の勅命のありのまゝ、が行者の胸へひいき
あらはれた一念歸命の信心であるから、彌陀
の勅命が六字なら、行者の領解も六字である
これが御傳鈔上卷 第七段の「善惡の凡夫と
もに佛の方よりたまわる信心」と云ふ處であ
ります。

【醫論】 乞食と渡船

二年も三年も長旅をして旅費はここへく
つかい果し、自身の着物まで賣りて一厘の錢
もなると云ふ悲境に陥りたが、一の大河へ向
ひたるに、人は皆渡し舟に乗りて先へ渡るけ
れど、一厘の錢もなると云ふ有様ゆへ乗りた
いけれども乗られはせず、其内には暮れる
雨は降り出す乗らうにも錢はなし乗らねば川

は越えられずと云ふ場合になりたら、事情を
打ち明けて船頭をたのむより外はなる、今我
々も久遠劫來の迷ひの長旅に、善根功德の旅
費はもたず、智慧戒行の雨具はなし、煩惱惡
業の雨はふる、末代濁世と日は暮れかゝる、
向ふは生死の大海、彌陀弘誓の船はあれど助
けらるべき縁も手がりもなし、仕様のなむ
處で阿彌陀様ぞ一ぞ助けて下されと彌陀の船
頭をたのむより外はなる、ケ様に心得て居り
はせぬか、こんなたのみ心をかへて居るは
自力根性ぢやぞや、當流のたのむはそうでは
なる、我子の歸りのおそいのを待つて今日も
ごるかくと待ちこがれておる處へ、我子の
姿がチラリと見えるなり「サア乗れ」と船こぎ
つけて下さるは親ばかりぢやぞ、「彌陀觀音大

勢至のせ玉ふ、「サア末代の凡夫よ五障の
女人よ罪は如何程ふかくとも必ず助ける彌陀
ぢやぞよと、先手の呼び聲のきこる心は、や
れうれしやの思ひより外はなる、これが彌陀
をたのむ一念の味ひと申すものぢや、

【醫論】 冬至と夏至

冬至とは冬の最中に至りたこと、夏至とは
夏の最中に至りたこと、元來この至の字の文
字の造り方が上に一の字を書き下に土の字を
書き、其一と土との中間へ片假名のムの字が
かいてある、上の一は天を票じ下の土は地を
票じ中間のムの字は鳥を票じたもので、天か
ら鳥が羽をひろげて地へ下るに、木の枝や家
の屋根にとまりて居ては至りたこと云ふもので
はなる、大地の土に足をおろした處が至りた

と云ふものぢや、モウこれより行きやうのな
る處へ行きついたを至りたこと云ふので、冬の
最中を冬至と云ひ夏の最中を夏至と云ふので
ある、行卷の中に歸命の御字訓を上げさせら
れてある、其第一に歸の言は至なりと仰せら
れてあるがこの味ひぢや、たのめ助けふの御
勅命、口にかけるばかりぢやなる、心の底ま
で至り届いて下された處が彌陀をたのむ一念
である。

【因縁】 一休和尚と蓮如上人

一休和尚の歌に、
阿彌陀にはまことの慈悲はなかりけり
たのまぬものは助けたまはじ
と云ふがある、これは多くの人々の不審とす
る處であるから、一休和尚が多くの人々の代

表者となりて詠せられたものである、阿彌陀
 如來も眞實の御慈悲があるならば、たのむも
 のたのまぬものゝ區別をせずして、ことごとく
 く御助け下さればよいのに、たのむものを助
 けふとあれば、其半面にはたのまぬものは助
 けぬと云ふことになるゆへ、まことの慈悲と
 は云はれぬと云ふ歌のこゝろです、之に答へ
 たまふ蓮如上人の歌に、

武藏野の葉毎に月は宿れども
 露なき草に月は宿らじ

とある、月はひとしく萬里を照せども、露の
 なき草には宿るべき縁がないで月は宿らぬ、
 彌陀は十方衆生をひとしく助けたいが腹一ぱ
 いの御慈悲なれども、後生たすけ玉へたの
 まぬものは露のなき草と同じく助けべき縁が

ます「サア其味ひぢや、すい」と云ふ思ひは
 我が機ではおこらぬ、梅のすいと云ふ誠が
 届いたゆへ、それですいと云ふ思ひになつ
 たのぢや、たのむ一念が其如くで、地獄一定
 の泥凡夫を呼びかけて、其機のなりで我をた
 のめ必ず助けてやろうとある、先手の勅命の
 聞へた腹ありだけが、骨おらず苦勞せず、至
 心信樂己れを忘れて、かゝる機までも御助け
 候への思ひより外はない、これが彌陀をたの
 む一念ぢや」と、くれぐれ御示し下されと思
 ふなり、夢はさめた、これ兼縁が心中のわづ
 らひをはらしてやりたひの御慈悲より、蓮如
 上人は夢中にあらはれて御教化なされたもの
 でありませう。

滑誓 長吉と看

なるから助からぬと云ふ御返答である。
 因縁 兼縁夢中の教化
 蓮如上人の御弟子に兼縁と云ふ御方がある
 この御方は上人の直の御弟子でありながら、
 彌陀をたのむと云ふ處が領解が出来ないと云
 ふて、始終歎いてばかり御座つた、其中に蓮
 如上人も御遷化になり、誰に尋ねる方もなく
 獨りくよ／＼と心の中に案じ煩ふて居られた
 或人の夢に、上人がフトあらはれさせられ、
 兼縁に向ふて仰せらるゝやう、「汝はたのむ一
 念と云ふことに案じ煩ふておるが、其たのむ
 と云ふは骨のおれることではない、只如來の
 勅命、たのめ助けふの仰せの聞き開かれたな
 りがたのむ一念ぢや、兼縁、其方に尋ねるが
 梅と聞たら何と思ふか」「ハイ、すいとと思ひ

お三が臺所で肴を炙りて居ると、奥からお
 三／＼と呼び立てられる、「長吉どん一寸この
 肴を見て居てよ」と云ふて奥へ行いた、丁稚
 の長吉はソツと見て居ると、やがて猫が来て
 其肴を喰はへ、椽の下へはいりてムシャ／＼
 と喰ふ、お三臺所へ出て、「長吉どん肴見て居
 て下さるか」と云へば、「ハイ猫が喰ふのを見
 て居りました」と云ふたそうな、肴見て居て
 下されとは猫に取られなと云ふことぢや、今
 彌陀をたのめとは信を取れと云ふことぢやぞ
 や。

滑誓 田舎者の京まいり
 北海道の山奥に住む女が、一度御本山へ參
 詣したひと云ふ熱心から、或年の春、二十七
 日の御速夜に着京する様にと思ふて、はる

く上京した、京都へは豫定通りに着したものですから、早速御本山の大師堂へかけつたが、丁度御速夜の勤行の真最中でありた、参詣人の中を押し分けて行馬の側まですゝみ御真影様へしみと御禮をなし、傍の参詣者に向ふて尋るには、「善知識様が早く拜みた

拜まれませぬかへ、それあの向ふに紫の御衣に赤い御袈裟で、今それ善導獨明佛正意の御調聲が上りておるのに……」と云へば、其女は怪訝顔で「フムあの御方が善知識様ですか、それではやはり人間ですね」と云ふた

きいても、大悲の親心をきいても、いつもたのまれませぬと泣いてばかり居るのである。

ギヤクエン

逆縁 【術語】

病氣災難等の逆境に立ち始めて向上求道の心をわす

設語 逆縁の恩寵

隆寛律師の捨子問答に、我々の世渡りは難風にあへる舟の如しと喩へてある、天氣晴朗なれば、日の暮るゝも忘れて舟の中に騒げども、俄かに空かき曇り、風が起り波が立つたらば、急いで向ふの岸へつきたいと思ふであらう、今も此世が思ふまゝになるならば、娑婆を遊山場の様に心得て、臨終の日暮れまでざわくこと無益のことに年月を送なれども、

ギヤクエン

大病貧苦災難など、天氣模様が変わり難風にあへば、自ら浄土の岸へ着くことを急ぐおもいもおこり、

うきことのかさなる身こそ嬉しけれ

さらでは如何に彌陀をたのまんとある法然聖人の御歌を實地に味ふことが出来るのであります、佛の大悲より後生知らずの私共へ病氣を與へたまひ、貧苦を與へたまひ、災難を與へたまひたのでありて、これより佛法の大海へ引入したまふ方便であるかと云ふことが、深く味はるゝのであります。

設語 慈達和尚の悔悟

慈達和尚は美濃の人で、諸宗の章疏殆んどきわめざる事なき程の學匠でありました、或時相宗の奥義を案じて深更まで机により、フ

ト立ち上られました。物がけつまつき、柱に行き當りてした、か頭を打たれました。この時豁然として反省せらるゝに、「我れ僅かなる學問にはこり、斯くの如く前後を覺るざるこそイト淺間敷。これ一大事の爲めにせずして名利勝他を好むより起るのである、この憍慢の義解なんぞ生死に敵すべきや、凡そ學問の要は出離にあり、尺を行するは丈を説くに勝る」の古人の語を感銘せられたり、後、病に臥して、靈芝の

聽レ教參禪 逐外尋
未ニ背回首一沈吟一
眼光 欲落前程暗
始覺 平生錯用心
の頰を讀むに至りて、大に哭泣し弟子に告げ

て曰く、ア、病はこれ道心の智識なり、我れ今迄外を尋ね求めて今日に至りたること、あやまりれることを知る、もし此度の病癒なば我々如説に修行すべしとて、さめく泣かれたり、病癒へて後ち忽ち從來の所學をさしおき城州の炭山に引こもりて、一向專修の念佛者となられたとある。

譚 書伯逸見一信

逸見一信は號を顯幽齋といふて、深川の或商家の子である、幼い時から書が好きであつたが、未だ別に師匠について學ばなかつた、平生兎角兄に疎まれて居たが、二十二歳の時、而も正月元旦と云ふ大吉日に兄から幣で打擲されたので、一信は大に發憤し、二度我が家に歸らないと誓つて、家を飛び出し狩野素

川の飯焚となつた、生來、書が好きなる者であるから、門生等が書の稽古をして居るのを見て、自然に自得し、水で板の間に書いたりして、三年もたつと、大に書の趣向を悟つたのである、ソコで自分は書工となつて名聲をあげやうと思ふて、主人の家を出て、偶々兩國橋を渡るに、獨りの易者が居つて、袖を引いていふには、「君には異相が現はれて見えるが、キツト何にか希望を懷いて居るであらう」と、自分の家に連れて行き、色々話をして、易者は一信の將來有望の人物であること見込むたのであるから、自分の女を妻はせ、それから淺草福井町に茅屋を借り受け、看板をかけて、板下類や仕込物などを書いて、傍ら修業をしたかころが、見るまに書道が進み、殊に佛書

を能くしたものであるから、遂には芝増上寺の僧侶の眷顧を受け、一生の目的を達して法眼となつたといふことである、現に増上寺に秘藏する有名な五百羅漢の圖は彼が新案を凝らして書いたものであるといふ、逆境の恩寵とは蓋し逸見書伯などを云ふのであろう。

雪中の火傷

三人づれて雪道を歩んで居ましたが、「こゝろゑて居ながらすべる雪の道」とある句の如く、三人ともに雪道へ轉んだ、二人は寒い々々云ふてふるいながらおきたが、一人はあついで云ふて叫びました、二人は其意がわからぬ、滑稽なればともかく、雪の中でこけてあついと云ふ道理はなるに、あついでとは何事ぢやと云ふと、今の男の云ふには、

滑稽でも何でもなる、あついからあついと云ふので、事實ちやと云ふた、そこで段々しらべてみるに、あついと云ふたも道理で、こけた拍子に懷爐の火が懷にこぼれて、それであつい／＼と叫んだのでありたそうなる。信心決定の人が逆縁に遇ふても御法を喜ぶのがそれと同じことぢや、信心の懷爐をもつて居ますから、よいにつけあしいにつけ、難有や々々喜ばるゝのであります。

ギヨウエン

行圓

【人名】

近江園城寺の僧なり、詔を奉じ仁海僧正と雨を祈りて驗あり、



革堂建立の由來

革堂の開基たる行圓上人は、豊後國速見郡の人である、壯年の頃には鳥獸を獵するを

嗜み常に山野をかけめぐりて、遊獵に身を委ねておりました、一日、山中に入りて牡鹿を逐ひ、弓に箭して之を射ましたが、箭が其腹に當りて、切口やぶれ、鮮血淋漓として流れ出で子鹿は血染めと成りて出ましたを、親鹿は大に之をいたわり、獵師の近寄るもかまわず、子鹿の腹より流れ出る血を一心に舐めておりましたを見て、流石の獵師も不便に思ひ目も觸れずして見て居りしに、親鹿も次第に弱りて、遂に息絶え死にました、ア、畜生でさる恩愛かほごまでなるに、人間として徒らに生けるを殺すことの腹黒さ、凡そ生ある者いかに親子兄弟なからんや、殺されたる者の殺せし者を怨むは勿論、その妻子が怨念なんすれぞ殺せし當人に報ひざらんと、今更に其

身の先非を後悔し、さるにても此鹿は我身の爲めの善知識であるから、其鹿の皮を剝いで衣の上に纏ひ、剃髪して名を行圓と改め、所々方々と巡禮修行して、邪見の輩の感化しました、京都は繁華の土地であるから、定めて邪見の徒も多いてあろうと思ひ、京都に出でましたが、鹿の皮を着たる事とて、多数の人の目をひき、其所以を聞く者あれば、直に自身の出家發心の因縁を物語せしゆへ、世に革上人と異名せられたさうです、常に觀音を念じ普門品を讀みけるに、或夜の夢に異僧あらはれ、觀世音の靈佛を望まば、下賀茂の神前に神木として注連はられたる、いづれの世よりありとも知れぬ桑の木を以て、千手觀音の像を刻むべしとの靈告を承けた、翌朝、

ギヨウカイ

下賀茂へ參詣し、其夢の御靈告の趣をのべました處、社人も昨夜明神の夢告をうけ、疾に上人の來らるゝを知りておりましたとの事に、早速に木挽を雇ひ、伐りて上人に與えましたれば、上人は難有さの涙にくれ、其木を伐りて、一條小川の庵室に歸り、一刀三禮して千手觀音の尊像を刻み、三年三月にして成就しました、即ち洛中洛外を勸化して信男信女を啓導し、終に美觀を備へたる堂宇を一條に建立し、行圓が願望成就との意味にて行願寺と名けた、されど世人は革上人の建立せられた堂宇なりとて、革堂と呼びなしたのである。

ギヨウカイ

行誠

【人名】

増上寺第七十一代にして近世の大徳なり、